

# 高遠宮の原遺跡



昭和 52 年 12 月

高遠町教育委員会

長野県上伊那郡  
高遠町長藤中条  
**宮の原遺跡**

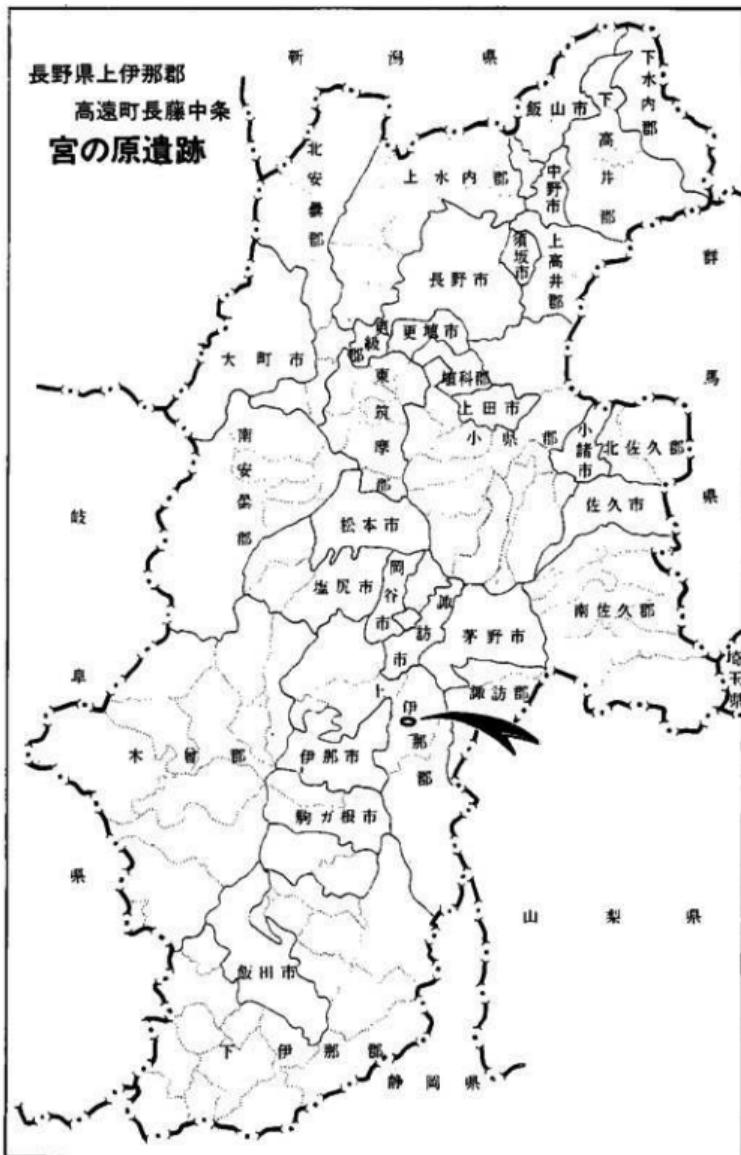


図1 高遠宮の原遺跡の位置

# **宮の原遺跡発掘調査報告書**

**昭和52年12月**

**高遠町教育委員会**

# 高遠宮の原遺跡発掘調査報告書

## 目

序	9
例　　言	10
I　遺跡の位置環境	11
1 位　置	11
2 自然　環　境	11
3 歴史的環境	12
4 宮の原遺跡の由来	13
II 予備調査	13
1 統合小学校校舎建設に至る経緯	13
2 分布調査の準備	13
3 分布確認状況	15
(1) 調査経過	15
(2) 分布状態確認状況	17
(3) 出土遺物	20
A 縄文土器・石器 縄文時代に属する遺物	21
B 土　師　器	21
C 須　恵　器	21
D 陶　器	21
(4) 1部発掘調査状況	23
A 北　遺　跡	23
(1) 第1号住居址	23
(2) 第2号住居址	25
(3) 遺　物	26
B 南　遺　跡	27
(1) 第1号土塹	27
(2) 溝状遺構	29
遺跡保護についての所見	30
III 本発掘調査の経過	32
1 調　査　経　過	32
2 調　査　に　つ　い　て	33
3 発　掘　日　誌	34
4 発掘調査概要	37
IV 遺　構　遺　物	42
1 縄文時代遺跡	42
A 遺　構	42
(1) 第1号住居址	42

## 次

(2) 第7号住居址	44
(3) ロームマウンド	46
(4) 土　城　群	49
B 遺　物	63
(1) 縄文土器	63
第I群土器	63
第II群土器	63
(2) 石　器	82
イ 中型石器	83
ロ 黒曜石石器集1	88
ハ 黒曜石石器集2	88
ニ 石斧・磨石1	88
ホ 石斧・磨石2	91
ヘ 磨　器	91
ト　回　石	92
チ　石　皿	92
2 歴史時代遺跡	93
A 遺　構	93
(1) 第2号住居址	93
(2) 第3・6号住居址	96
(3) 第4・5号住居址	98
(4) 柱　列　址	100
(5) 集石土塙	101
B 遺　物	102
(1) 第2号住居址出土の土器	102
(2) 第3号住居址出土の土器	102
(3) 第6号住居址出土の土器	102
(4) 第4・5号住居址出土の土器	104
(5) 金器類と鉄津	107
V ま　と　め	108
1 縄文時代早期の遺跡について	108
2 平安時代遺構について	109
おわりに	
高遠町民のみなさまへ	111

## 図 版 目 次

図1 高速宮の原遺跡の位置	表紙裏
カラー図 高速宮の原遺跡の遠景	5
* 遺跡の発掘開始	5
* 平安期住居址（第5号）	6
* 出土の鉄滓	6
* 銅文早期住居址（第7号）	7
* 高速宮の原遺跡オセンベ土器状況	8
* 発掘員一同	8
図2 遺跡の位置・環境	10
図3 宮の原遺跡の地形	11
図4 遺跡グリッド設定図	15
図5 試掘概入式	16
図6 試掘地北遺跡全景	16
図7 試掘地発掘風景	16
図8 試掘地南遺跡全景	16
図9 各地点地層横断面図	17
図10 試掘坑出土遺物実測図（1）	20
図11 試 稲 城	22
図12 試掘坑出土遺物実測図（3） 磐恵器・陶器	22
図13 試掘坑出土遺物実測図（4） 石 器	23
図14 第1号住居址発掘状況	23
図15 第1号住居址実測図	24
図16 第1号住居址北壁面地層図	24
図17 第1号住居址東壁面地層図	24
図18 北遺跡第1号住居址出土遺物（土器類）	24
図19 第2号住居址	25
図20 第2号住居址全景	25
図21 第2号住居址カマド	26
図22 北遺跡第2号住居址出土土器実測図	26
図23 土被基盤図	27
図24 第1号土址（土塙墓）実測図	27
図25 土被基盤出土遺物状況	28
図26 供獻土器出土状況	28
図27 第1号土址出土遺物実測図	28
図28 溝渠址の発掘	29
図29 - 図30 溝渠址及び出土土器	29
図31 南追跡全景	30
図32 南追跡地帯断面	30
図33 南追跡発掘風景、西方より	33
図34 南追跡発掘風景、西南より	33
図35 南追跡発掘地全景	35
図36 追跡見学団に発掘状況の説明風景	36
図37 宮の原南遺跡全景図	38
図38 第1号住居址 平面実測図	42
図39 第1号住居址 全 景	43
図40 第1号住居址 土器出土状況	43
図41 第1号住居址 周辺土址（発掘中）	43
図42 第7号住居址 実測図	44
図43 第7号住居址 発掘状況	45
図44 第7号住居址 周辺土址群	45
図45 ロームマウンド 第2号・第3号址実測図	46
図46-1 ロームマウンド 第2号・第3号址の発掘断面図	47
図46-2 ロームマウンド 第2号址断面	47
図46-3 ロームマウンド・第3号址断面	47
図47 ロームマウンド 第1号址実測図	48
図48 ロームマウンド 第1号址断面	48
図49 ロームマウンド 第4号址	49
第2表 土址要目表	49

図50-1	土塙実測図(1).....	54
図50-2	土塙実測図 同断面.....	55
図51-1	土塙実測図(2).....	56
図51-2	土塙実測図 同断面.....	57
図52-1	土塙実測図(3).....	58
図52-2	土塙実測図 同断面.....	59
図53-1	土塙実測図(4).....	60
図53-2	土塙実測図 同断面.....	61
図54	土城部発掘状況の部分.....	62
図55	縄文式土器出土状況.....	64
図56	縄文式土器拓影(第Ⅰ群).....	65
図57	縄文式土器拓影(第Ⅰ群・第Ⅱ群).....	66
図58	縄文式土器拓影(第1号住居址出土).....	67
図59	縄文式土器拓影(第7号住居址出土-1).....	68
図60	縄文式土器拓影(第7号住居址出土-2).....	69
図61	縄文式土器拓影(第7号住居址出土-3).....	70
図62	縄文式土器拓影(土塙群出土).....	70
図63	出土縄文式土器第Ⅰ類.....	71
図64	出土縄文式土器第Ⅱ類.....	72
図65	第1号住居址出土縄文土器.....	73
図66	第7号住居址出土縄文式土器.....	74
図67	各土塙群出土縄文式土器.....	75
図68	縄文式土器Ⅰ類出土状況.....	76
付図	発掘調査地の測図と写真撮り.....	77
付図	土器洗い作業.....	78
付図	宮の原遺跡に出土の多い特徴ある五角錐.....	78
図73	宮の原遺跡オセンペ土器(第1号住居址付近出土)(カラー版).....	79
図75	宮の原遺跡オセンペ土器(第7号住居址付近出土)(カラー版).....	80
図76	第Ⅰ類オセンペ土器・第Ⅱ類厚手纏維土器(カラー版).....	80
図77	宮の原遺跡石器(石錐)(カラー版).....	81
図78	宮の原遺跡石器(石斧)(カラー版).....	81
図79	宮の原遺跡石器(磨製石斧と側刃搔器)(カラー版).....	82
図79'	宮の原遺跡石器(磨石と石匙)(カラー版).....	82
図80-1	宮の原遺跡石器 その(一) 削器・石斧・石匙.....	83
第3表	石器集成表.....	84
図80-2	宮の原遺跡石器 その(二) 黒曜石々器集1.....	86
図80-3	宮の原遺跡石器 その(三) 黒曜石々器集2.....	87
図80-4	宮の原遺跡石器 その(四) 石斧・磨石1.....	89
図80-5	宮の原遺跡石器 その(五) 石斧・磨石2.....	90
図80-6	宮の原遺跡石器 その(六) 磨 番.....	90
図80-7	宮の原遺跡石器 その(七) 凹 石.....	92
図81	第2号住居址 実測図.....	94
図82	第1・2・7号住居址の位置.....	95
図83	第2号住居址 瓶形土器出土状況.....	95
図84	第3・6号住居址 実測図.....	96
図85	第3・6号住居址発掘状況.....	97
図86	第4・5号住居址 実測図.....	98
図87	第5号住居址カマド 実測図と断面写真.....	99
図88	第4・5号住居址発掘状況と須恵器蓋出土状況.....	99
図89	第1号柱判址 実測図.....	100
図90	柱判址発掘状況.....	101
図91	集石土坑 実測図.....	101
図92	第2号住居址出土 遺物実測図.....	103
図93	第3・6号住居址出土 遺物実測図.....	104
図94	第4・5号住居址出土 土器実測図.....	105
図95	出土土師器写真(第2号址).....	105
図96	出土土師器写真(第4・5号址).....	105
図97	出土須恵器・灰釉陶器(第5号址).....	106
図98	出土鐵器 実測図.....	107
図99	出土の鉄津.....	107



高遠宮の原遺跡の遠景



遺跡の発掘開始



平安期住居址（第5号）



出土の鉄滓（第5号）



縄文早期住居址（第7号）



出土の土器



高遠宮の原遺跡オセンベ土器出土状況



発掘員一同

# 序

高遠町においては、昭和40年ころより過疎化による児童数の減少と校舎の老朽化のため小学校を統合する必要に迫られ、昭和44年以来検討を進めた結果、三義・長藤・藤沢の3小学校区を統合することが必要であるとの結論に達し、去る47年3月以来3地区の父母住民各位との話し合いを進めた結果、全員の円満な合意により昭和50年度末において宮の原地籍を学校建設地とすることが決定したのである。

宮の原はその名の示す通り古き由緒ある地であり、早くから土器類の出土もあり、埋蔵文化財包蔵地としての周知の遺跡所在地であるため、51年3月県教育委員会文化課の担当官の視察訪問を受けて51年度に分布調査を行うこととなった。

その後、24名の土地所有者の各位の深い御理解により、51年10月に3万平方メートル余の土地賃取の合意が得られたので、11月12日より20日まで埋蔵文化財の包蔵状態確認のため第一次の分布調査を実施した。調査団は宮田小学校長林茂樹先生を団長とする5名の調査員をお願いし、その御指導のもとに教育委員会事務局および役場職員、地元作業員等の協力のもとに精力的に進められた結果、遺跡の所在及び縄文早期を含む各年代にわたる埋蔵物の包含状況を具体的に把握することができ、更に第二次の確認発掘調査を必要とするに至った。

第二次の調査は、第一次に引き続き林団長・中村副団長をはじめ合わせて6名の調査員をお願いし、遠く伊那市の御協力により熟練した作業員に地元の数名の作業員を加えて昭和52年4月21日より作業を開始し、同年5月31日にすべての発掘作業を終ることができた。

この報告書は以上の調査をふまえて、調査員各位の苦心と努力の末にできあがったものであるが、これによって宮の原遺跡の姿が解明されたことと共に、いくつかの貴重な収穫のあったことは誠に喜ばしいことであり広く学術文化に寄与すること信じている。

特に、現在高遠町誌の編纂作業が進行中であり、現在この種の発掘調査に恵まれていないわが町にとっては、原始古代の時代の解明とともに町誌編纂の有力な資料となることが期待される。

刊行にあたり、林団長をはじめ遠路をいとわず御尽力いただいた調査員各位及び発掘作業員の方々に対して、心から感謝申し上げる次第である。

昭和53年3月20日

高遠町教育委員会

教育長 守屋和夫

## 凡　例

1. この報告書は、長野県上伊那郡高遠町立高遠北小学校建設予定地に所在する「宮の原遺跡」の緊急発掘状況を記録した報告書である。
2. 編集に当たり、予算の都合上、図版を主とし、説明文はその概要を記述するに努めた。
3. この報告書の執筆及図版製作は、発掘事業に当たった調査員が責任をもって分担したものである。なお、担当した項目の末尾に執筆者、図版作製者名を記してある。

編　集 中村 龍雄 林 茂樹  
本 文 林 茂樹 中村 龍雄 田畠 辰雄 丸山 弥生 井東代治郎  
実測図 田畠 辰雄 丸山 弥生 中村 龍雄  
写真撮影 林 茂樹 中村 龍雄 田畠 辰雄

4. 本遺跡出土の遺物及写真フィルム、実測図原図等は高遠町教育委員会が保管してある。以上

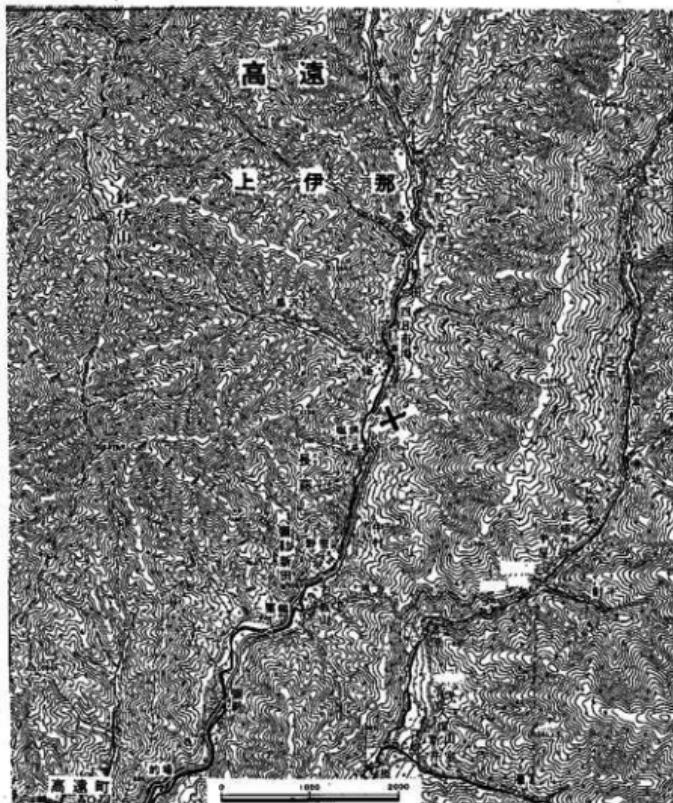


図2 遺跡の位置・環境

# I 遺跡の位置・環境

## 1. 位 置

宮の原遺跡は、長野県上伊那郡高遠町大字長藤字中条・宮の原4410番地（他20筆）地籍に所在する。交通路から見れば、高遠町（国土地理院5万分の1「高遠」）より、国道256号線を北上して7.8km同路線に沿う東側の台地（標高870m）である。国鉄中央線茅野駅より国鉄バス高速線にのり、南行して20kmの地点に位置する。（図2）

## 2. 自然環境（図1・図2）

諏訪盆地の南縁と伊那盆地の北縁の接する晴ヶ峯山地（1,411m）より流れ出る藤沢川は南流して、約20km地点において北流してきた三峠川に合流する。この藤沢川は両岸に老年期に近い浅谷を形成しているが、これが日本列島の外帯と内帯をしきる大地溝帯にあたるとされている分水嶺から流出して12km地点において、岸から川床に向って突出する小扇状地（比高40m）がある。これが宮の原遺跡の位置する台地で、南北約180m、東西約100mを測る。

地表は二次堆積のローム層が堆積し、下部は緑泥片岩・蛇文岩等の礫層が基盤となってい

る。標高は860mを示

している。

南側は、押出沢、北側を無名沢に截られ典型的な山麓の小扇状地形を呈している。

（図1・図3）



図3 宮の原遺跡の地形

### 3. 歴史的環境

藤沢川の渓谷は、縄文時代以降の遺跡が比較的に少ない、上流部藤沢地区には、杖突峠一赤井沢同立石、古屋敷、片倉一白沢口、同薬師堂、同下の間、松倉一白藤、同小坂御堂垣外一宮前、北原一椎殿屋敷、同神明上、同手垣外、同坊垣外、同長久寺下荒町一神明、台上村等16遺跡が散在する。これらは主として縄文時代に属する遺跡であるが、精査されていない。下流部の長藤地区では、黒沢一鎌立、中条八幡屋敷、同上垣外、同宮原、同鼠垣外、板山一祇迦堂、同横山、同峠、弥勒一上手垣外、同竹久保、同西垣外、的場一新館同沢口等13遺跡があり、主として縄文中期に所属する遺跡である。特に須恵器、土師器を出土したのは、祇迦堂、宮原、同峠遺跡が知られている。全体に縄文遺跡が多く、弥生式遺跡は全く認められず、古墳は全くない。歴史時代の土師器が上述のように2~3散在する程度である。本遺跡の対岸、藤沢川右岸の八幡屋敷・上垣外遺跡は縄文時代の中後期の遺物が多数出土しており、昭和25年頃大場教授により調査されているが、正報告はなされていない。信濃史料第1巻上に記載されている中で重要な遺跡である八幡屋敷遺跡を対岸にひかえた当遺跡は東側左岸に突出した小扇状台地である。しかし湧水にめぐまれていない点が遺跡の条件として欠けているが両側の沢水を考慮にいれれば、その条件は満たされていると言えよう。

歴史時代に入ると藤沢川の渓谷は重要な性格をになってくる。それは七世紀頃大和朝廷の東日本への進出の勢力伸長政策の意図のもとに設けられた古東山道が通過したことである。この道筋は大和から美濃へ、さらに信濃の国境に神坂峠の険路を越えて伊那谷を通過し諏訪盆地から蓼科高原をのぼり、大門峠から佐久平を経て穂水峠（入山峠）を越えて上野（群馬県）国へ入ったものとされている。神坂峠や入山峠、蓼科高原の遺跡は証されているが、天竜川沿いの伊那谷の通過地点はまだ学術的には証明されるに至っていない。しかし、この点についての一志博士の説は、上伊那の地において天竜川を東に越え高遠付近から杖突峠を越えたと主張されている。この道筋はあきらかに藤沢川の渓谷をさかのぼるコースである。今のところ、この街道の古さを証明するものは戦国時代の戦記のみしかなく、近世に至って中馬街道としての記録が大部分である。また上述のように古い土師器の出土もしくは古墳の存在もなく交通路としての祭祀遺跡も認められるに至っていない。

伊那より諏訪へ越える道はこの藤沢川渓谷と辰野町有賀峠その他があつていずれかと考えられているが、いずれも、古東山道の時期、存在を示す証跡は全くないのである。

仮にこの藤沢川を通過していたとすれば、この宮の原台地は渓谷の中に突出する台地であって旅人は一旦この台地を越えなければならないのである。立地的にはこのように交通上の要衝に当たっており、地名「なかじょう」は中城を意味すると考えられる。この意味において土師器を出す当遺跡の調査はまだ手のついていない古代高遠の文化を解明し、古東山道通過地の当否を証する重要な意義をもってくるのである。

## 4. 宮の原遺跡の由来

中条区の旧社が祀られていた所と伝承し現在も境内地が僅かに残る。昭和25年頃、高遠高校伊沢幸平教諭や、国学院大学大場盤雄教授の現地踏査が行われ、昭和27年県教委主催による遺跡分布調査の折に記録され、「信濃史料第1巻上遺跡地名表」には「宮の原遺跡」と記載され、縄文時代後期の土器、及び土師器後期の散布地として登録されている。遺物は高遠高校及地元民によって保管されている。

(林 茂樹)

## II 予備調査

### 1. 統合校舎建設に至る経緯

当高遠地区は昭和40年代に入り急激に過疎化し、児童数に至っては自然減に加えて極端に減少し、昭和33年と昭和50年を比較すると約3:1の比を示している。

のことから町内小学校の統合案が昭和44年町議会で決められ、5校を2校に統合することになった。つまり北部3校を統合して1校、南部2校を統合して一校ということであるがまず北部地域の統合に指向された。

教委・議会で審議が重ねられた結果、ついで昭和48年6月、北部小学校建設委員会が組織され校舎位置について論議がなされたが長さ16kmにわたる通学区のことで、結着を見るに至らないままに経過した。この間三義小学校は3連級の編成も考慮しなければならない状況となつたため、とりあえず長藤小学校に暫定的に統合することとなった。昭和49年4月1日のことである。

校舎建設委員会は、部落懇談会まで拡大され數次にわたる研究の過程で校舎の位置も2転3転したが、ようやく合意に達し昭和50年12月に至って宮の原地籍に定まつたのである。次いで51年5月22日、高遠町北部統合小学校建築委員会が組織され、同地買収の交渉に入ったがこれも難航し、51年11月に至つてようやく土地所有者の承諾を得るに至つた。

今後の計画は昭和54年度統合校開校をめざして昭和51年度に於て用地確保、取付道路造成、校舎建設地造成、昭和52年度に於て校舎建築、体育館建設用地造成、昭和53年度体育館建設、昭和54年度プール建設という段階を経て建設事業が行なわれることとなつた。

当遺跡保存問題は、昭和51年2月、遺跡と衆知している地元中条区民の有志により町長に訴えられ、町教委としては県文化課の指導を仰ぎ3月現地踏査した結果、試掘を含む分布範囲確認調査を実施するよう指導されたことによって初めて問題化されたのであった。

### 2. 分布調査の準備

町教委は50年3月県教委の指導を仰ぎながらその準備をすすめ、用地取得の近づくを持ち所有者了解の時点を調査の時期と定め態勢を整えた。調査団長(調査担当者)として林を命じ事務局を教委が担当することとなり、図面用具、作業、等の具体的準備がすすめられた。教委の組織した

分布調査のための調査団編成は、次の通りである。

調査団長 林 茂樹 日本考古学協会会員 長野小学校校長

副団長 中村龍雄 日本考古学協会会員 下諏訪町文化財専門委員

副団長 宮坂虎次 日本考古学協会会員 茅野市尖石考古館長

現場責任者 柴登己夫 長野県考古学会員 箕輪町郷土博物館員

現場責任者 丸山弥生 長野県考古学会員 伊那市

事務局担当者 伊藤俊規 町教育委員会

守屋和夫（教育長）

向山幹男（教育課長）

小松昭三（学校係長）

井東代次郎（社会教育係）

作業員（役場職員）

池上豊夫、田畠惠康、守屋基弘、山崎大行、伊藤清、平岩政徳、矢沢秀雄、伊藤邦弘、池上勇、赤羽潔、北原善人、守屋和俊、北原幸司、村威衛、伊藤亨、藤沢真平、小松晃、高橋文明、北原勇次

作業員（一般）

守谷真恵、北原くに子、北原愛子、北山ふさえ、伊藤直衛、向山源造、伊藤和良  
矢沢忠男、北原音吉、久保田静雄、北原久美子、久保田正子、柳沢仲江、北原登  
志栄

（林 茂樹・伊藤俊規）

### 3. 分布確認状況

#### (1) 調査経過

11月12日(金) 晴 第10日

午前9時現地に集合。北側地点において歓迎式を挙行した。北原三平町長が式を執行し守屋教育長より調査団員の紹介のことばがあり、林團長から挨拶があって試掘が開始された。調査団は4班(中村班、丸山班、柴班、宮坂班)にわかれ、グリッド列ごとに進行する。本日発掘したグリッドはA列の1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, B列の1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, C列の1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, D列の1, 2, 3, 4, 5, 6。

7であった。C3およびA12から散発的に土器片が出土した。ABC5列付近は深くてブルを使用し2mほど掘りさげる。また南地点のABCD各列の15~19まで2,500m<sup>2</sup>のからまつ林を伐切る。

本日出席調査団員5名、事務局員5名、作業員15名。

11月13日(土) 晴 第2日

本日は、主力を南地点におき、A列の13, 14, 15, 16, B列の12, 13, 14, 15, 16, 17, C列の9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, D列の8, 9, 10, 11, 12, E列の1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8を発掘する。A15附近に竪穴遺跡が検出され、ABCDの13を中心とする試掘拡がら遺物が多く出土した。

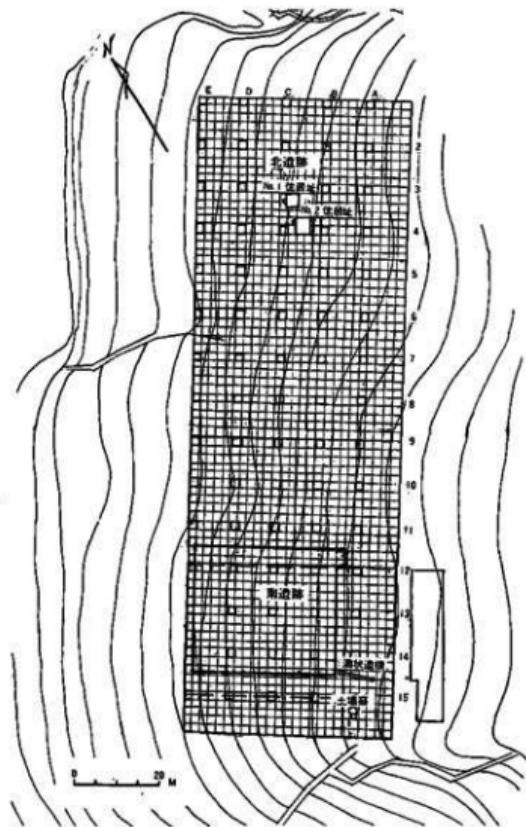


図4 遺跡グリッド設定図

### 11月15日(月) 晴 第3日

北地点は遺跡が小規模なので完全発掘することとしC 3区の第一号址をまず検出にかかる。柴調査員がこれを担当する。南地点A 15に竪穴状遺構を検出、中村調査員が担当する。

他はD13. 14. 15. E 9. 10. 11. 12. 13. 14. F 13の試掘坑を掘る。遺物出土は比較的少なく、B 13区～C 13区が濃密な遺物分布を示していることが明らかになる。この地点、二次堆積のロームが50cmも表土を覆っているためこれを拂土することとし、ブルドーザーを使う。本日出席調査員4名、事務局3名、作業員12名。

### 11月16日(火) 晴 第4日

北地点では第一号址の覆土がほぼ拂土でき遺物が出土地する。なお第2号址のカマド跡をその前に発見し検出にかかる。

南地点ではA 15の遺構は石積、須恵器を発見、土括墓であることが確認できる。なお、A～E 11～12付近のから松の伐採をする。

本日出席調査員4名、事務局員2名、作業員13名。

### 11月17日(水) 第5日

北地点の第一号址の清掃作業。第2号址の発掘をする。南地点は土括墓の調査中、北部に溝渠址を発見し小試掘坑を10m間隔に入れ確認できた。A～D 12～13区付近の表土の拂土をブルドーザーですすめる。

本日調査員4名、事務局2名、作業員15名。

### 11月19日(金) 晴 第6日

北地点では、第1号址及び第2号址の清掃及び実測作業をする。南地点では、土括墓及び溝渠址の清掃及び実測作業をすすめる。

以上で作業を完了し、午後は南地点の保存地域を検査確認する。

調査員3名、事務局2名、作業員10名。

### 11月20日(土) 晴

遺構の写真撮影を行なう。調査員会議を開き最終的なまとめを行なう。なお報告書作成予算を検討した。

以上で試掘確認調査の作業を完了した。(林・伊藤)



図15 試掘貯入式



図16 試掘地北遺跡全景



図17 試掘地発掘風景



図18 試掘地南遺跡全景

## (2) 分布状態確認状況

宮の原台地の中央部に東西40m 南北200m 計8,000m<sup>2</sup>にわたって100m<sup>2</sup>を一単位区とした調査網を敷き、一区に対し一試掘拡(2m×2m)を掘り、地層及び包含状態の試掘調査を行なった(図4)。

まず、この台地は、山麓の扇状地形を呈し、全面がローム層に覆われた地表に比べ、地形は洪積世期の侵蝕流に区切られて、意外に複雑である。現地表において、東方から西方にかけて約4°～6°の傾斜を示し、A B の5区～6区にかけては、幅十数m、深さ 1.5m 内外の小侵蝕谷が地表下に存在していた。したがってこの区は2次的に堆積した黒土層が厚く、ローム層は地表下 1.5m に疊を介在させて検出された。このように全体に東西方向の侵蝕があり、東方の高地から2次的に移動した土壤が堆積し、一見平坦に見えるが地層の状態は東西方向に3区分できる。A.B.C.D の各、1区から3区にかけては、ローム層が厚く、同じく4区から6区にかけては、前述のように侵蝕谷があつて黒土層が深く(図9・E 3)、7区から10区にかけて再びローム層が地表を覆っている。11区から14区にかけては西に傾斜しつつ南面にも傾く地表は二次堆積のローム層が厚く平均で50m 存在し、その下部50cm～1mは黒土層となり、その下部がハードロームとなっている。このハードロームは伊那谷一帯を覆う新期ローム層の上部である。下部は未調査のため詳かでないが厚い疊層と思われる。最上部は斜面のため西方および南方に匂行しているようである。

遺物の包含状態はB 2、C 3、D 3 の第Ⅰ層及び第Ⅱ層中に包含されており、縄文土器一片を含む他はすべて土師器破片であった(図9・A 3)。散布地域はほぼ2つの区にわたり 200m<sup>2</sup>を数えたのでこれを北遺跡と命名した。宮の原台地の北部に位置しているからである。

中間部にはほとんど遺物の包含はなく、南部に至って A B、A 14、A 15、B 12、B 13、B 14、C 12、C 13、C 14、D 11、D 12、D 13、D 14、E 12、E 13、E 14、の各試掘拡の第Ⅱ層以下から濃密に遺物を出土した(図9・C 13、A 13)。

第Ⅱ層からは土師器・須恵器・灰釉陶器の破片、石皿等、第Ⅲ層下部から第Ⅳ層にかけて縄文早期及び中期及び後期の土器片、磨石、凹石、剥片石器を検出した。また南斜面に入ったB 17区からは須恵器破片と江戸時代初期の磁器が焼土の周辺から出土したが耕作により搅乱された第Ⅰ層中で詳しくは把握でき得なかった。特に A 14拡、B 12拡、C

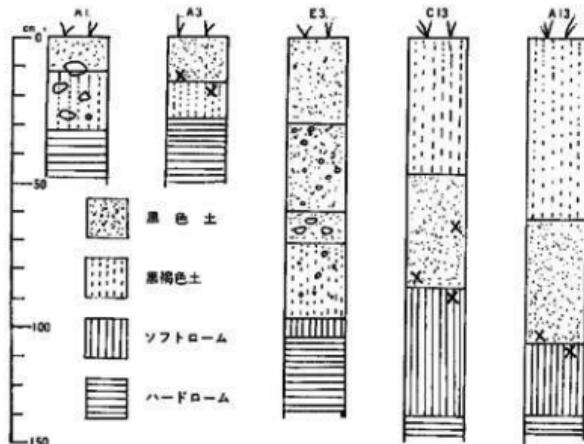


図9 各地点地層様状図

第1表 試堀溝 状況一覧表

試掘坑No	層位状況(cm)			遺物・遺構	
	第一層	第二層	第三層	遺物含包層位	遺物の種類
A 1	表土 20	混凝ローム30	軟ローム		なし
2	表土 20	ローム			なし
3	耕土 20	軟ローム30			なし
4	耕土 25	亜黒土65	軟ローム20		なし
5	耕土 25	亜黒土80	軟ローム20		なし
6	耕土 25	亜黒土90	軟ローム10		なし
7	耕土 15	ローム			なし
8	耕土 15	ローム			なし
9	耕土 20	ローム			なし
10	耕土 20	ローム			なし
11	耕土 20	ローム			なし
12	耕土 30	軟ローム30	ローム		なし
13	耕土 30	軟ローム40	ローム	第Ⅱ層	豎穴、須恵器片
14	耕土 30	軟ローム30	ローム	第Ⅲ層	柱穴址、床面
15	耕土 30	亜黒土40	ローム	第Ⅲ層	土括、炭、石
16	耕土 30	亜黒土30	ローム		なし
17	耕土 20	軟ローム30	ローム		なし
B 1	耕土 25	礫 25	ローム		なし
2	耕土 20	亜黒土25	ローム	ローム層	土師器杯
3	耕土 15	亜黒土30	ローム		なし
4	耕土 15	亜黒土140	ローム		なし
5	耕土 35	亜黒土30	ローム		なし
6	耕土 35	亜黒土60	ローム		なし
7	軟ローム15	ローム			なし
8	軟ローム30	ローム			なし
9	軟ローム40	ローム			なし
10	軟ローム40	ローム		第Ⅰ層	土師器
11	耕土 20	ローム			なし
12	耕土 65	黒土50	軟ローム30	第Ⅱ層	床面、土師、須恵、灰釉
13	耕土 65	黒土70	ローム	第Ⅱ層	須恵器、土師器
14	耕土 70	黒土50	ローマ	第Ⅱ層	土師器
15	耕土 50	ローム			なし
16	耕土 50	ローム			なし
17	耕土 50	ローム		第Ⅰ層	須恵器、陶片
C 1	耕土 25	黒土19	軟ローム		なし
2	耕土 25	軟ローム15	ローム		ピット4箇
3	耕土 30	黒土40	軟ローム25	第Ⅱ層	土師器片、豎穴床面
4	耕土 31	黒土20	軟ローム13		なし
5	耕土 15	軟ローム20	ローム		なし
6	耕土 30	ローム			耕作用鉄跡あり
7	耕土 25	ローム		第Ⅱ層	同上、陶片
8	耕土 30	ローム			同上

試掘坑No	層位状況(cm)			遺物・遺構	
	第一層	第二層	第三層	遺物名及層位	遺物の種類
C 9	耕土35	ローム		第Ⅱ層	ビット
10	耕土35	ローム			なし
11	耕土30	ローム		第Ⅱ層	灰釉片
12	耕土40	黒土55		第Ⅱ層	土器片(天神山式)、四石、石鏡、鉢片、土師器
13	表土45	黒土50	軟ローム45	第Ⅱ層	四石、土師器片、須恵器、天神山式
14	表土30	黒土50	軟ローム50	第Ⅱ層	土師器片、黒耀石、焼土
15	表土30	黒土70	ローム		なし
16	耕土50	ローム			なし
17	耕土50	ローム			大礫あり
18	耕土40	ローム			なし
D 1	耕土25	亜黒土20	軟ローム20		なし
2	耕土25	軟ローム15	コーム		なし
3	耕土30	黒土40	軟ローム25		土師器
4	耕土30	亜黒土20	軟ローム15		なし
5	耕土15	軟ローム20	ローム		なし
6	耕土30	ローム		第Ⅱ層	畦状造構
7	耕土30	ローム		第Ⅱ層	畦状造構
8	耕土30	ローム			なし
9	耕土35	ローム			なし
10	耕土35	ローム			なし
11	耕土35	ローム		第Ⅰ層	灰釉陶
12	耕土30	黒土50	軟ローム20	第Ⅱ層	炭化物、繩文土器片(薄手)、石鏡1
13	耕土30	黒土80	軟ローム40	第Ⅱ層	石皿、床面、須恵器、土師器
14	耕土30	軟ローム50	ローム		繩文土器
15	耕土50	ローム			なし
16	耕土50	ローム			なし
7	耕土40	ローム			なし
E 1	耕土20	軟ローム17	ローム		なし
2	耕土15	軟ローム10	ローム		なし
3	耕土30	亜黒土40	軟ローム		なし
4	耕土10	ローム			なし
5	耕土20	ローム			なし
6	耕土20	ローム		第Ⅲ層	小豎穴
7	耕土25	ローム			なし
8	耕土25	ローム			なし
9	耕土35	ローム			なし
10	耕土35	ローム			なし
11	耕土35	ローム			なし
12	耕土20	黒土40	ローム	第Ⅱ層	土師器
13	耕土20	黒土30	ローム	第Ⅱ層	石皿、黒耀石
14	耕土20	黒土30	ローム	第Ⅱ層	黒耀石片
15	耕土50	ローム			石斧
16	耕土50	ローム			なし
17	耕土50	ローム			なし

12拡、D 13拡からは床面を検出し、前述のようにこの周辺に遺物が濃密に包含されていることからみて 1,000m<sup>2</sup> ~ 1,500m<sup>2</sup> の範囲にわたって竪穴住居址の存在することが確実視されるに至った。前述の2次堆積ローム層50cmの堆積は、この下部の黒土層は北部のように浸蝕谷によるものではなく竪穴住居址の上部を覆っているものであることも確認されるに至った。この遺跡を南遺跡と命名した。宮の原台地の南部に位置するからである。

また A 15からは土括蓋が検出され土師器（国分式）に所属したものであることが把握され、A 14区からは東西方向に至る溝状遺構（溝渠址）が発見され、土師式期のものと判断され、すべて土師集落址の一部分としての性格をもつものと予察し得るに至った。  
(林 茂樹)

### (3)出土遺物

前項の分布状況に概述した遺物についてやや詳しく述べよう。

#### A 縄文時代に属する遺物

##### イ 土器

グリッドC14、C12、D12から集中して出土した深鉢形土器片数片である(第10図)。このうち早期末葉に属するものがある。(1)は口径17.5cmを測る深鉢で器厚は極めて薄く5mmを測り、淡褐色で焼成は固く、胎土中に長石粉末を含有している。口唇上にハイガイの腹縁を連続押捺した圧痕があり、器面には指圧痕が多く認められ、口縁に平行して平たく薄い粘土紐をはりつけ、同一ハイガイでその上と器面を含めて縱方向の条痕で埋めている。いわゆる薄手細線指痕文土器に属し、東海地方に濃厚な分布を示すものと同一の土器である。(2)(3)(4)(6)も恐らく同一箇体に属するものであろうか。(5)は前者と共に出土した厚さ7mmの淡褐色土器破片であるが器面全体に細い燃糸を軸棒に捲きつけ、それを運転し施文したいわゆる燃糸文土器である。伊那谷では押型文土器に伴って出土する傾向を示していることからみて、或は押型文土器と出土するかも知れない。(9)・(10)は半截竹管や縄文で施文した厚さ8mmに近い褐色の土器片で中期初頭から中葉にかけての

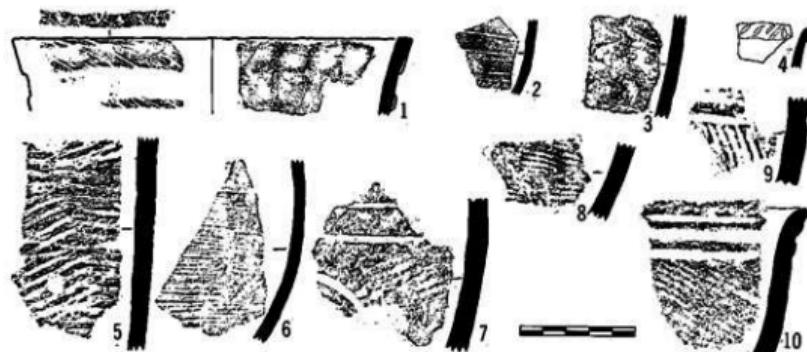


図10 試掘抗出土遺物実測図(1)

時期のものである。(7)・(8)は廻転繩文を施したあとこれを磨り消した文様でもつ厚手の土器で後期掘の内式に処属するものと思われる。これは一括グリッドC 14の第Ⅱ層下部から出土した。

#### □ 石器

B・D 13、C 12の各拡から出土した縄文土器に伴う石器である(図13)。(1)・(8)の石皿、(2)・(3)・(4)は磨石で、いずれも砂岩製であり、同一時代と思わしめる。(6)は硬砂岩製の打製石斧、(7)は片岩製の凹石である。(8)はB 12から出土、赤色珪岩製の調製良好な刃器、恐らく石匙断片であろうと思われる剝片石器が出土している。

#### B 土 師 器

これらはグリッドC 3を中心とする北地点とグリッドB 13を中心とする南地点において後述する須恵器及び灰釉陶器と共に出土した。北地点のものは、図11にその主なものを掲げた。

B 12拡第Ⅱ層中から出土した(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)は、いずれも杯形を呈した破片で、口径の厚さ4mm内外の茶褐色のやや粗雑に焼成された土師器である。(1)・(2)・(7)は底部で内面黒色を呈し、糸切底で右廻転のロクロが使用されている。(3)はD 13出土の同類品である。また(8)はC 3(9)はB 2から杯と共に出土した壺の破片で、褐色を呈し、部分的に炭化物が付着している中厚手の土器である。この地点からは後述するように方形竪穴住居址2基が発掘された。

南地点ではC 13を中心として1,500mにわたって遺物が分布しており、しかも濃密な状態であった土師器に加えて後述する須恵器・灰釉片がこれに伴った。これを図12に掲げたが、土師器はB 13から出土した(1)・(2)の楕円形土器、B 12から出土した(5)、B 12から出土した(7)等の壺形土器片がある。いずれも焼成中位の表面に細かな条痕をもつ粗成の土器である。

#### C 須 恵 器

B 13から出土した(5)・(9)、B 12から出土した(9)、A 13から出土した(11)はいずれも甕破片で、厚さ3~5mmで器面に縄目の叩き文をもったB灰青色の焼成堅緻な須恵器片である。またB 13から出土した(11)のような壺、(14)のような壺の口徑部破片もある。

#### D 陶 器

1点であるがB 12から出土した灰釉壺の破片がある。灰白色をした釉がかかり、厚さ3mmの胎土は白色堅緻で明らかに東濃附近の窯で焼成されたものである。またB 17から出土した(3)は白磁壺で、B 12のもの(8)も同類と思われる。B 17出土の壺は底部からの立ちあがりが直角で褐釉がかかり、室町時代の所産と考えられる。灰釉陶器は前述の土師器・須恵器と共に伴るもので、この地点には、竪穴住居址の床面が検出されているので、これに伴う遺物と解される。

白磁や褐釉陶器は室町時代に処属するもので須恵器・土師器出土地点より南部の傾斜面において焼土と共に見出されたが遺構は見当らなかった。

(林 茂樹)

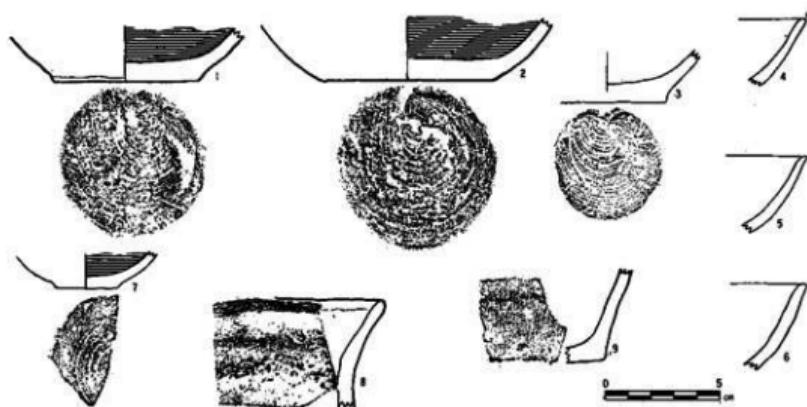


図11 試掘出土遺物実測図(2) 土師器

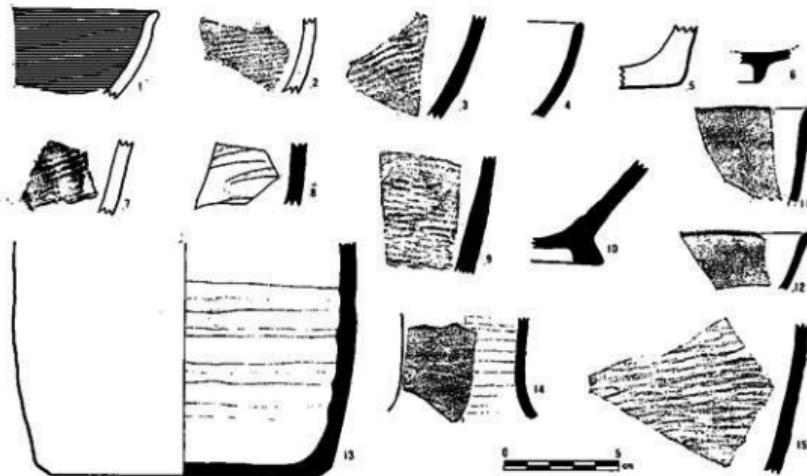


図12 試掘出土遺物実測図(3) 須恵器・陶器

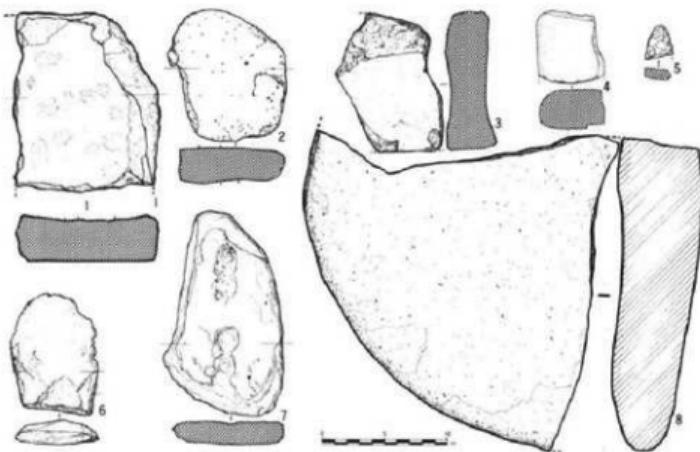


図13 試掘坑出土遺物実測図(4) 石器

#### (4)一部発掘調査状況

##### A 北 遺 跡

###### (1) 第1号住居址 (図14・図15・図16)

###### イ 遺 構

本址は分布調査地区中 Ca 区内に発見され、ローム層を掘り込んで構築した竪穴式住居址である。主軸を NW になし東西 3.2 m、南北 3 m の規模で、ほぼ正方形に近いプランを呈している。側壁は東壁と北壁の一部は顯著であるが、他は確認はできたものの良好ではない。一応に斜壁であり、壁高も落込み確認面から 9 cm～40 cm と一定していない。床面はローム層そのものに設けられ、部分的に堅いタタキになっているが、凹凸の多い床面である。

床面上の何ヶ所かに焼土と炭化物の団りが検出されており、又発掘中の住居址内覆土中にも

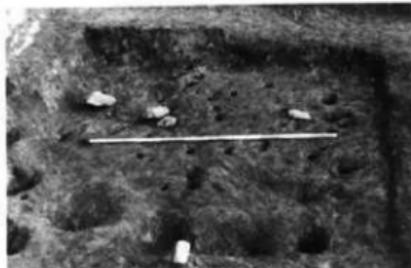


図14 第1号住居址発掘状況



竪穴全景 (上図)

カマド址 (下図)

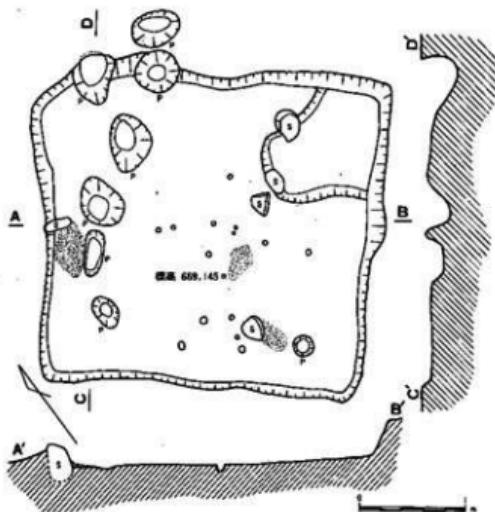


図15  
第1号住居址  
実測図

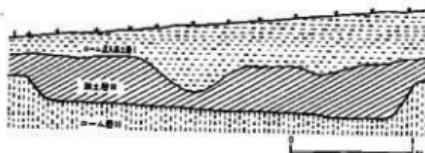


図16 第1号住居址北壁面地層断面図

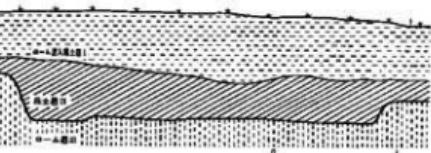


図17 第1号住居址東壁面地層断面図

炭化物が混入していた。これ等の様相からして住居廃絶後に火を受けたのではないかと推測してみたが、又は生活中に暖を取るための残火の址であろうか。

ピットは住居址内に5個、壁中及び外側に3個の計8個であるが主柱穴として使用されたものはP<sub>2</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>ではないかと思うが全体的に浅い。カマドは西壁ほぼ中央に位置しているが、石組として用いられている石は1個しか見られず、廃絶後にぬき取られ他に使用されたのか、耕作中に掘り上げられてしまったものと考える。カマドの位置するところには50×30cmの椭円状に焼土が残り、くり返し火を使用したことが推測できる。

住居址内の遺物はきわめて少なく、土師の杯の底部と甕の破片が出土したにすぎない。

(柴登己夫)

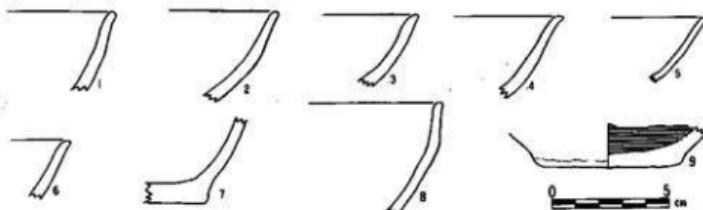


図18 北邊跡第1号住居址出土遺物(土師器)

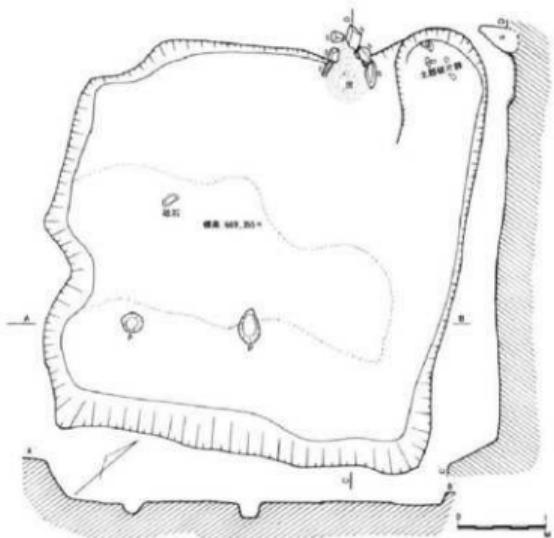


図19  
第2号住居址

## (2) 第2号住居址 (図18・図19)

### イ 遺構

本址は調査地区 C<sub>a</sub> から C<sub>d</sub> 区にかけ発見され、第1号址から南に 3.7 m のところに位置している。主軸を N49°W なし、東西 4.8 m、南北 4.5 m の不正方形のプランを呈している。

ブルトーザーによる表土堆積中にカマドの一部分が検出されたため、いち早く住居址との推定を行うことができた。

本址は第1層の黒土に掘り込んで構築した竪穴住居址であるため、プランの確認が非常に困難であった。

床面及側壁共に不良で確認に苦労し、床面は図18に示すように点線内はタタキと思えるが他は軟弱であった。

カマドは西壁の中央よりやや北寄りに造られ、石組は粘土により固められしっかりしている。カマド内には 20cm の深さに焼土が入っており、この焼土中には土師器の甕の破片 10 個余と灰釉 1 片が検出された。

カマドの石組は検出されたものその他に 2 個程度はあったと推定されるがほぼ現型を残している。

カマドの南側に床面より 10~15cm 低くなった部分がありこの中より土師器の甕の底部と破片数個が出土している。

又、住居址の中央やや南寄り床面上に砥石 (図20(6)) が出土し、使用面を見る時、金属が使われたことを感じさせる。(柴登己夫)



◆ 図20 第2号住居址全景



図21  
第2号住居址カマド

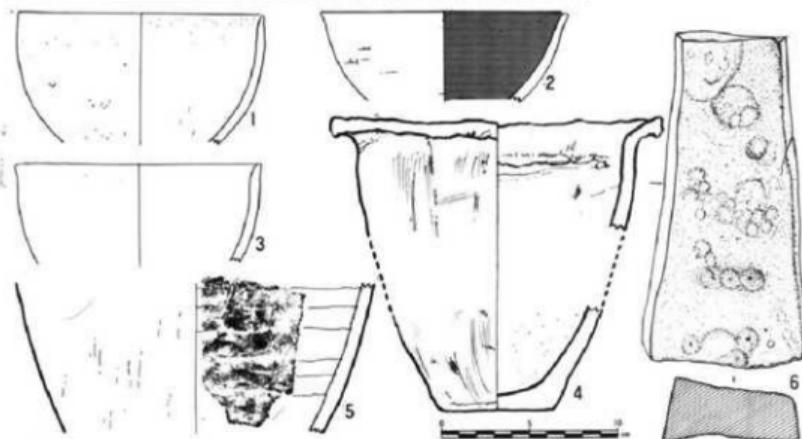


図22 北遺跡第2号住居址出土土器実測図

### (3) 遺 物 (図17・図20)

第1号住居址からは土師器破片14片が出土したが、このうち9点を図17に掲げた。(1)～(6)は器肉の厚さ3～5mmで長石粉末を含む杯で、特に(1)(2)(3)(4)(6)は内面が黒色に研磨されている。(7)は中形の甕で黒褐色を呈しているのは炭化物が付着しているからである。器壁全面に縦方向の細い刷毛目がシャープに付されている。(8)の椀は杯に比べて調製が良好である。いずれもカマドの周辺や下部焼土内から出土したものである。

第2号住居址出土の遺物は、16片が出土している、そのうち5片を図20に示した。いずれも土師器で須恵器はなく、灰釉陶器の細片がカマド下部の焼土内から発見されたが釉調はやや黒ずみ、胎土が暗灰色で軟かいことからみて猿投窯製色と見られる。土師器は、まず椀が目立つ。(1)(2)は内面黒色に研磨され、(3)は器面上へら磨きの痕をとどめている。いずれも赤褐色を呈する。

(4)(5)は甕破片で(4)は縦の方向の刷毛目がシャープに付され、(5)は輪積みの痕が内面によく残っている。両者ともに胎土中に長石粉末が混入されている。

以上の土師器の特徴を要約すれば、杯、椀においては立ちあがりから比較的強く、外反し内面は黒色に研磨され、糸切り底である点である。甕においては口縁が強く、外反しエボシ形の器形を呈し、内面に輪積み痕を残し、外面に細い刷毛目をシャープに付するものが多い。これらの土

師器は本郡においては、伊那市福島遺跡、箕輪町中道遺跡、北城遺跡の方形竪穴住居址群から出土したものと同類である。この時期は国分期に属する特徴をもち同期のうちで前半期に該当するものではなかろうかと考えられる。須恵器や灰釉陶器を伴っていることも推定され、年代的には9世紀末期にあたるものと解されるのである。

(林 茂樹)

## B 南 遺 跡

### (1) 第1号土塙 (図21・図22)

#### イ 遺 構

南遺跡のA14グリッド試掘によって、このグリッド南部に落ち込みが表われた。そして、ここが隅丸の方形となって拡張されていくため、この南方部には住居址の存在を考えたのであった。ところが、この落ち込みによってつくられた遺構の竪穴のプランは径2mに満たないことが判つてきた。それによって、住居址としては小形であると考えられた。

結局、竪穴のプランは長径1.8m、短径1.6mの隅丸方形の土塙であった。この方形の地床面には全面的に、きちんと、炭粉が敷きつめられていた。それ故、これが土塙墓と推考できたのである。

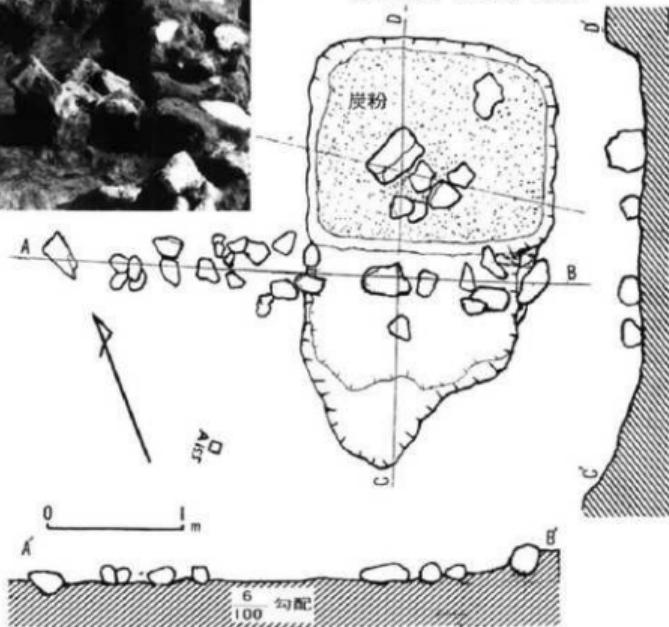
墓床内には石塊8個があった(図22)。この石塊積石の直上に大甕須恵器片が出土した。



図  
23  
土塙墓発掘

図24

第1号土塙(土塙墓)実測図



次にこの土塙内を更に、南方に拡張した。ここには石塊が数多発掘されてきた。その石塊は、列状に下方（西北方）に流れ落ちた状態で20数個が重ね合って存在した（図22）。

さて、その石塊を取り去って、ここの地床の調査を進めた。この地床は一段下るローム面にあり、北方の墓床と同じレベルである。つまり、土塙墓豎穴の連続である。その場所は墓床の南方に接続している三角状の豎穴になっていることが判った。その形状は乱れた三角形となっていて、墓前に對して挿し供獻できる位置であり、小規模の棺前祭ができるスペースをつくられていたと考えられた（図23-1 の半分南部）。この地床の内の左右両側に供獻用の土師變形土器各々一個が直立つぶれた形で出土した（図23-1・図23-2）。

土器は両者共に底部が無かったが、最初より破損品を供獻用としたのであろうか。その直立土器の周囲底面には一回りに炭粉未があった。

#### 口 遺 物（図23-1・図23-2・図24）

図24の(3)は青白色に富んだ厚手強固な焼成の大壺須恵器片である。墓棺を被った覆土にのせたと考えられた数個の石塊の、その上面にこの須恵器片があった。

同図(1)(2)は棺前両側に直立していたと考えられる供獻用土器、両者共に褐色、刷毛目文の土師器で、両者は全くの同一の胎土で、胎土中に金色のマイカ粉が光っている。この器によって、土塙墓の期が決定される遺物である。

（中村竜雄）

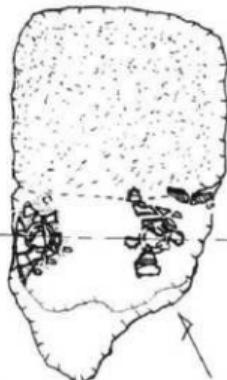


図25

土塙墓供獻遺物状況  
左右2個崩れて出土



図26 供獻土器出土状況

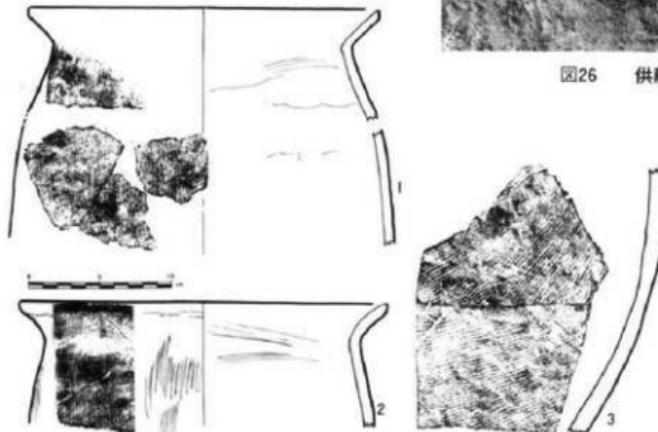


図27  
第1号土塙出土遺物  
実測図

## (2) 溝渠址 (図25・図26)

南遺跡の山側から遺跡中心地に向って溝が下向して走っていることがわかった。それによって試掘を試みた。グリッドA14付近で3箇所のピットを発掘し、図26の記録を得た。溝の幅はローム上層面が80cmで最下底部は幅30cmに縮まる。つまり、溝の断面はV字形にローム内に確りと掘られているのである。深さは大畠1m余となつてている。

下底部に僅かの砂粒が残留していた。この付近では急の流れであったと思われ、砂礫残存が少ないが、おそらく、下流の南遺跡の主要な住居址群の付近においては、溜まりをつくって、住居址群の使用水に供した造構が現われるものであろう。

この溝の中間層から出土した土器片は須恵器1片(図26)であつた。

(中村竜雄)



図28 溝渠址の発堀

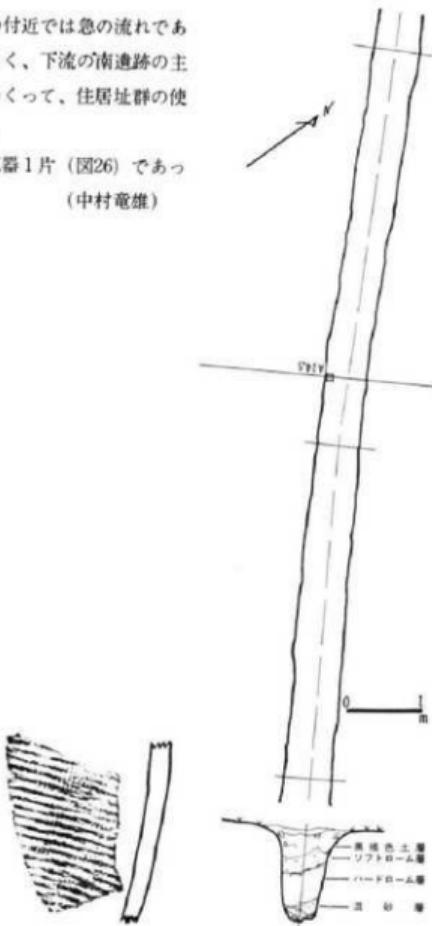


図29 図30  
溝渠址及び出土土器片

## 遺跡保護についての所見

以上、宮の原遺跡の分布調査について詳細に述べたが、おわりに保存措置についての所見を若干述べておこう。

宮の原台地における遺跡の分布は、北地点、および南地点に限定されることが明らかになった。北地点においては遺物散布範囲が200m以内に限られることから極めて小規模なものと判断し、発掘調査した結果、土師器期後葉に処属する竪穴住居址二軒を検出するにとどまったので、これを北遺跡と命名した。

南地点においてはグリットC13を中心とする1,500m<sup>2</sup>に遺物の包含で認め、この一部に竪穴住居址の床面を2箇所検出した外、上部のA15区に土括墓及び溝渠址が発見された。更に遺物は縄文時代早期未葉に処属するもの、同じく中期及び後期に処属するもの、土師器・須恵器・灰釉陶器等の一括遺物及び中世陶片の出土範囲および包含層が確認された。中世に処属する遺構は見当らないが、土師器・須恵器・灰釉陶器を共伴する竪穴住居址がここに集中的に群集しており、これを自然に埋蔵したのが第Ⅱ層で第Ⅱ層下部には縄文時代早期及び後期の遺構が包含されていることも予知できたのである。また、集落の埋没層の第Ⅱ層を厚く覆っているのが上部から流下堆積した2次堆積のローム層(第Ⅰ層)である。この点極めて保存良好な遺跡というべきで後世の擾乱を全く受けていない点、貴重である。

さらに造構の重要性としては縄文時代早期未葉に属する天神山式あるいは木島式に属する土器いわゆる薄手細線指痕文土器がある。これは天竜川本谷と東海地方から遷上してきた土器文化と解され、今の処、伊那市伊勢並遺跡、南箕輪北高根遺跡を最北端としている。これにつぐ文化が宮田村中越遺跡で早期文化から前期文化の移行を解明する上に重要な問題を内包しているのであって、小規模な遺構といえども看過できないものである。また、土師期竪穴住居址群は



図31 南遺跡全景



図32 南遺跡地層断面

東南部の高地に墓地と水道址とも併なっており小範囲ながら国分期の集落としてその構造を解明する上に極めて重要である。また、歴史的環境からみたとき古東山道の通過に関係した遺跡とも解され交通関係の遺物を包蔵しているとすれば、この点極めて重要といわざるを得ない。以上のことから南遺跡は今後充分な保護措置ができるまで当分の間完全に保存することを念じ保存地域を次のように確定した。

A 12～A 15区、B 12区～B 13区、C 11区～C 13区、D 11区～D 14区、E 12区～E 13区。

以上一括、南遺跡とする。

以上のように宮の原南遺跡は、学術的に重要な課題をもった遺跡である。極めて保存状態が良好な遺跡であることに鑑み基本的には永久に保存し、将来に伝えるべき性質の遺跡であるが、一方には前述したとおり、ここ数年間の教育行政の課題としての統合校舎建設敷地として利用されることとなり、遺跡保存のための敷地変更が行政上不可能な状態となっている。これについての保存措置はやむを得ないが学術的に発掘調査を実施して正確な記録保存の措置を講ずるより仕方があるまいと考えられる。この方針は考古学的調査がほとんど実施されていない当町地域において埋蔵文化財の顕彰上大きな意義をもち、学術的には前述のいくつかの重要な課題が解決でき、学会に貢献し得る一方、目下編集中の「高遠町史」の中に輝かしい1頁を加えるものであろうことを確信するものである。以上文化財保護法で唱う文化財の活用上大きな意義をもつものと期待したい。

(林 茂樹)

### III 本発掘調査の経過

#### 1. 調査経過

昨年度の分布調査実施によって南遺跡の存在が把握されたので、今回は南遺跡の工事区域内 1,500m<sup>2</sup>を全面発掘して調査することとなって、その事業を推進した。

調査の進行状態を日誌により次のように記す。

52年1月25日 昭和52年度文化財補助事業計画書を、文化庁あてに提出した。

52年3月12日 発掘による宮の原埋蔵文化財範囲確認調査を実施するため調査員を委嘱した。

調査団長 林 茂樹(日本考古学協会々員)

△副団長 中村 龍雄( )

調査員 田畠辰雄(長野県考古学会々員)

△ 柴 登巳夫( )

△ 飯塚 政美( )

△ 丸山 弥生( )

(調査委員会)委員長 守屋 和夫(高遠町教育長)

副委員長 向山 幹男( 教育課長)

委員 井東 大治郎( 社会教育係長)

△ 広瀬 源司( 社会教育)

△ 小松 昭三( )

△ 田畠 恵廉( )

3月30日 宮の原埋蔵文化財発掘通知を文化庁長官に提出した。

5月16日 昭和52年度文化財保存事業費補助金交付申請を文化庁長官に提出した。

9月8日 長野県教育委員会より補助金交付決定通知が行われた。

12月21日 昭和52年度文化財保存事業費補助金が内定した。

53年1月7日 全上 交付申請書類を提出した。

2月18日 全上 決定通知書が交付された。

作業員一般

発掘調査に協力する作業員を交渉し、次のように決めた。

原修一、酒井達雄、平沢平治、宮下担司、六波羅歌子、戸苅千鶴子、中山りは子、武田久雄、小出百百子、平沢公夫、佐野里美、佐野たづ子、北原一喜、唐木馨、平沢善夫、辰野みさ子、橋爪ちえ子、酒井としこ、久保田静雄、北原良子、守谷真恵、北山ふさえ、久保田としそ、北原清司、北原美代子、有賀文子

## 2. 調査について

4月14日(月曜日) 晴

福祉センターにおいて関係者参集し、宮の原遺跡確認分布調査打合せ会を行ない次の事項を定む。

- 目 的 高速北小学校々舎建設用地内に所在する宮の原南遺跡約3,000m<sup>2</sup>を全面発掘し記録保存する。
- 事業費 国県費補助 高速町教育委員会の予算とする。
- 事業計画 (1)発掘作業 4月21日～5月20日。
  - (2)発掘調査方式 イ.グリッド設定 ロ.グリッド調査 ハ.全面発掘
  - ニ.実測調査 ホ.遺物整理 ヘ.まとめ
- (3)報告書 イ.遺物実測図作成(撮影) ロ.遺跡実測図作成(撮影) ハ.編集計画
- ニ.著述 ホ.編集出版



図33

南遺跡発掘風景

西方より



図34

南遺跡発掘風景

西南より

### 3. 発掘日誌

4月19日(火曜日) 晴 宮の原遺跡発掘用機械器具運搬、テント2基設営。

4月20日(水曜日) 曇 消耗品等購入、準備終了。

4月21日(木曜日) 晴 午前8時30分より関係者集合し、南遺跡地点において発掘開始式を行なう。守谷教育長挨拶、林団長挨拶及指示、調査員紹介等があり、午前中小屋がけ等調査準備作業、午後グリッド設定、グリッド発掘D3. D5. D7. E6. F3を始める。

4月22日(金曜日) 晴 第I層の二次堆積ロームを排土し、グリッドの杭を全面に打つ作業を行なう。そして、第II層以下の排土にかかり、次のように始まる。グリッド D9. D11. D13. D15. D17. E8. E10. E12. E14. E16. F7. F9. F11. F13. F15. F17. H7. H11. H13. H15. I7. I11. I13. I15. I17. K16. L13. L15. L17.

4月23日(土曜日) 晴 昨日の続きでグリッドの第II層以下の排土を行なう。掘りすゝめるにしたがい、土師器・須恵器・櫛文土器の破片・石器が多く出土する。新グリッド発掘は次の通り。B3. B5. B9. B11. B13. B15. C16. D6. G4. G6. C8. G14. G16. H9. I4. I6. I14. J9. J7. J3. K4. K6. K12. L7. L9. L11.

4月26日(火曜日) 晴 グリッドの発掘を進め、遺物の採集が多かった。発掘グリッドはB4. B6. C3. C14. C5. C6. C7. C8. C9. C14. D8. E5. E7. F9. F4. F5. F6. F8. F10. G3. G5. G7. G9. I9の排土に努める。

また、本日8時30分よりブルトーザーで東南部の第I層排土作業実施。

4月27日(水曜日) 晴後曇 新しく発掘区の北部を拡張してグリッドを設定する。A列、N列D列の3列を加える。本日のグリッド発掘は、A3. A4. A5. B8. B10. C10. C11. D10. D12. E3. E4. E11. F8. F12. H8. I7. L3. L9. M12. N9. N13. N15. 東部をブルトーザーによる第I層排土を行なう。

4月30日(土曜日) 晴 排土作業も西部が進み中央部付近に達する。本日発掘進めたグリッドは次の通りである。A9. A10. A11. A15. F10. F11. G5. H4. H17. H18. I3. J4. J5. J6. L3. M10. M11. M13. M14. N10. N11. N12. N14.

5月4日(木曜日) 晴 本日も中央部の排土が順調に行われる。掘り進めるにしたがい遺物の出土が多くなる。排土したグリッドは次の通りである。A15. A8. A12. A13. A15. B13. B15. C13. C15. F16. F17. F18. G10. G16. G17. G18. H11. H15. H16. H17. H18. I15. I16. I17. I18. K3. K4. K5. K8. C12.

5月6日(土曜日) 晴 本日もグリッド発掘を進める。南部の排土が進捗する。実施したグリッドは、A12. A13. C12. C13. E13. G11. G12. G13. G14. H12. H13. H14. I10. I12. J10. K7. K10. K11. K13. K14. K15. K16. L4. L5. L10. L14. L15. L16. M8である。

5月7日(日曜日) 晴 西部において竪穴遺跡2箇所を発見し、はゞ円形であることを確認した。南のものは第1号住居址、北側のものを第2号住居址とする。発掘したグリッドは、A15. A16. A17. B15. B16. B17. I14. I15. J14. J15. K15. K16. L2. L15. L16. M2. M3.

M15, M16, M17, N12, H5, H6, I4, I5, I6, J3, J4, J5に土塙を発見する。

**5月9日(月曜日)** 晴 発掘区の東側のグリット設定外の地点に竪穴住居址を発見して第3号住居址と命名する。本日、拂土にかかったグリットは次の通りである。A'18, A'19, A17, A20 H12, H14, I12, I14。またグリッドJ13, J14, K14, L17, N8に土塙を発見した。

**5月10日(火曜日)** 晴 発掘区の東部に大きな竪穴住居址を発見し、第4号址と命名する。また、ロームマウンド1号址を発見した。本日発掘を進めたグリットは、D2, E2, F2である。また、G3, H3, I3, I12, I13, J3, J13, L10, L13, L14, L15, L16, K12, K13, K14, K15に土塙を発見し発掘を進める。

**5月11日(水曜日)** 晴 本日から今までに確認された4軒の住居址の内部発掘に一齊にとりかかる。また、第2号住居址の南側に接してロームマウンド第2号址を発見した。なお、土塙発掘にかかり、E2, F2, F3, G2, G3, G11, I10, I11, I12, I13, J12, J15, J16, K1, K8 K12, L7の土塙群の内部調査を終る。

**5月12日(木曜日)** 晴 昨日に引きづき住居址第1号址・第3号址・第4号址・第2号址の内部精査にとりかかる。また、第2号ロームマウンドの東部に接して第3号ロームマウンドを発見する。発掘グリッドは、E2, E3である。なお、土塙の発掘を進め、F2, F3, G2, G3を精査する。

**5月13日(金曜日)** 晴 各住居址の精査をすゝめ第1号址は縄文早期と判明し、第2号址は土師、第3号址は二軒の複合で下層のものを第6号址と命名し、いずれも土師期、第4号址も複合で下層を第5号址と命名した。なお、グリッドの拂土を進め、L8, M7, M8を完了し、土塙は、N12, N13, N14, N15, N16の群を精査した。また、ロームマウンド第4号・第5号・第6号を発見した。午後、町長・助役・総務課員・議会・総勢委員10名が発掘状況を視察した。



図35 南遺跡発掘地全景

**5月14日(土曜日)** 晴 第2号址の北部に第7号竪穴住居址を発見した。繩文早期であることを確認する。第1号住居址は床面精査にかかり、第2号住居址は配石土塙が重複しその精査を行なう。第6号住居址・第5号住居址の内部精査を進める。グリッドF、L5、L6、L7を排土し拡張する。なお、林団長が宮の原遺跡の発掘の経過を、朝日・中日・信毎の各新聞社に発表した。

**5月16日(月曜日)** 晴 第1号竪穴の柱穴を追求し確認する。第2号址も配石土塙の精査を完了実測に入る。第3号址・第6号址の実測も行なう。第7号住居址の内部精査を進める。発掘区西側を整備するため排土したグリッドは、L2、L3、L4、M2、M3、M4、A2、A3、A4、B2、B3、B4、C2、C3、C4、F5、G5である。L2、L3、L4、M2、M3、M4、C4、J16の土塙群を発掘する。

**5月17日(火曜日)** 晴 第1号住居址・第2号住居址・第5号住居址・第6号住居址の床面清掃を行ない、第7号住居址の精査に努める。またロームマウンド第1号址・第2号址・第4号址の精査に入る。土塙群の発掘も、F4、F5、G4、G5、H4、H5、J2、J3、K2、K3、L3、L4所在のものを進捗させる。この土塙群の中に柱穴と認められるものがあり、第1号住址の西側に柱列址2棟を確認した。

**5月18日(水曜日)** 晴 各住居址の清掃を完了し、実測写真撮影を行なう。ただし、第7号址は遺物が続出したため床面精査に努める。ロームマウンド1号～4号の精査を進める。一方、溝址を追求した結果、中世に属するものと判明した。土塙は、B10、B11、C11、C12、D9、D10、E9、E10、E11、F7、F8、M6、M7、M8に所在する各群の内部精査を進める。

**5月19日(木曜日)** 晴 昨日に引きつづき各住居址の実測を行ない、第7号址を完掘する。第1号址と同じく繩文早期の住居址であることを確認する。ロームマウンド第5号・第6号を精査する。第5号址の実測を完了する。

**5月20日(金曜日)** 晴 第7号住居址及第4号・第5号の重複住居址を実測する。一方、土塙群の発掘を進め、A8、B9、B11、C9、C11、D10、D11、D12、E10、E11、E12、F10



図36 遺跡見学団に発掘状況の説明風景

F 11, F 12 の土塙を精査する。なお、高速町文化財保護委員会10名の視察があった。

5月21日(土曜日) 晴 本日より発掘区全域の実測及写真撮影を行なう。また、発掘区外側の溝址を10m余り追跡調査する。これに並行して土塙群の実測を行なう。

5月23日(月曜日) 晴一発掘区南側に発見された溝址を追跡調査すると共に、昨日に引きつづき発掘区全測を行なう。遺物の水洗いを始める。

5月24日(火曜日) 晴 土塙群の実測を進める一方、土器洗いと整理を行なう。発掘区全域の実測を午後実施した。

5月25日(水曜日) 小雨後晴 発掘区の全測を完了し、遺物の洗滌及び整理と器具の収納作業を進める。土器洗い、石器洗い、片付作業。

5月26日(木曜日) 晴 発掘区全面清掃を行ない、写真撮影を実施すると共に遺物整理を行なう。

5月28日(土曜日) 晴 発掘区東部外側地域の全実測を行なう。遺物整理に主力を向ける。

5月31日(火曜日) 晴 土器洗いを完了し、片付作業及びテント撤収作業を行って現地における調査作業を一切完了する。

(林 茂樹・井東大治郎)

#### 4. 発掘調査概要 (図37)(図37<sup>a</sup>)

南遺跡に設定された発掘区は東西40m、南北30mの方形で、北西隅をA 2グリッドとし、南北をアルファベット記号、東西を数字記号としてグリッドを設定した。また調査途次において、東部外側に別区を設定した。地形は東西方向に約5°内外傾斜する地点であった。発掘調査の前段階7日間は、各グリッドの排土作業をすゝめ、この間、遺物の散布状況や土色から遺構の所在を確認した。グリッドの発掘は西部グリッド1号列から開始した。層位は第Ⅲ層上面から始めた。

グリッドD 6に、第1号竪穴住居址、その南に第2号住居址の存在が確認され、グリッド3Gにロームマウンド1号址、グリッド8H附近にロームマウンド2号址、同3号址が確認されその間に多数の土塙群が存在することが判明した。次いで東部のグリッドH 17近くに第4号竪穴址が発見され、第2号址との間、約15mの間に土塙群が無数に存在することが把握され、その中にロームマウンド第4号址・第5号址・第6号址の存在が確認された。西部のグリッドN 17からN 7にかけて溝跡が判明した。遺構は第Ⅳ層から第Ⅵ層にかけて包含されていた。

発掘事業の中段階は5月11日から19日までの9日間で各遺構の覆土除去と内部精査が行われた。第1号竪穴住居址は小形円形プランを持つ縄文時代早期末に属するもの、第2号住居址は土師器後期に属する方形プランであることが判明した。また第4号住居址は、下層に大形の方形プランの竪穴住居址第5号址の存在が確認され、これとの重複関係をもつや、小形方形プランであることが判明した。いずれも土師器後期に属するもので、西壁に石組粘土製のカマドが付設されていた。また別区グリッドC 23に溝址を追求中、竪穴式住居址第3号・第6号が発見され、これも土師器後期に属する住居址で、方形プランをもつ大小二軒が複合関係をもって存在することが明らかになった。また、後半に至って第2号址の南部に小形円形プランの竪穴式住居址が発見され

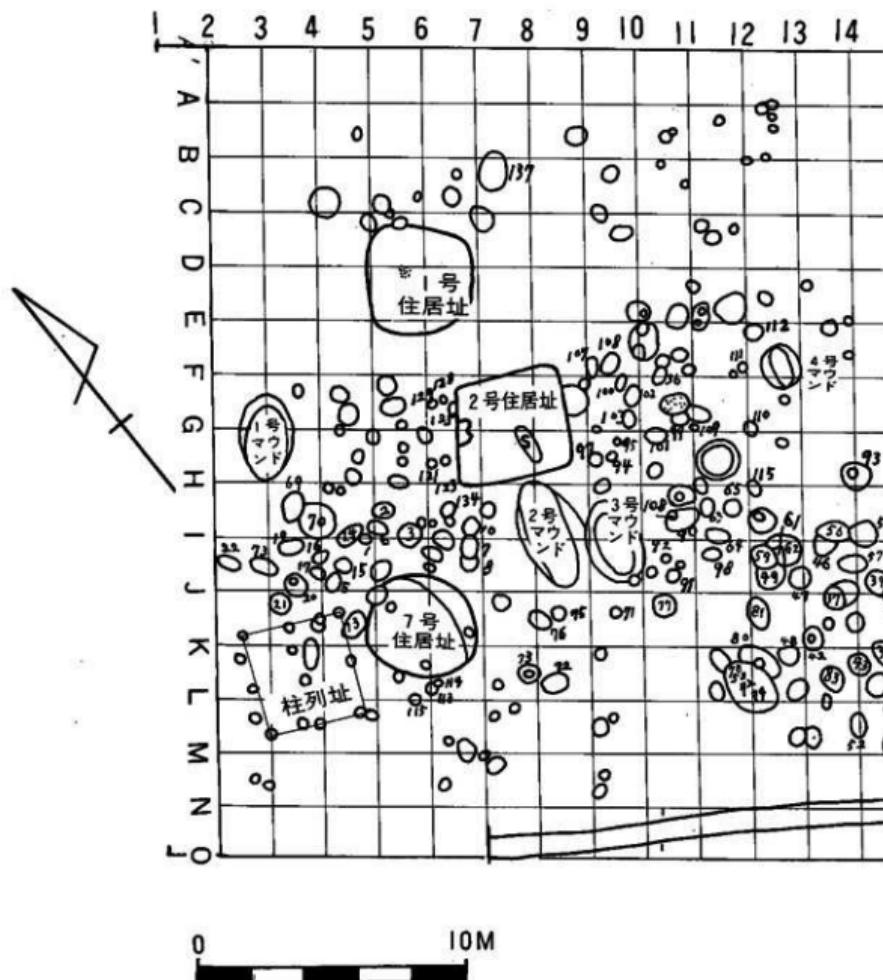
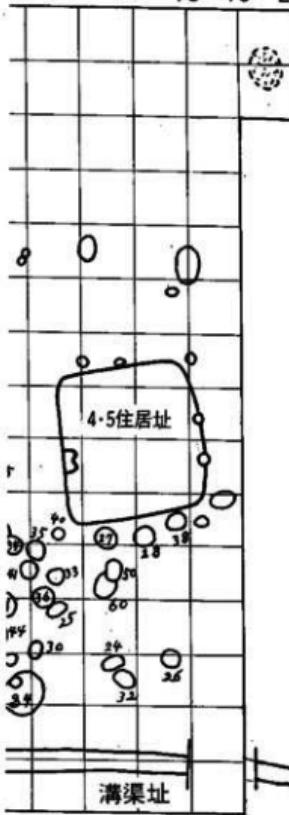


図37 宮の原南遺跡全測図

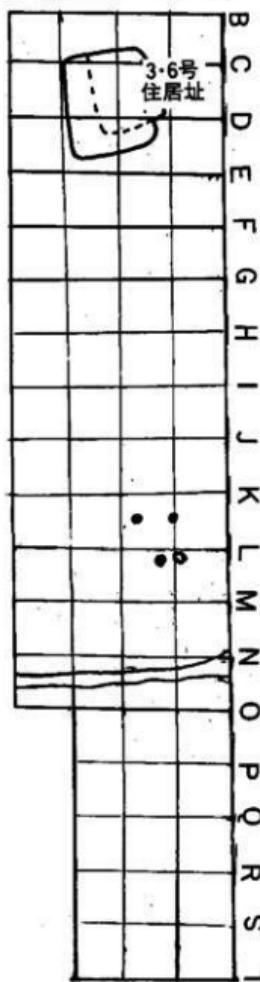
15 16 17 18 19 20



土壤基



21 22 23 24 25



これも第1号住居址と同時期のいわゆるオセンベ土器を共伴する縄文早期末の遺構であることが確認された。東海地方天神山式期の住居址としては日本的に初見であり発掘作業の意氣は大いにあがった。また後半に至って、ロームマウンド6基の精査に入り、ロームマウンドの築造過程も明らかとなり、いずれも縄文早期終末期の築造であることが確認された。土塙群の内部精査も並行して実施し、182穴が調査されたがほぼ縄文時代に伴うものと推定されるに至った。

発掘調査の後段階は、5月20日から5月31日まで、主として各遺構の清掃・実測作業が進められ、最終段階で発掘区の全面測量を実施した。これと並行して土塙群の精査を進め、総計182穴の土塙の実測を行なったが、発掘区西縁隅の中央部に柱列址2棟分が改めて確認され、土師期住居址に伴う建造物と推定された。また、構址も30m余にわたって追求されたが、ほぼ中世の掘削されたものと推定された。

以上の南遺跡において確認精査された遺構は、縄文時代早期末に所属する竪穴住居址2軒、ロームマウンド6基、土塙182穴、および、土師期後期に属する竪穴式住居址5軒、柱列址2棟、土塙若干、配石土塙1穴、土括塙1基、中世の溝址1条であった。

(林 茂樹)

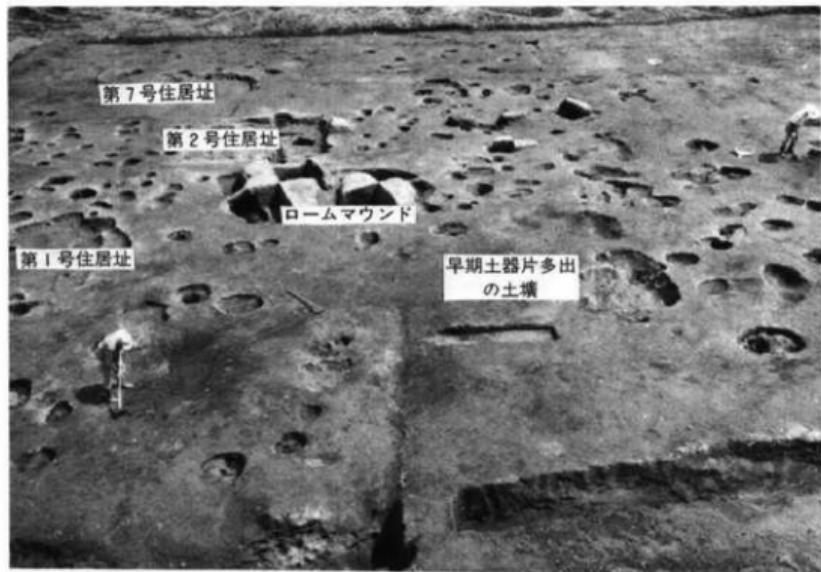


図37 南遺跡中心部景観

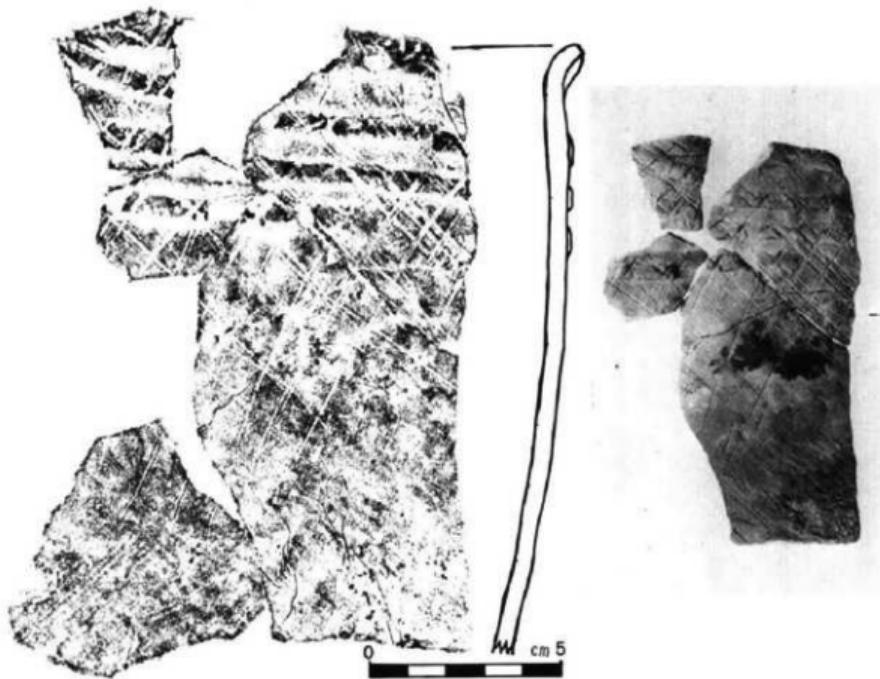


図37<sup>”</sup> 宮の原遺跡の象徴となる  
薄手(オセンベ)土器とその拓影(二)

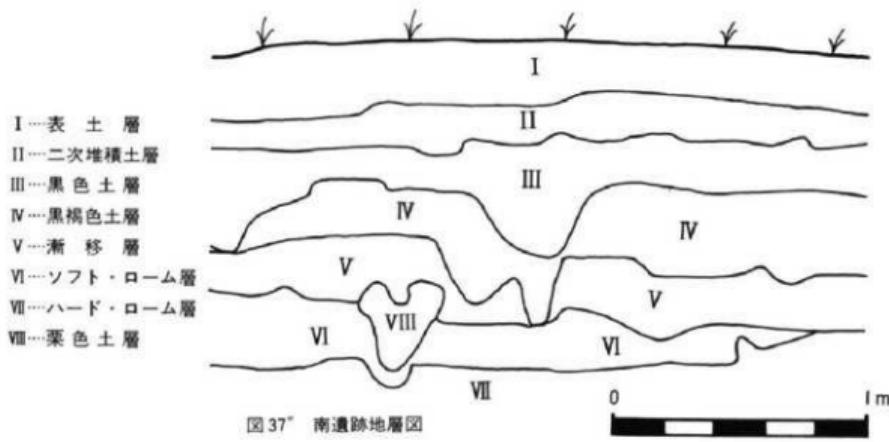


図 37<sup>”</sup> 南遺跡地層図

# IV 遺構 遺物

## 1. 縄文時代遺跡

### A 遺構

#### (1) 第1号住居址(図38~41)

本住居址は、C-D・6-7グリッド試掘によってローム層上面に確認された。平面プランは、南北径 4.2m、東西径 3.9m。西側部分に方形傾向のある不整円形を呈している。東高西低の斜面に位置する本址は、南西部分の崩壊が甚しい。黄色砂質ローム層を床面としており、中央部付

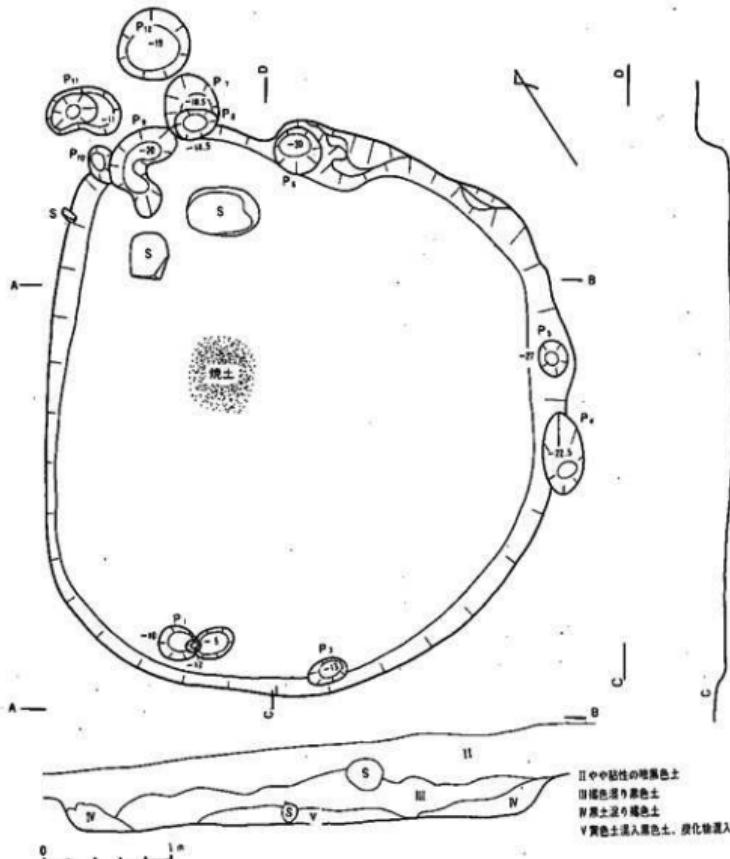


図38 第1号住居址 平面実測図

近で一部叩き状態がみられたほかは全体に軟弱であり、特に西壁付近は調査が困難を極めた。表土を第Ⅰ層とすると、第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳ・第Ⅴ層は覆土とみられる(第38図 土層図)。第Ⅱ・第Ⅲ層は自然堆積であり、第Ⅳ層は壁が崩壊し、流れ込んだものと考えられる。壁高は残存状態悪く、東壁・北壁では30cm前後を測るのに対し、南壁・西壁では10cm前後となっている。床面からは主柱穴と断定できるものは検出されなかったが、ピットが3個確認された。いずれも南壁近くP<sub>1</sub>は径30cm・深さ10cmの円形プラン、P<sub>2</sub>はそれに東接して径26cm・深さ6cmの楕円形プラン、P<sub>3</sub>は径40cm・深さ13cmの楕円形プランを呈している。これら3ピットは浅底すぎる為、柱穴と判断はできない。そのほか、壁中・壁外ピットが9個検出された。中央部よりやや北西寄りに焼土が検出されたが、少量であるがとは断定できない。尚、北西壁附近で2個の平石が出土した。60×50cmの熱をうけている磨平石と、40×30cmの磨平石である。床面直上出土であることから、本址に直属、使用されたものと思われる。

(丸山弥生)



図39 第1号住居址 全 景



図40 第1号住居址土器出土状況



図41 第1号住居址周辺土塙(発掘中)

## (2) 第7号住居址 (図42)

調査区の西側の南寄りから発見された不整形な長円形の平面プランを呈する竪穴址である。規模は長軸4.11m×短軸3.53mを測る。壁は外傾してたちあがり、壁高は低い部分で2cm、高い部分で31cmを測定でき、西壁の一部分の確認ができなかった。

床面は凹凸のある軟弱なものであり、やや西に向って傾斜している。東南に一段高くテラス状になる部分があり、この床面も凹凸がかなりあり軟弱な床面であった。別の造構かどうかの判断はつかなかった。床面には2ヶのピットといくつかの小ピットが検出されたが、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は柱穴状のものと考えられる。

炉址等の施設は確認されず、わずかに中央部に木炭片が検出されたにとどまった。縄文時代住居址の概念にはあてはまらない小規模な竪穴であるが、早期末の住居址として認めていきたい。

遺物は覆土の上層及び住居址中央部の床面直上から、いわゆるオセンベイ土器が多量に出土すると共に、片刃・石斧・石鎌・磨石・凹石等が出土した。

(田畠辰雄)

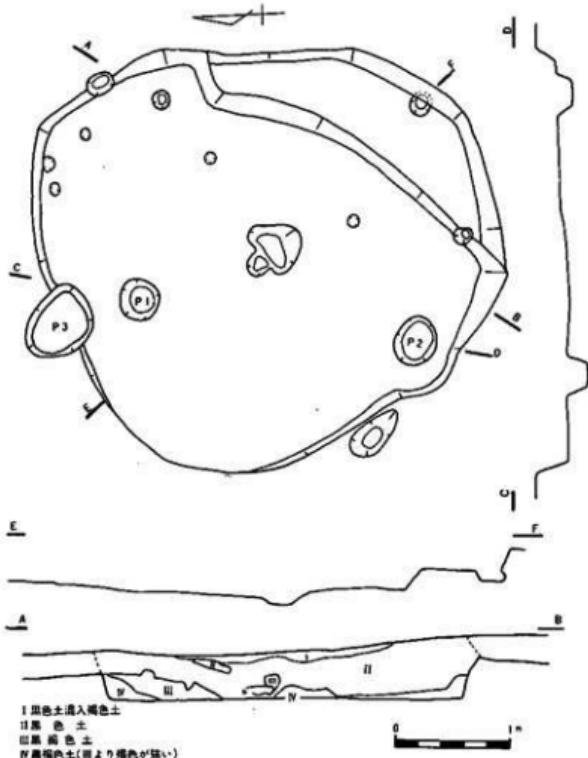


図42 第7号住居址 実測図



図43 第7号住居址発掘状況



図44 第7号住居址周辺土塙群

(3) ロームマウンド (図45~49)

今回の調査では全部で4基のローム・マウンドが発見された。

1号ロームマウンドは調査区西隅より発見され規模は $3.55\text{cm} \times 3.20\text{cm}$ を測る、黒色土中よりオセンペ土器が出土しており、ピットをもっている。

2号ロームマウンドは第2号住居址南に位置しており、規模は $4.10\text{m} \times 3.58\text{m}$ を測る。黒色土中より花横下層式土器片1片が出土している。

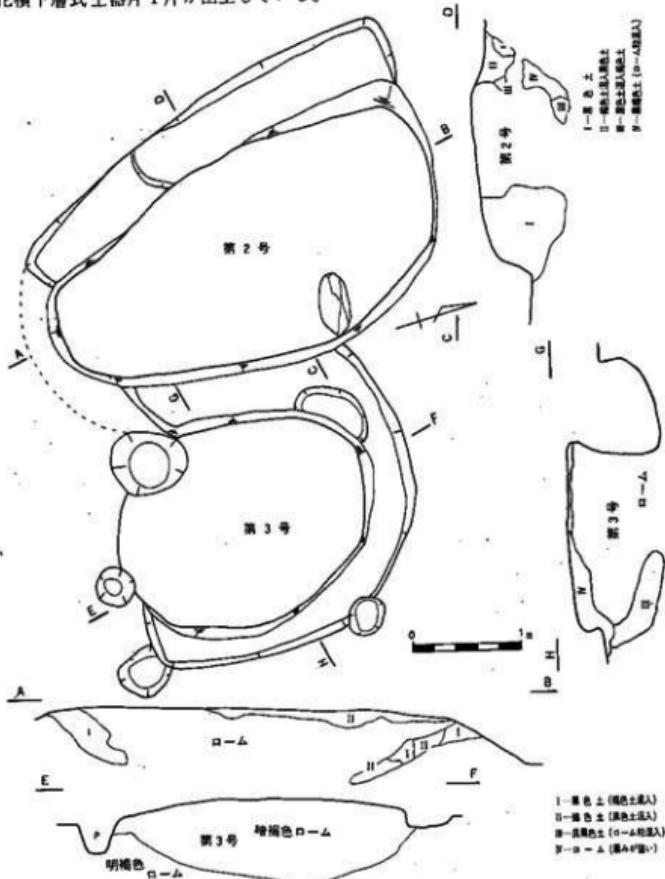


図45 ロームマウンド第2号・第3号址 実測図

3号ロームマウンドは、2号ロームマウンドの東にくついたかたちであり、規模は $3.84\text{m} \times 3.55\text{m}$ を測る。5個のピットと切り合っている。

4号ロームマウンドは、調査区のほぼ中央に位置しており、規模は $1.40\text{m} \times 1.05\text{m}$ を測る。一番小型のものであり、遺物は出土していない。

(田畠辰雄)

図46-1  
ロームマウンド第2・3号  
址の発掘俯瞰図



図46-2  
ロームマウンド第2号址断面



マウンド断面の壁に判然と黒土  
の混入層が見える。始め掘りあ  
げた土をうめもどしのときにレ  
ンズ状に埋積された跡が判る。



図46-3 ロームマウンド第3号址断面

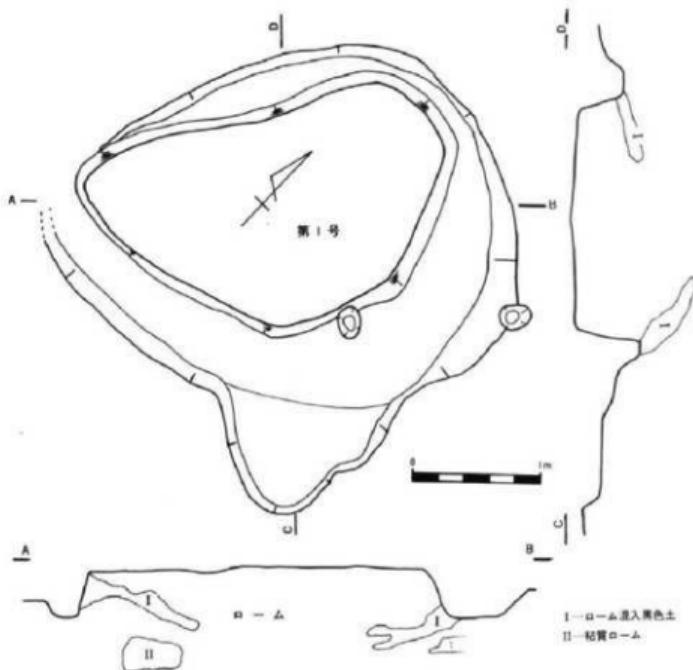


図47 ロームマウンド第1号址 実測図



図48 ロームマウンド第1号址断面

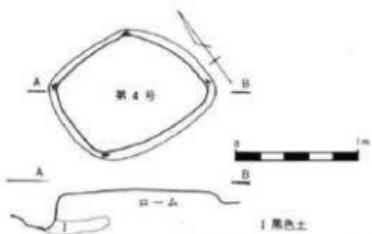


図49 ロームマウンド第4号址



#### (4) 土塙群 (第2表・図50~53)

住居址、第1号・第2号・第7号の周辺地区に計182穴の土塙が存在した。主として発掘区の南西隅、及び南東部に集中していた。

これらの調査要目の詳細については第2表に記述したので参照されたい。大部分が、绳文時代の早期末の時期、即ち第1号住居址及び第7号住居址、ならびにロームマウンド群と同時点に構築されたものと思われ、平安期に廃止するものは若干数にとどまるものと考えられる。(林茂樹)

第2表 土塙要目表

ピット 番号	団番 番号	ブラン			規模(cm)			状態及出土遺物
		平面	断面	外輪一部袋状	長軸	短軸	深さ	
1	50-1-2	円形	*	外輪一部袋状	86	86	54	ピットが切り合う
2	*	不整形	*	外傾	100	55	54	ピットあり
3	*	長円形	*	*	84	55	20	一段あり
4	*	*	*	外輪一部袋状	85	65	32	
5	*	*	*	外傾	105	60	21	ピットあり
6	*	*	*	直立	51	29	34	土器片1片 おせんべ土器
7	*	*	*	*	100	60	31	一段あり
8	*	*	*	外傾	60	42	23	
9	*	円形	*	外傾	40	39	23	
10	*	長円形	*	外傾	119	112	53	

ピット 番号	図番 番号	ブラン		規模(cm)			状態及出土遺物
		平面	断面	長軸	短軸	深さ	
11	50-1-2	長円形	外傾	80	40	17	
12	タ	タ	タ	65	40	22	
13	タ	タ	直立	69	49	10	吉野谷13片、炭化石フレーク1 吉野谷片1、炭化片1
14	タ	円形	タ	22	17	16	
15	タ	長円形	タ	29	22	15	
16	タ	円形	タ	22	22	5	
17	タ	不整形	タ	42	42	29	
18	タ	円形	外傾	56	53	44	石器・石錐1 チャート製
19	タ	タマゴ形	タ	53	51	13	
20	タ	半円形	タ	70	48	17	
21	タ	長円形	直立	49	30	17	
22	タ	タ	外傾	69	41	17	ピットあり
23	タ	タ	直立	35	22	7	
24	タ	タ	タ	29	26	10	
25	タ	タ	タ	38	31	54	
26	タ	不整形	外傾	50	23	31	
27	タ	長円形	直立	65	45	20	
28	タ	不整長円形	タ	90	68	17	
29	タ	長円形	タ	76	64	22	
30	タ	円形	外傾	41	40	24	
31	タ	長円形	タ	64	48	14	
32	タ	隅丸方形	タ	131	113	19	ピットあり
33	タ	円形	タ	76	76	12	
34	タ	隅丸長方形	タ	87	63	21	ピットあり
35	タ	長円形	タ	87	76	22	タ
36	タ	タ	直立	108	51	15	
37	タ	円形	外傾	80	74	18	
38	タ	長円形	直立	66	56	14	
39	タ	タ	タ	76	46	10	
40	タ	タ	タ	61	47	48	
41	タ	円形	外傾	70	65	16	ピットあり
42	タ	長円形	タ	76	56	9	
43	タ	タ	タ	?	45	15	焼土あり
44	タ	円形	直立	29	28	20	
45	タ	タ	タ	53	52	12	
46	51-1-2	長円形	直立	33	25	19	
47	タ	不整形	外傾	58	30	5	土器片1片 せんい土器
48	タ	長円形	タ	43	32	13	ピットあり
49	タ	円形	直立	27	26	10	
50	タ	タ	タ	39	31	17	
51	タ	長円形	タ	46	36	11	ピットあり
52	タ	円形	タ	36	36	11	土器片1片 おせんべ土器
53	タ	長円形	タ	44	38	22	

ピット番号	図番番号	プラン		規模(cm)			状態及出土遺物
		平面	断面	長軸	短軸	深さ	
54	51-1・2	不整形	外傾	82	55	31	ピットあり
55	*	長円形	*	83	45	12	ピットあり
56	*	円形	*	42	40	11	平板な石あり
57	*	長円形	*	75	45	25	
58	*	*	*	59	52?	17	上面に焼土あり、土器片2片 おせんべ土器
59	*	不整形	直立	89	67	18	上面焼土58に亘る
60	*	円形	*	30	25	17	
61	*	タマゴ形	外傾	47	49	22	
62	*	円形	*	44	37	20	
63	*	長円形	*	136	23	11	ピットあり
64	*	*	*	61	42	33	
65	*	円形	直立	51	50	8	
66	*	*	*	50	47	8	
67	*	不整形	外傾	62	67	11	ピットあり
68	*	*	*	67	37	12	
69	*	円形	直立	44	40	11	
70	*	長円形	*	41	30	15	
71	*	*	外傾	42	38	26	
72	*	円形	直立	25	24	27	土器片3個体 せんい土器1片
73	*	長円形	*	86	70	35	ピットあり
74	*	円形	*	45	43	23	
75	*	*	*	47	47	24	
76	*	長円	*	56	52	11	
77	*	不整形	*	92?	55	20	
78	*	*	*	61	34	11	
79	*	長円形	外傾	63	45	6	
80	*	*	*	80	59	70	
81	*	*	*	211	187	12	
82	*	*	直立	75	63	21	
83	*	*	*	35	26	7	
84	*	円形	*	35	30	17	
85	*	*	*	33	30	17	
86	*	長方形	外傾	60	52	23	ピットあり
87	*	円形	*	38	35	29	
88	*	*	直立	34	34	31	
89	*	*	外傾	72	62	27	
90	*	長円形	直立	48	31	19	
91	*	円形	*	30	25	5	
92	*	長円形	外傾	47	40	35	
93	52-1・2	不整形	*	105	48	12	土器片3片(おせんべ土器・せんい土器)
94	*	円形	直立	34	30	45	
95	*	*	*	41	37	61	
96	*	*	外傾	108	95	6	一段あり

ピット番号	図番番号	プラン		規模(cm)			状態及出土遺物
		平面	断面	長軸	短軸	深さ	
97	52-1・2	長円形	外傾	97	48	17	
98	タ	タ	タ	54?	60	27	
99	タ	不整形	タ	87	64?	16	
100	タ	円形	直立	32	25	7	
101	タ	長円形	タ	54	46	16	
102	タ	タ	タ	120	64	16	
103	タ	タ	外傾	48	32	30	
104	タ	円形	直立	55	49	22	
105	タ	長円形	外傾	75	45	11	
106	タ	タ	直立	73	60	24	
107	タ	タ	外傾	63	45	25	
108	タ	タ	タ	99	67	11	ピットあり
109	タ	円形	タ	50	40	13	
110	タ	タ	直立	20	17	16	
111	タ	タ	外傾	87	63	21	ピットあり
112	タ	不整長円形	直立	51	39	27	
113	タ	長円形	外傾	65	45	20	
114	タ	円形	直立	37	36	16	
115	タ	長円形	タ	84	44	22	石あり
116	タ	タ	外傾	119	70	20	
117	タ	タ	タ	66	56	21	石あり
118	タ	タ	直立	90	69	30	土器片3片、おせんべ土器
119	タ	タ	外傾	69	64	10	ピットあり
120	タ	タ	直立	86	76	12	ピットあり
121	タ	タ	外傾	92	86	25	
122	タ	タ	タ	57	39	12	
123	タ	タ	タ	68	61	25	
124	タ	長円形	タ	?	120	7	ピットあり
125	タ	不整形	タ	120	65?	7	ピットあり
126	タ	長円形	タ	86	83	44	
127	53-1・2	不整円	直立	75	71	45	
128	タ	タマゴ形	タ	65	55	20	
129	タ	長円形	タ	71	60	25	
130	タ	円形形	タ	57	64	13	
131	タ	タ	タ	67	74	22	
132	タ	不整長円形	タ	83	57	18	
133	タ	長円形	外傾	211	187	12	ピットあり
134	タ	タ	タ	89	69	11	ピットあり
135	タ	タ	タ	53	45	12	
136	タ	不整長円	直立	100	97	18	土器片9片、土師器存-3個体、甕4個体
137	タ	円形	タ	81	74	17	ピットあり、土器片11片(おせんべ土器)
138	タ	長円形	外傾	72	39	7	
139	タ	タ	タ	103	71	18	

ピット 番号	図番 番号	プラン		規模(cm)			状態及出土遺物
		平面	断面	長軸	短軸	深さ	
140	53-1-2	長円形	外傾	42	38	25	
141	*	*	*	45	40	21	
142	*	円形	*	65	60	31	
143	*	長円形	直立	37	33	13	
144	*	*	*	59	34	17	
145	*	不整長円形	*	72	54	9	
146	*	長円形	一部袋状	73	61	35	
147	*	*	外傾	32?	42	2	ピットあり
148	*	*	*	55	40	16	
149	*	*	一部袋状	32	23	16	
150	*	*	直立	40	25	17	
151	*	円形	*	50	50	21	
152	*	*	*	46	45	15	
153	*	長円形	*	50	41	23	
154	*						
155	*	円形	外傾	69	65	17	
156	*	*	*	25	24	27	
157	*						
158	*	円形	外傾	30	30	11	
159	*	*	*	32	35	14	
160	*						
161	*						
162	*	長円形	外傾	67	50	16	ピットあり
163	*	*	*	90	50	12	
164	*	円形	*	35	35	15	
165	*	長円形	*	65	55	11	
166	*	円形	*	59	51	13	
167	*	長円形	*	43	37	12	
168	*	円形	直立	45	42	19	
169	*	長円形	外傾	73	54	19	
170	*	*	*	37	32	15	
171	*	*	外傾	80	52	13	
172	*	円形	直立	32	30	19	
173	*	*	外傾	47	47	24	
174	*	*	*	33	30	19	
175	*		一部袋状	83	42	60	
176	*	長円形	外傾	84	53	24	石あり
177	*	*	*	162	112	18	
178	*	*	*	82	55	24	
179	*	*	*	75	66	25	
180	*	*	*	60	43	21	
181	*						
182	*	長円形	外傾	72	45	18	ピットあり

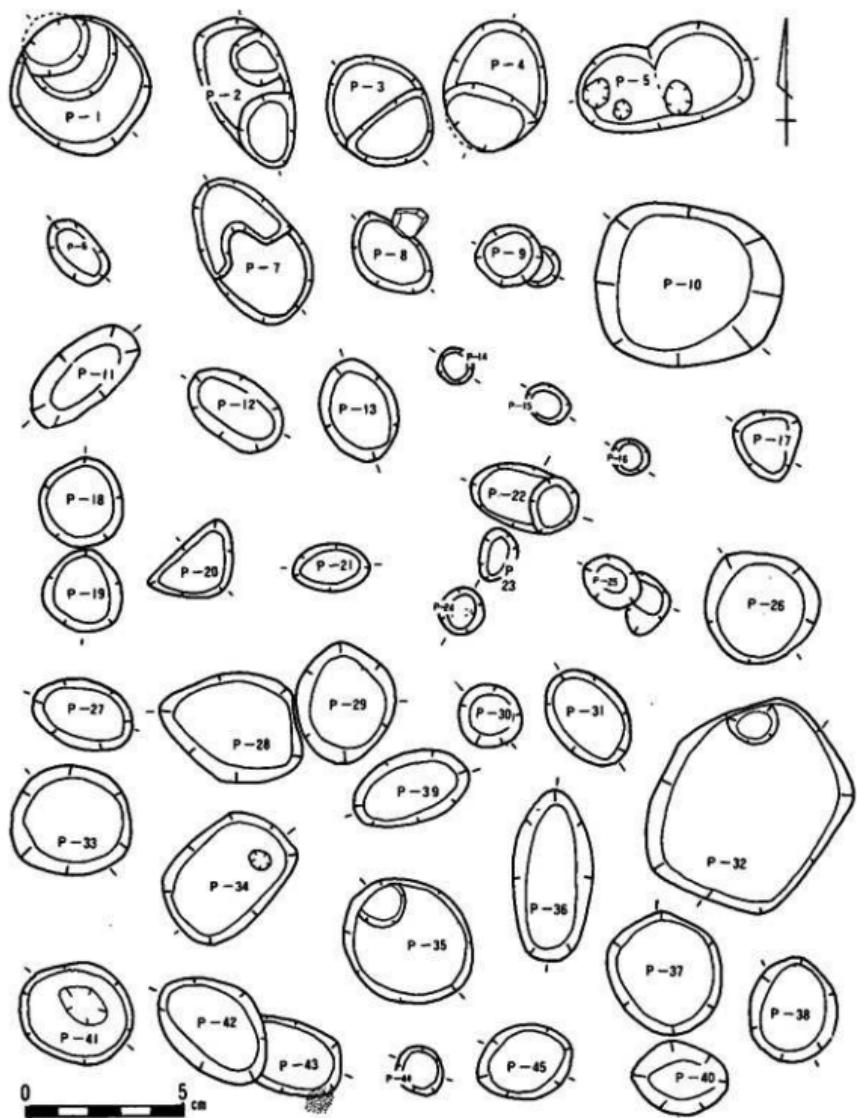


図50-1 土壌実測図(1)

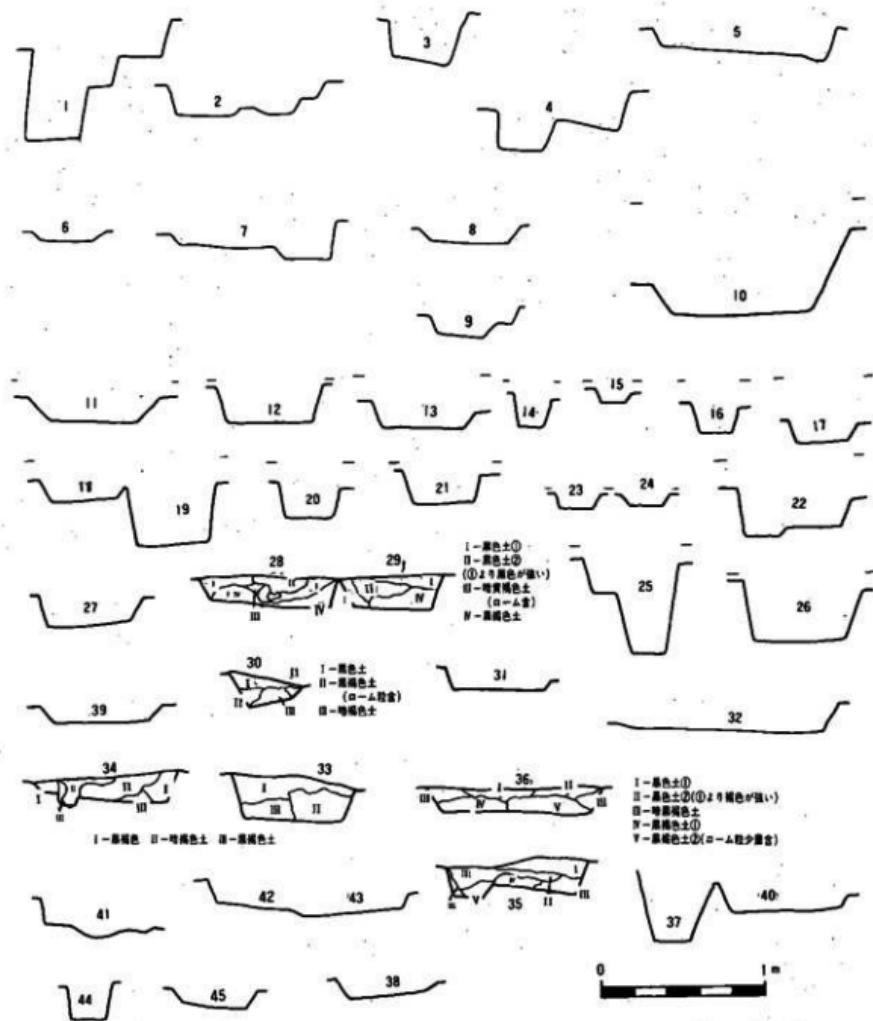


図50-2 土塙実測図(断面)

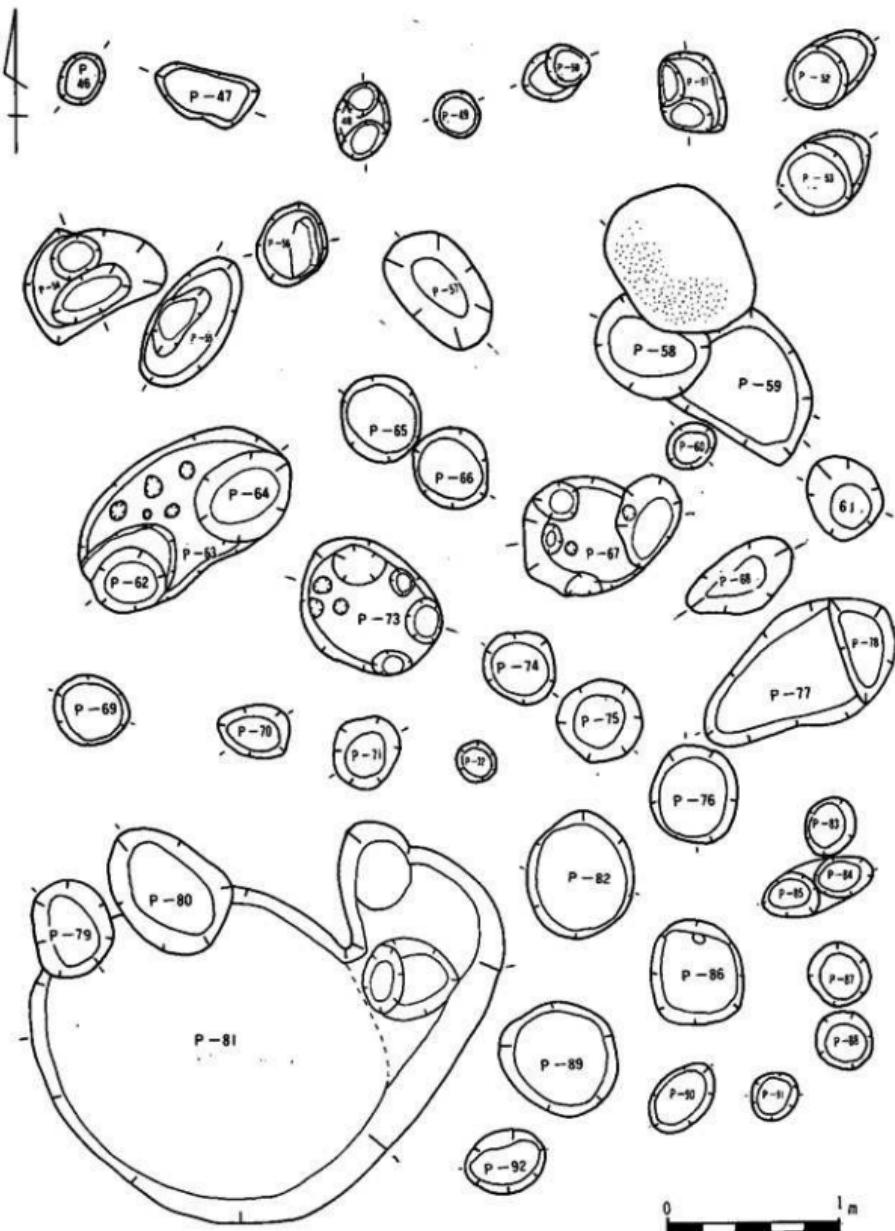


図51-1 土壌実測図(2)

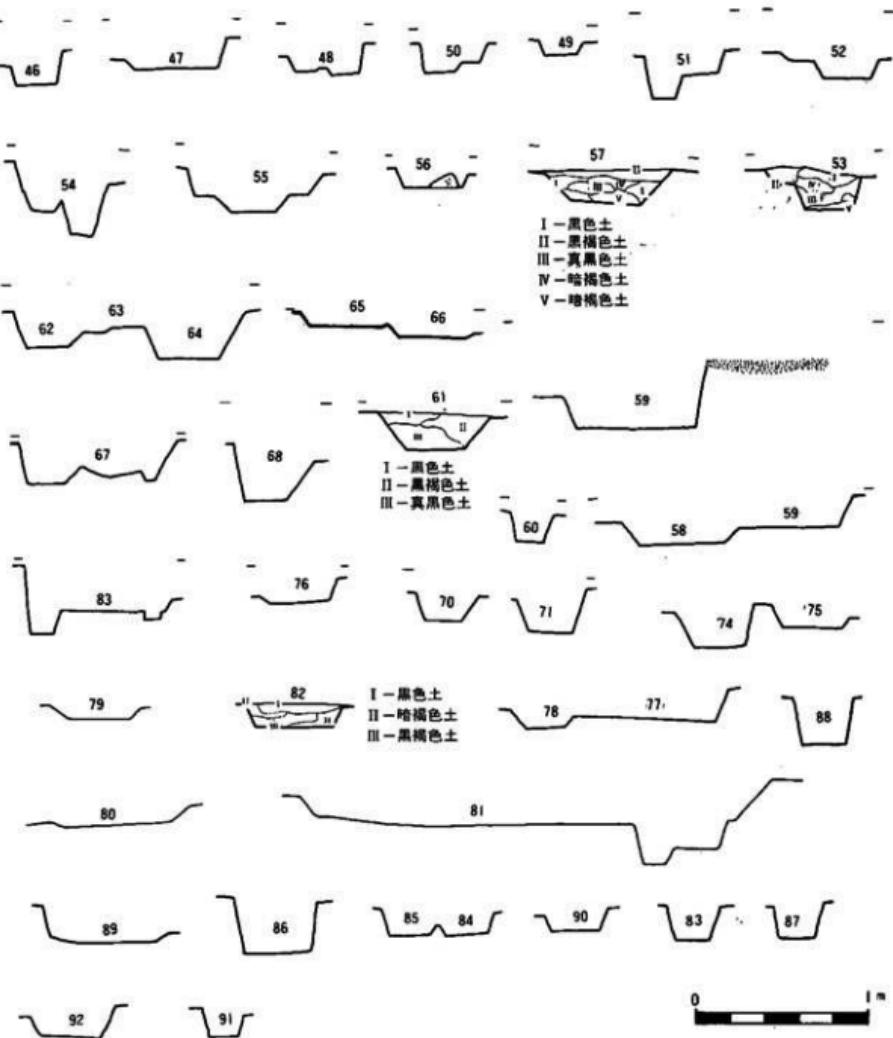


図51-2 土壌実測図(同断面)

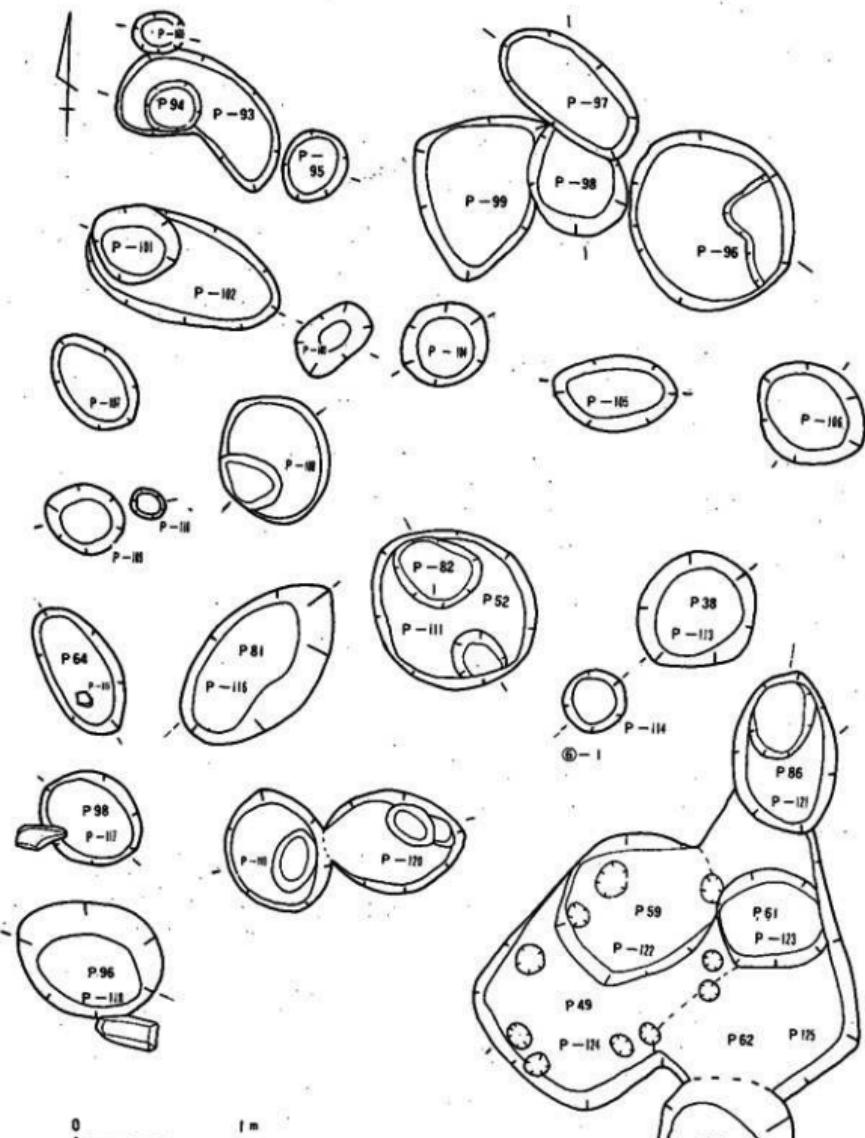


図52-I 土壌実測図(3)

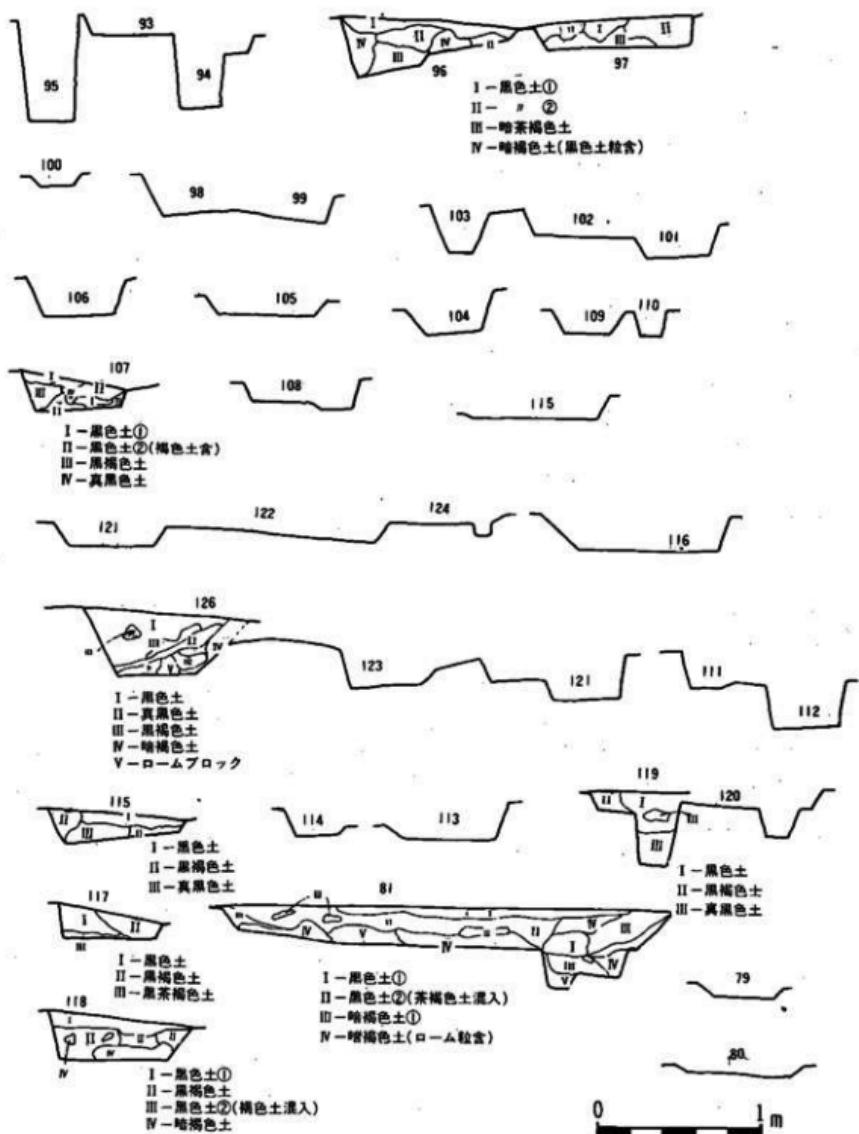


図52-2 土壌実測図(同断面)

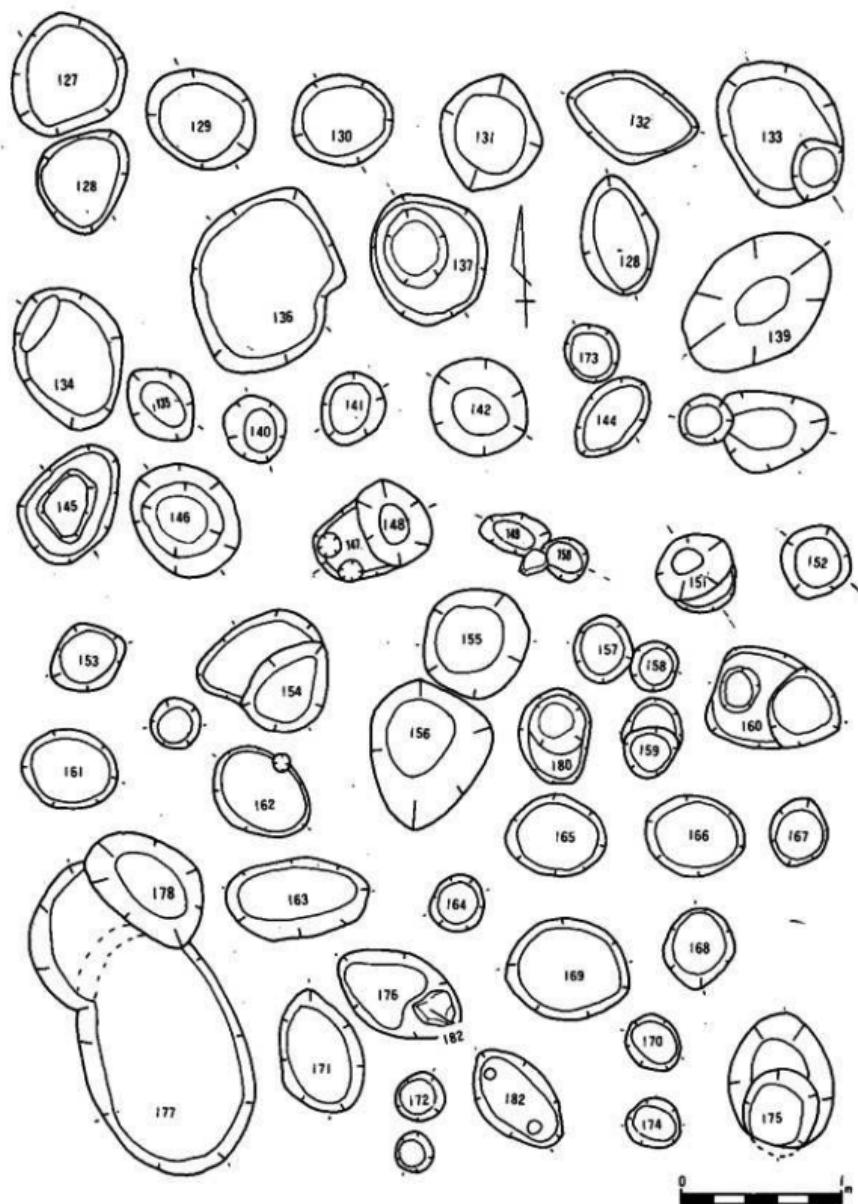


図53-1 土壌実測図(4)

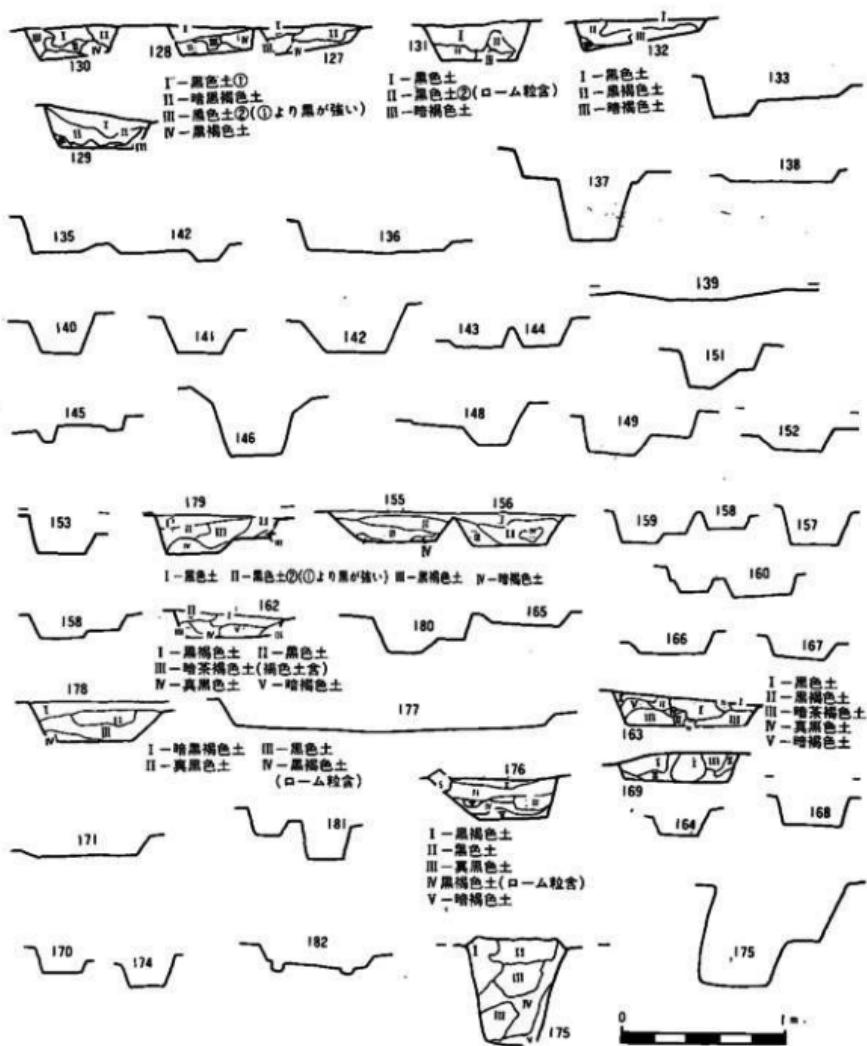
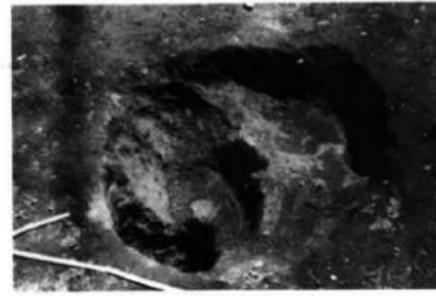
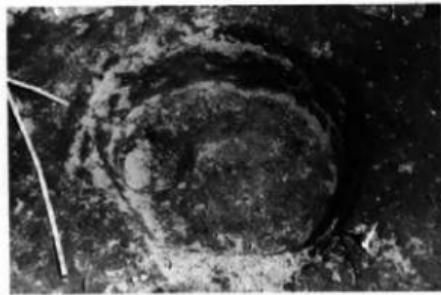
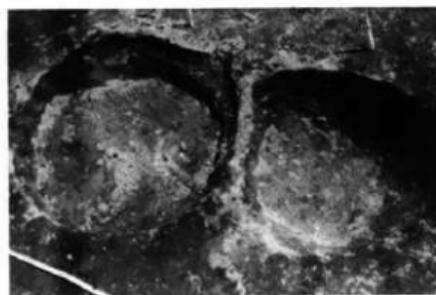
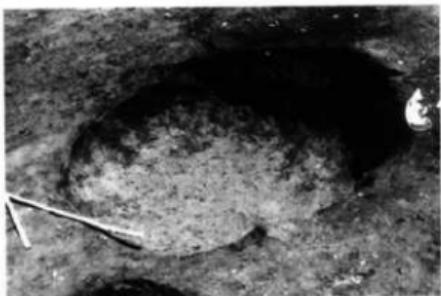


図53-2 土塙実測図(同断面)



(左) 1号

図54 土壌群発掘状況の部分

28・29号

54号

102・101号

(右) 10号

32号

64・63・62号

124・122・121号

## B 遺物

### (1) 織文式土器 (図56~図62)

出土した織文式土器はすべて破片で総数200片であった。内訳は、第1号住居址より30片、第7号住居址から70片、遺構以外の各グリットから約100片ほどである。これを観察、測定した結果、次のように2分類6種に細別でき得た。

#### 第I群土器 (図56・57上・63~66)

淡褐色を呈する器厚2mm~4mm程度の薄手の土器で全面に指頭圧痕が認められ、胎土に細かな長石が含まれ、焼成は堅緻な尖底土器で、口縁はゆるやかな波状を呈する。口縁部から同下部にかけて細い粘土紐を平たく貼りつけて隆帯文を構成しているのが共通である。いわゆるオセンベ土器と称され、古くは、薄手細線指痕文土器と命名されたものに共通する土器の一群であるが、施文状態によりさらに、三種に分類することができる。いづれも尖底の器形を呈する。

##### A類 (図56)

貼付粘土紐の巾は3mm乃至5mmで厚さ1mm内外で、施文は口縁に直線横走する3~4条の平行線文を構成するもの (1・2・9・10)。口唇に沿って直線一条を施し、その下部に蛇行横走文を2~3条平行させて構成するもの (3・4~6・48・64)。横走する2条の粘土貼付文の間隔が広くその間は斜線状並列で文様構成をするもの (20・65・69)。横走する3~4条の貼付文が波状口縁の頂点下部で三角文、もしくは円文を構成するもの (71・111・122)。波状口縁の頂点から直線状に垂下させて肋骨状に左右に展開する隆帯文を構成するもの (52) がある。

これらの隆帯文の上に、アナダラ属の貝殻腹縁による条痕文を全面に斜走または縱走させる場合が多くこれが器面、隆帯上面に共に施されるもの (1~10)、隆帯上面にのみ施されるもの (69・70) がある。

なお口唇部に条痕施文器具と同じ貝殻腹縁を連続刺突させてあるもの (1・71・111) があるが無文のものが多い。

胴部以下は無文で指頭圧痕の認められるものが大部分で底部は丸底に近い尖底である。

##### B類 (図57)

口縁に平行して横走する隆帯間に斜条文を構成する貼付隆帯文の上面にLR繩文原体を回転施文したものでただ1片が認められたのみである。他の要素はすべてA類と同じ状態である。(20)

##### C類 (57~21~23) (図62~123)

小破片が4片のみであるが、貼付隆帯2条を口縁に並行して施文したのみで、条痕文の全く施されないもので、器面はや、黒褐色を呈するもの。他の要素はA類と同様である。

#### 第II群土器 (図57・図62)

器面が墨褐色を呈する厚手の深鉢形土器で底部は小さな平底形である。胎土にや、多量の纖維を含有しており、焼成は中位である。器壁の厚さは8mm内外を測る。(図57~29~40)

施文によりさらに3分類することができる。

##### A類

巾3mmの縄文原体を回転施文したもので(24~28)の如くS字状結節文が施され羽状縄文となるもの(24・137)と(108)の如く結節文を伴わない羽状縄文の施文された茶褐色の土器もある。また(106~110)の如く単純な回転縄文の施文されたものもある。関東の縄文早期末の土器に類似する。

#### B類(図57-29・30、図62-133)

同じく繊維を含む厚手の土器で、器面全面に、2条の燃糸を1単位としてコイル状に巻きつけた原体を、口縁に対して斜走または縱走させて施文している。時に回転方向を交錯させ斜格子目状を画くもの(29)もある。底部に至っては施文は粗くなる。尖底深鉢となろうか。

#### C類(図57-37~40)

黒褐色または茶褐色を呈する厚手の丸底(図58-59)の深鉢形土器で、胎土に若干の繊維と長石を含む。

全面に、巾1.5mmの条痕を密接して施文してある。裏面には繊維の痕が認められるが、条痕は全く認められない。

以上、出土した土器の分類を示したが、2軒の竪穴式住居址に共伴した土器群を以上の類別によって観ていくことにする。

#### 第1号竪穴式住居址出土の土器(図58・図85)

本住居址の覆土から床面に至る間から検出された土器片は第Ⅰ群A類20片、第Ⅱ群A類2片、B類2片、C類1片(丸底)計25片であり、各類の包含位置に層位的な区別は認められなかった。なお上述以外の土器は全く出土しなかった。

#### 第7号住居址出土の土器(図60~図62)

覆土から床面に至る間に包含された土器は、第Ⅰ群A類52片、B類13片、第Ⅱ群A類4片、C類1片、計70片であった。各類の包含層位に区別はなく全く混在していた。またこれ以外の土器は全く出土しなかった。

#### 土塙群出土の土器(図62)

各土塙のうちP72からは第Ⅰ群A類4片、C類1片、第Ⅱ群B類1片、計6片(122~127)が出土し、P13から第Ⅱ群B類1片、第Ⅰ群A類2片(129~131)が、P6から第Ⅰ群A類1片(128)、P93から第Ⅰ群A類3片(132~134)、P58から第Ⅰ群A類2片(135~136)、P47から第Ⅱ群A類が出土している。また第2号ロームマウンド坑底部から花穂下層式類似土器1片(137)が出土した。ここにおいても、第Ⅰ群土器いわゆるオセンベイ土器と関東系繊維土器の共存する事実があり、第1号址と第7号址の出土状態と同様であった。(林茂樹)



図55 縄文土器出土状況(土器図64号)

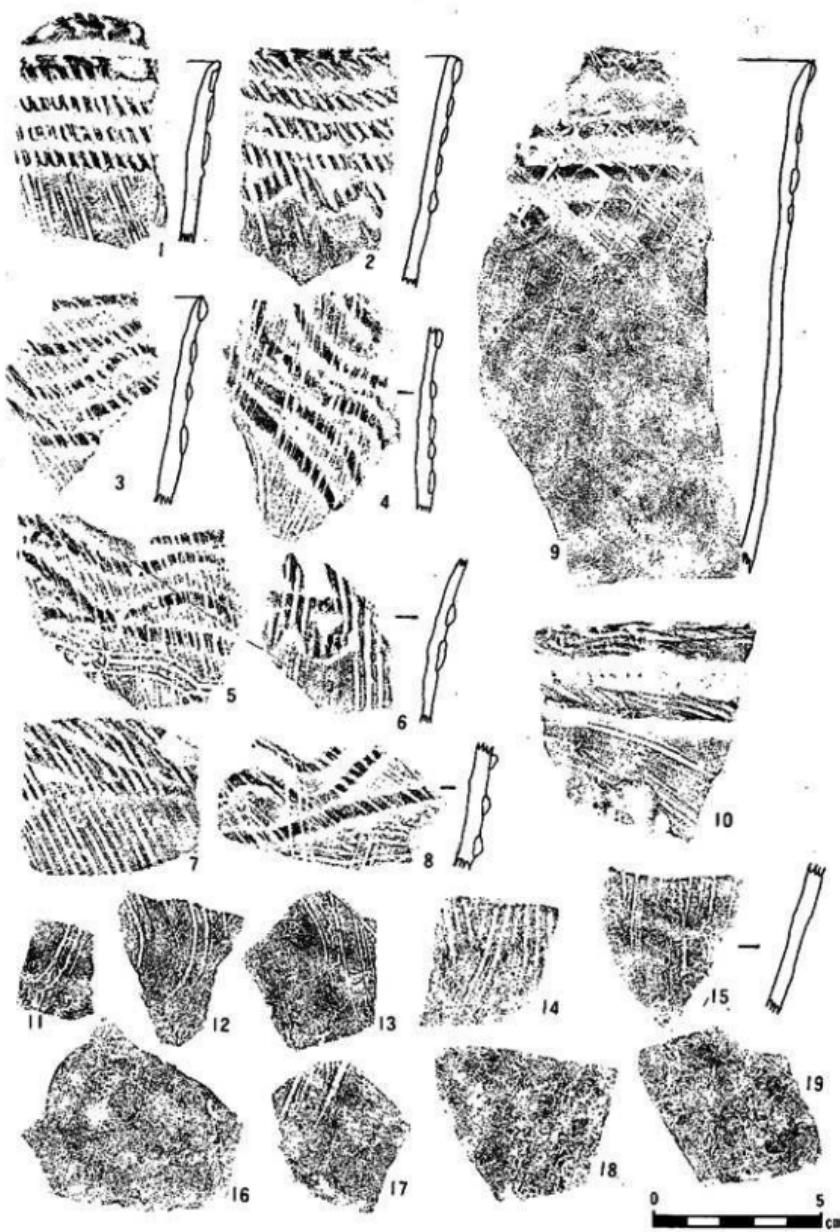


図56 繩文式土器拓影（第I群）

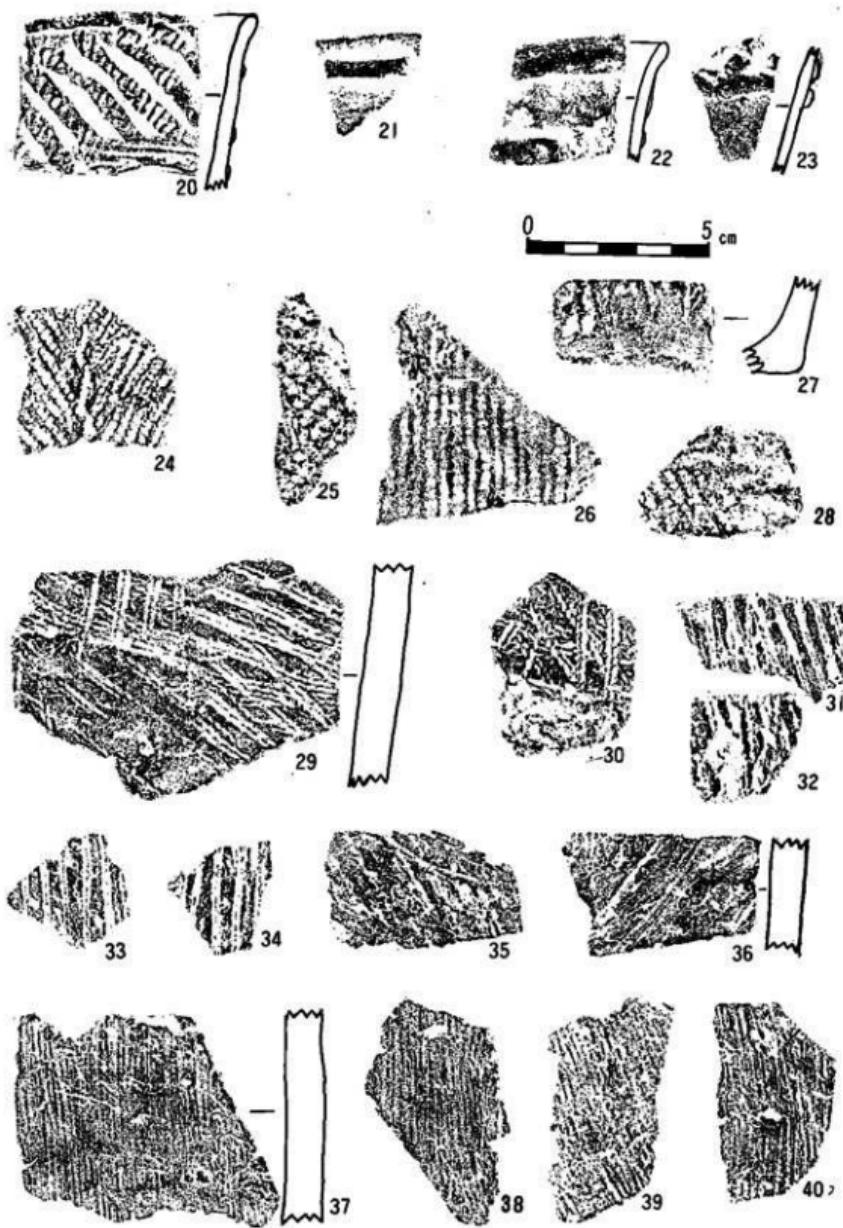


図57 縄文式土器 拓影（第Ⅰ群、第Ⅱ群）

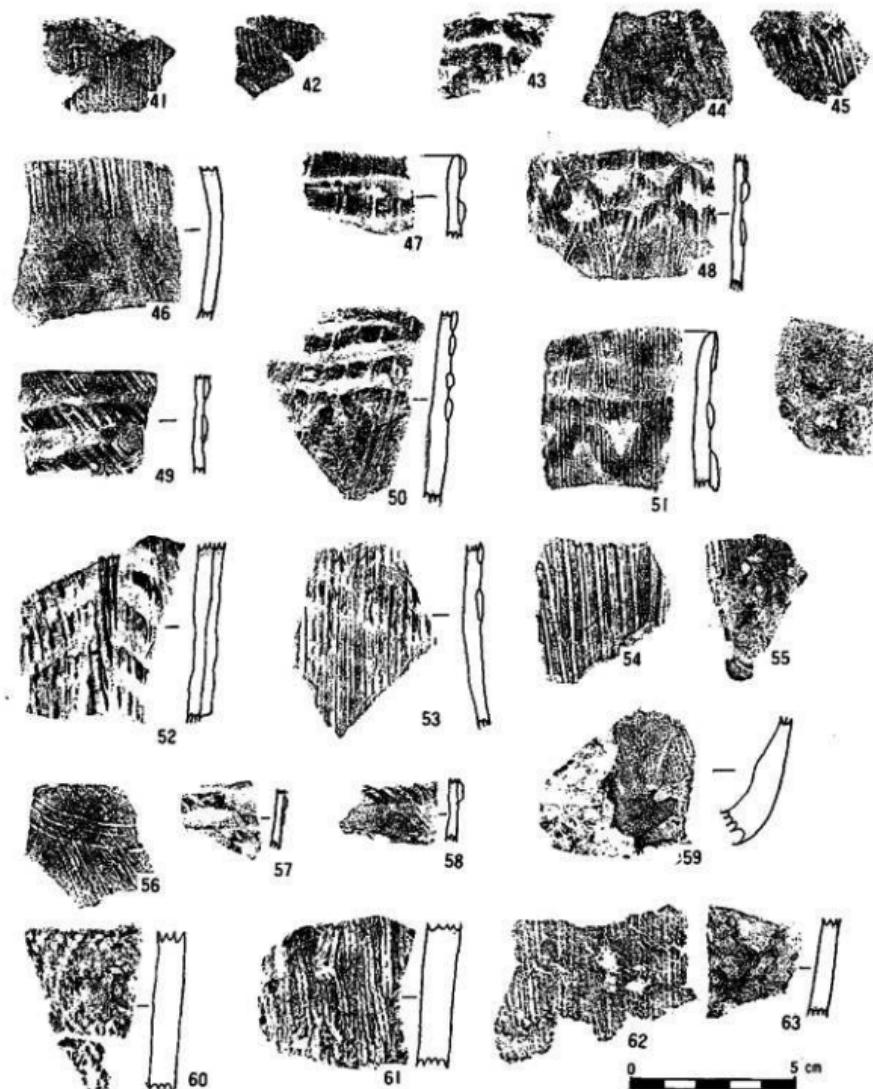


图58 绳文式土器拓影 (第1号住居址出土)

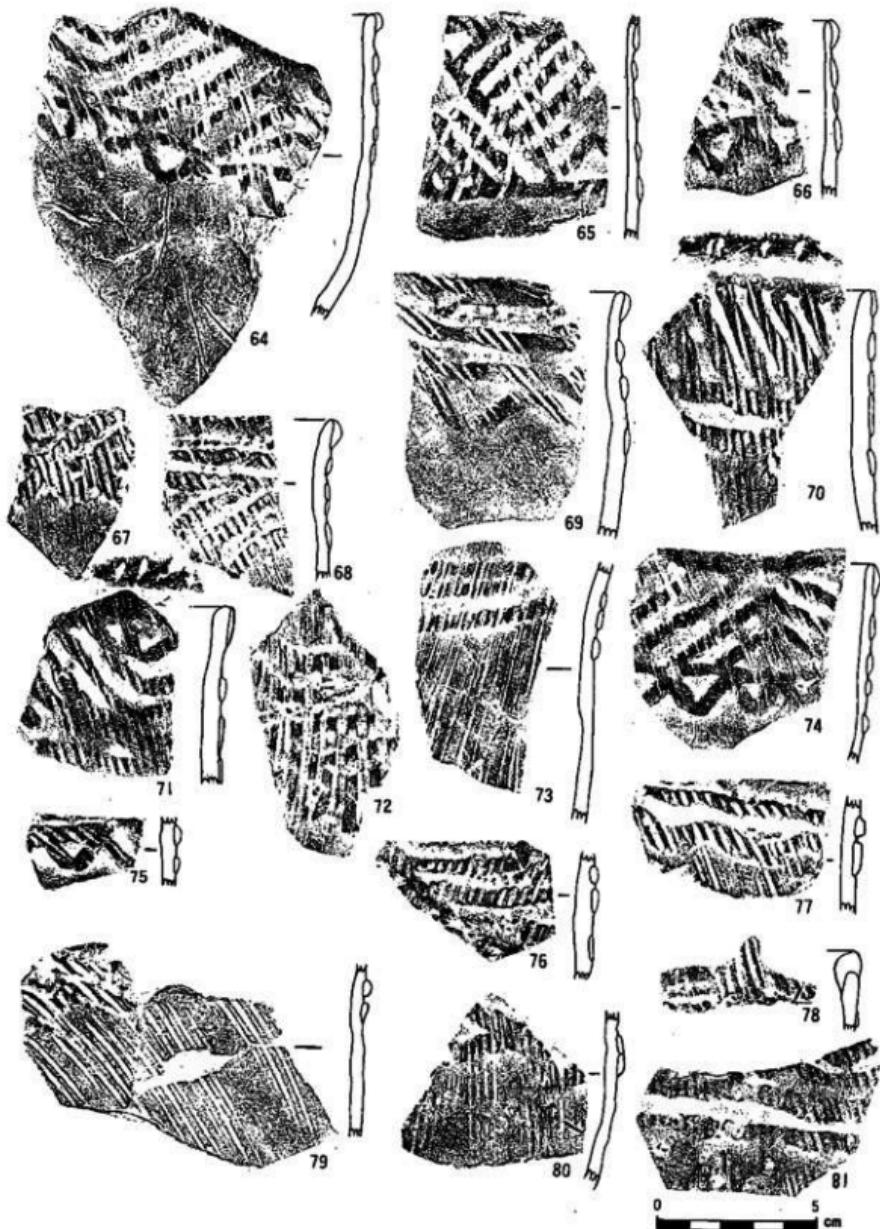


图 59 绳文式土器拓影 (第 7 号住居址出土 - I )

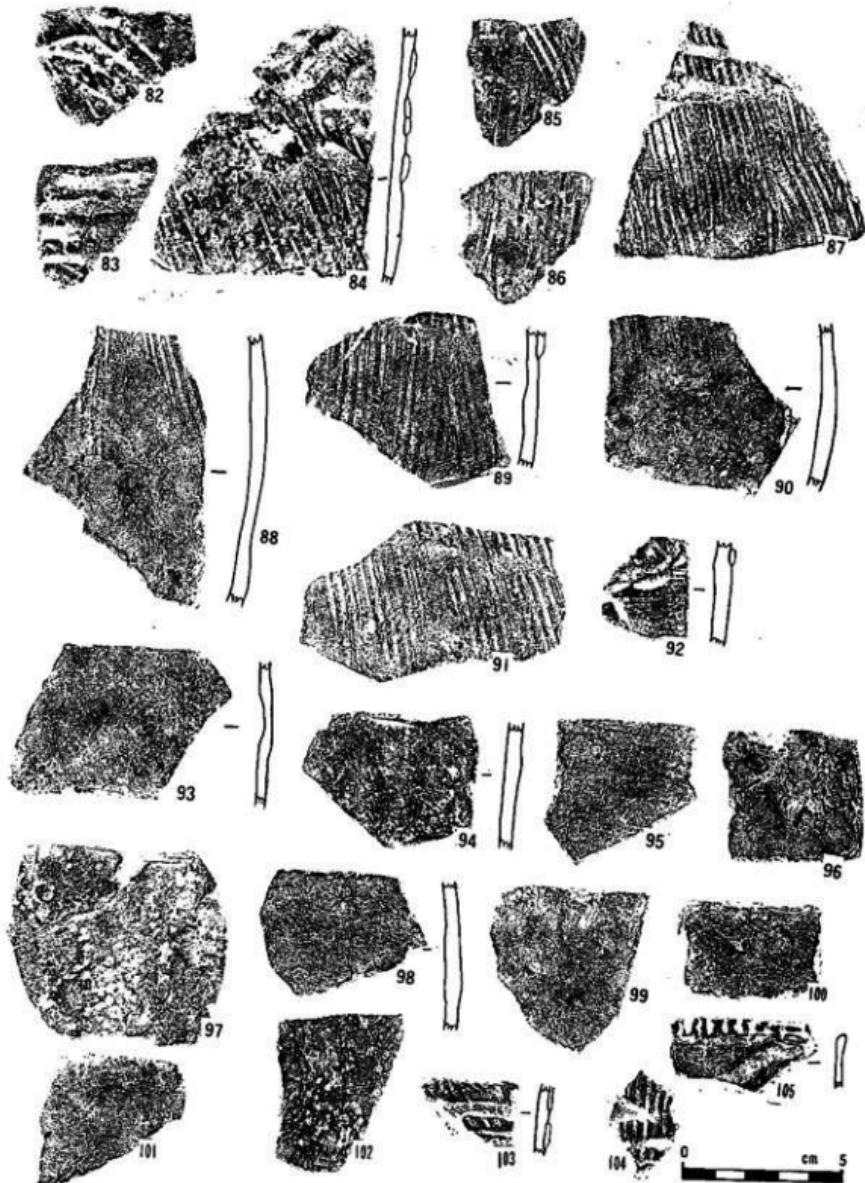


図60 楽文式土器拓影（第7号住居址出土－2）

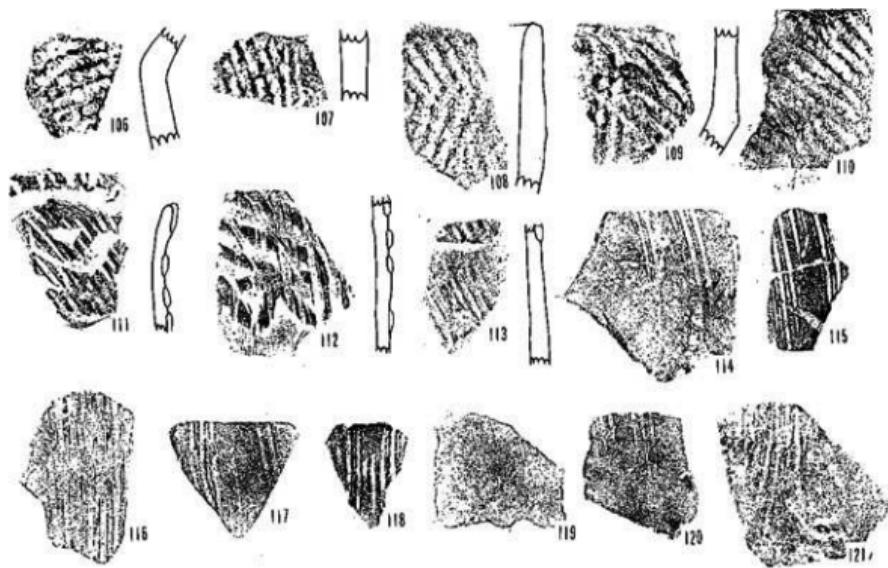


図61 縄文式土器拓影（第7号住居址出土－3）

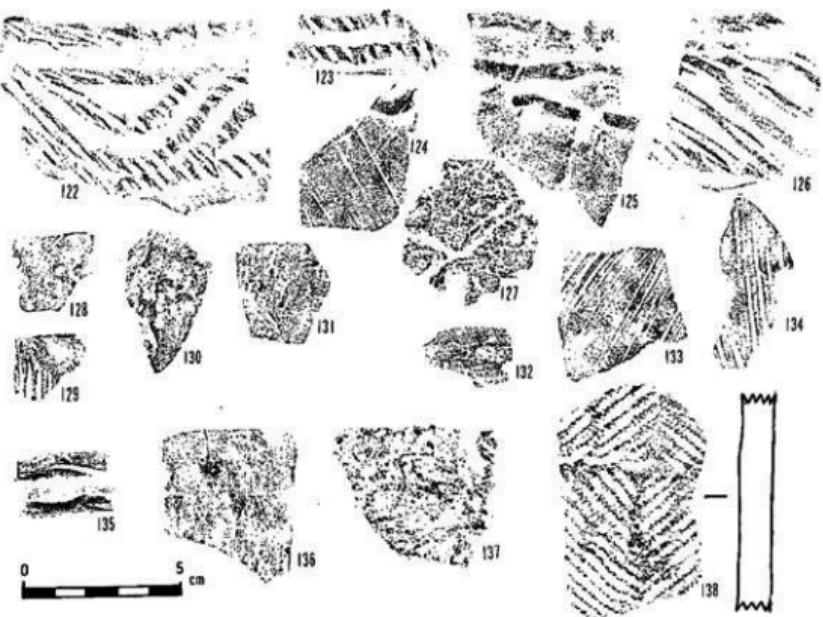


図62 縄文式土器拓影（土塙群出土）

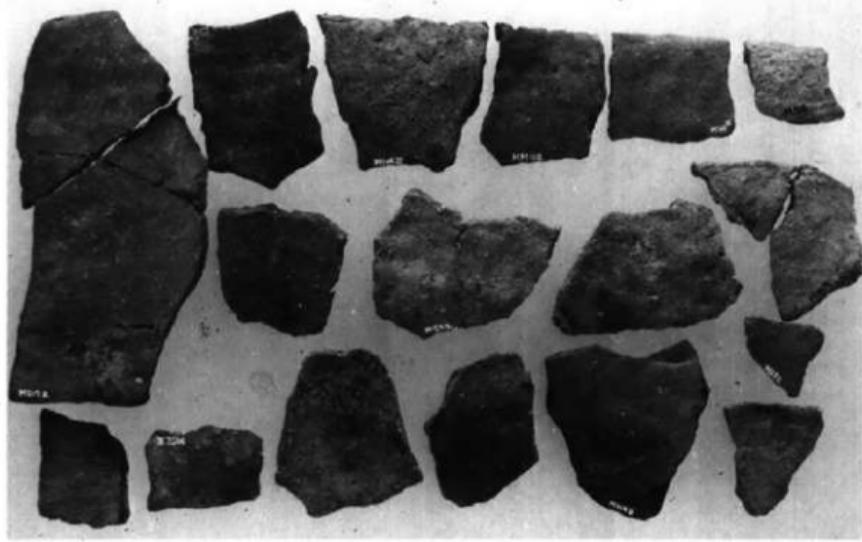
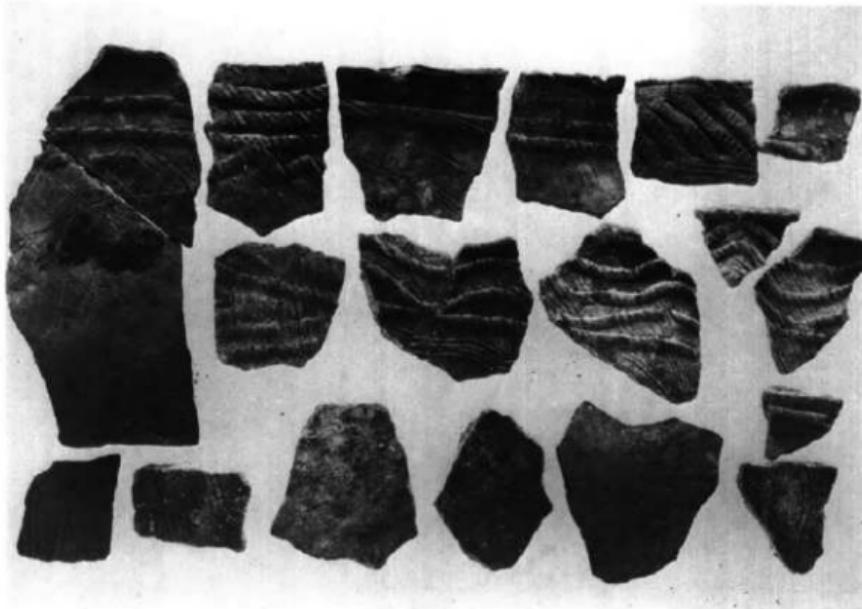


図63 出土縄文式土器第Ⅰ類（上：表面・下：裏面）

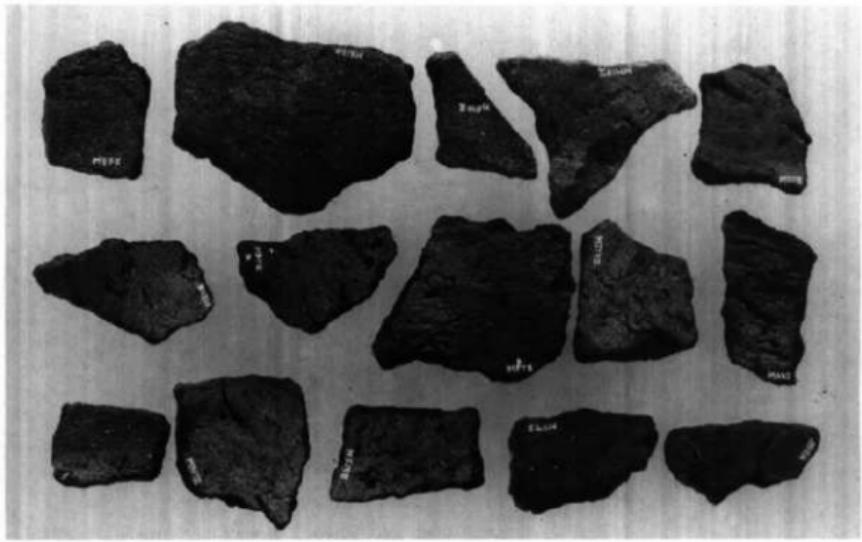
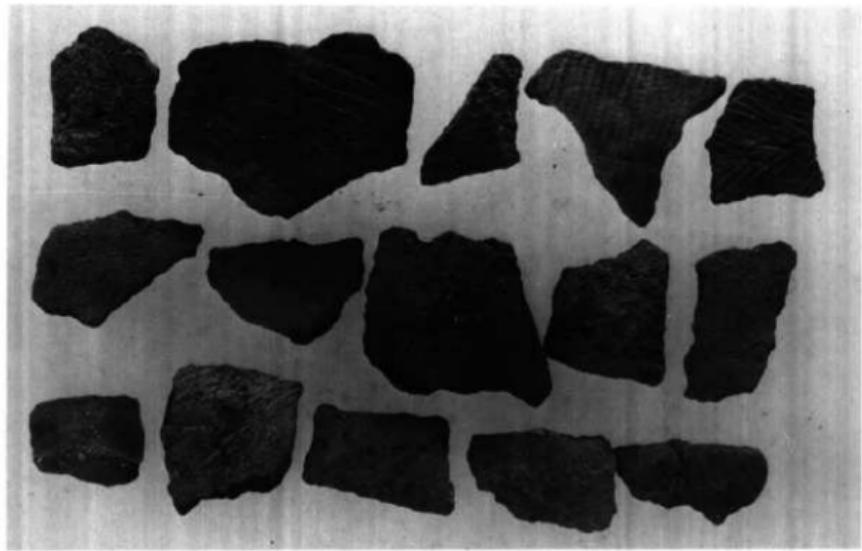


圖64 出土繩文式土器第II類（上：表面・下：裏面）

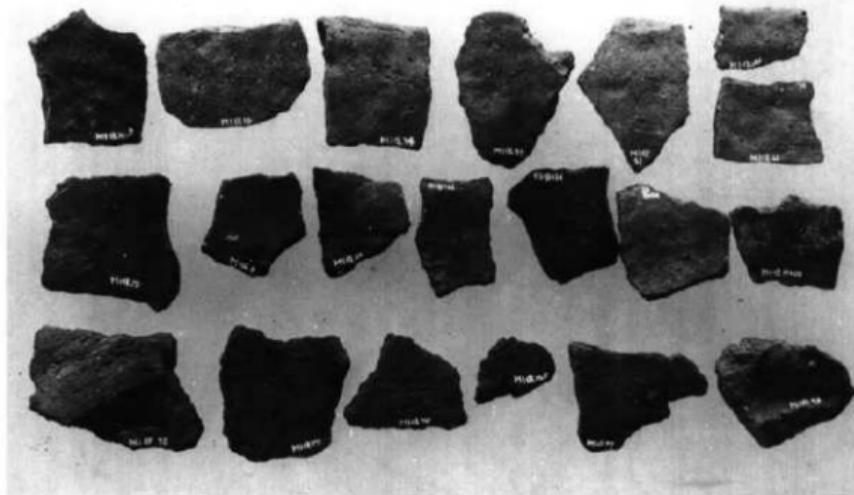
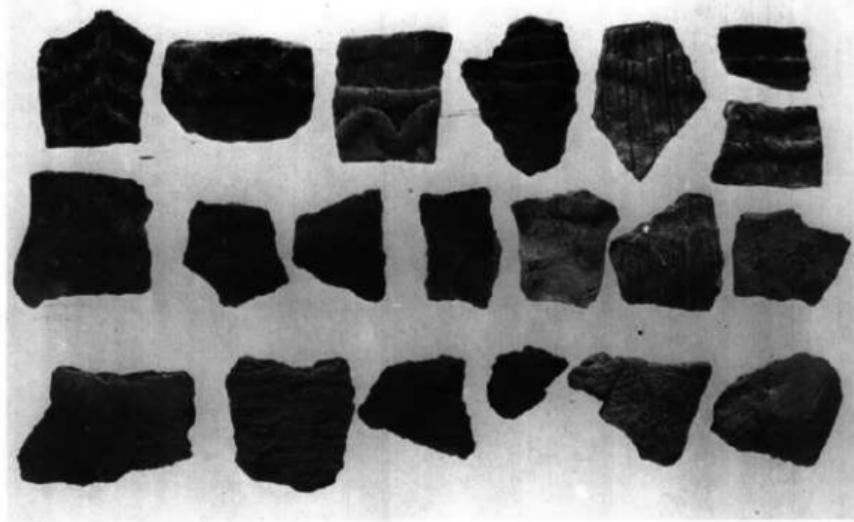


圖65 第1号住居址出土繩文土器（上：表面一下：裏面）

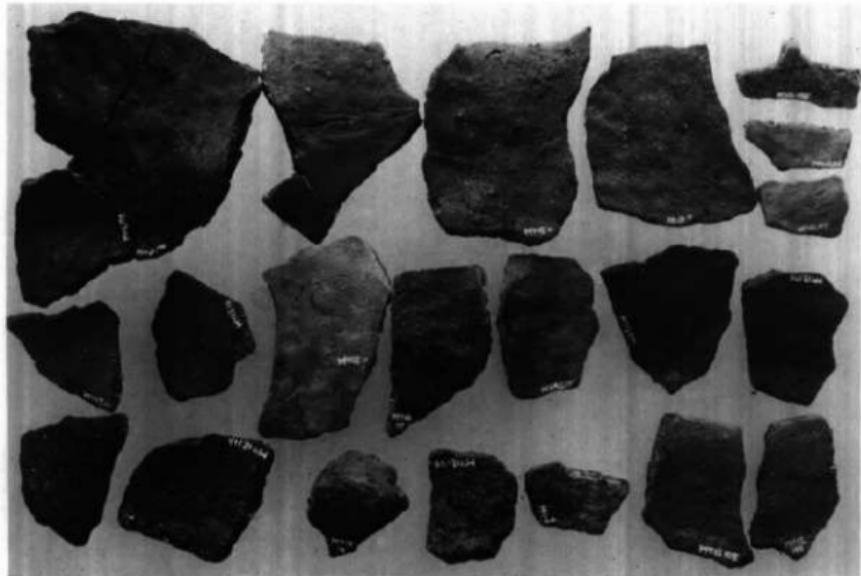
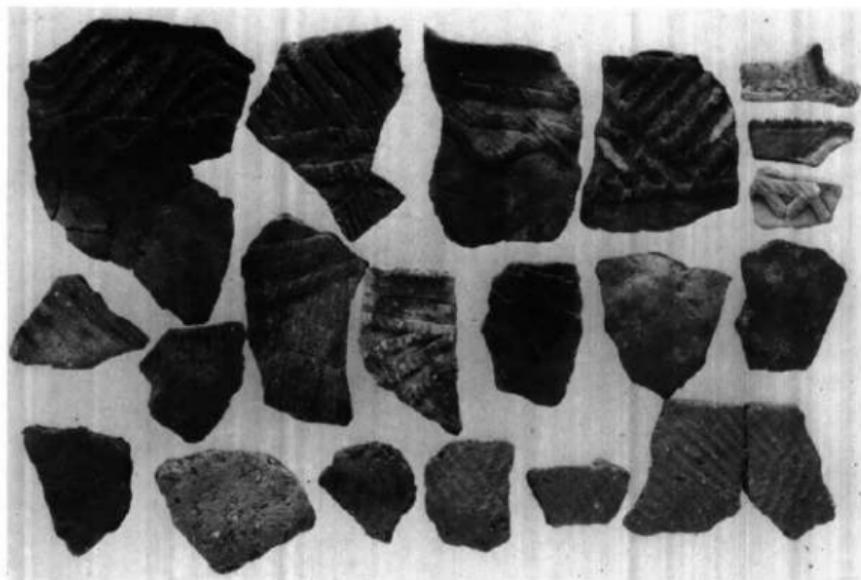


圖66 第7号住居址出土縹文式土器（上：表面・下：裏面）



圖67 各土塚群出土繩文式土器（上：表面・下：裏面）



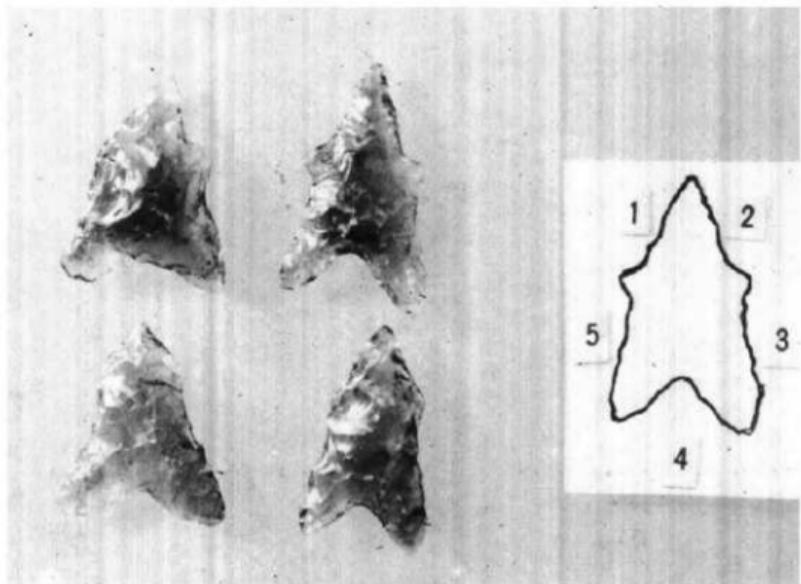
圖68 檻文式土器 1 類出土狀況



(付図) 発掘調査地の測図と写真撮り



(付図) 土器洗い作業



(付図) 宮の原遺跡に出土の多い  
特徴ある五角錐図 1.8/1



図73、図74 宮の原遺跡縄文早期オセンベ土器（西北部第1号住居址付近出土）



図75 宮の原遺跡オセンベ土器（西南部第7号住居址付近出土）



図76 左：等I類 オセンベ土器 右：第II類厚手織維土器（遺跡地中央～東方の出土）

この遺跡で石鎌の出土は39個で、そのうち35点までも、この画の五角鎌であった。このことは、この地が早期縄文期のうち、限られた短時期の単独遺跡で（薄手土器を主とした東海系の文化が進出した期）いわゆるオセンベ土器に伴う石鎌製作技術が優秀であったことが判る。考古学上当遺跡発掘調査の最大の収穫といえよう。



図77 宮の原遺跡石器（石鎌）  
（縄文早期末に伴う五角石鎌）



図78 宮の原遺跡の石器（石斧）

## (2)石器 (図77~図80-7)

宮の原遺跡の発掘調査による石器の報告は、縄文早期末の石器に限定されたかたちとなった。発掘まえに想定されていた縄文後期頃の遺物は殆んど皆無であって、また、縄文中期の出土遺物も殆んどみられなかった。従って宮の原遺跡の石器文化については、縄文早期末の一時期に使用された石器遺物として取扱うことに意見が一致している。

そのうち、宮の原遺跡を代表する特徴ある石器群として、砂岩系の原材に成る中型の半月形側刃削器（石器図2～6）と黒曜石原石による五角錐（石器図23～34）とが確認された。



図79 宮の原遺跡石器（磨製石斧と側刃搔器）



図79' 宮の原遺跡石器（磨石と石鉋）

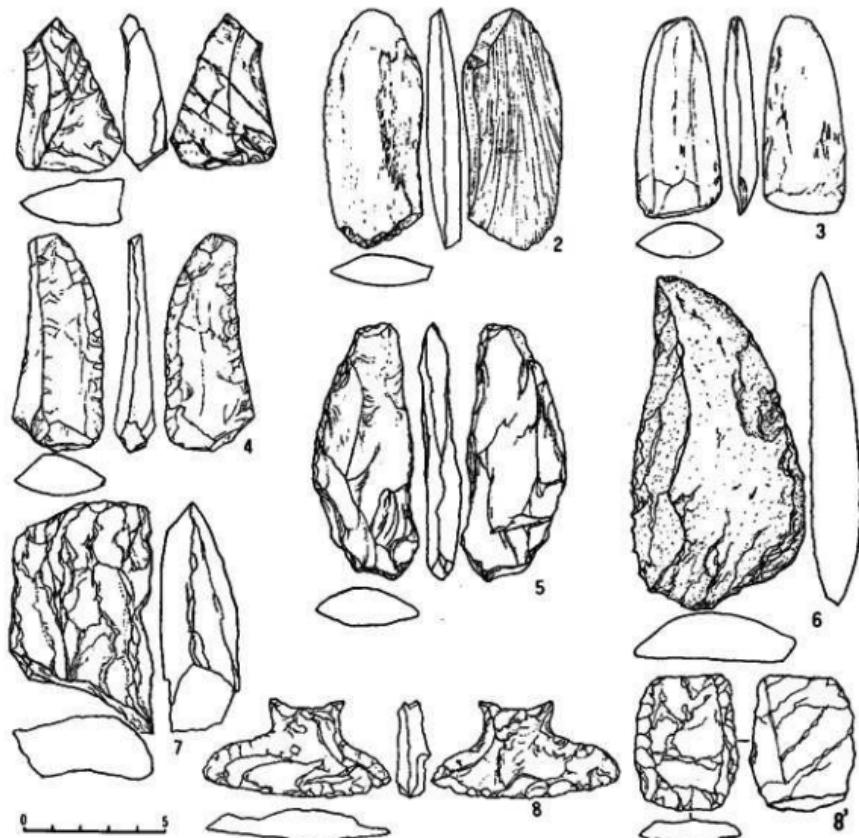


図80-1 宮の原遺跡石器 その(一)

削器・石斧・石匙

イ 中型石器 (削器・石斧・石匙) (図80-1, 図79・79')

石器図の1は削器で、片方の縁辺に側刃加工あり、他面は手かけに好都合の形にできている。尖頭器型。原石材は硅岩。

2は片面がよく研磨され、裏面は剥離のままで残されている。半月形。灰青色の片刃石斧または削器として使用痕がある。緑泥片岩製。

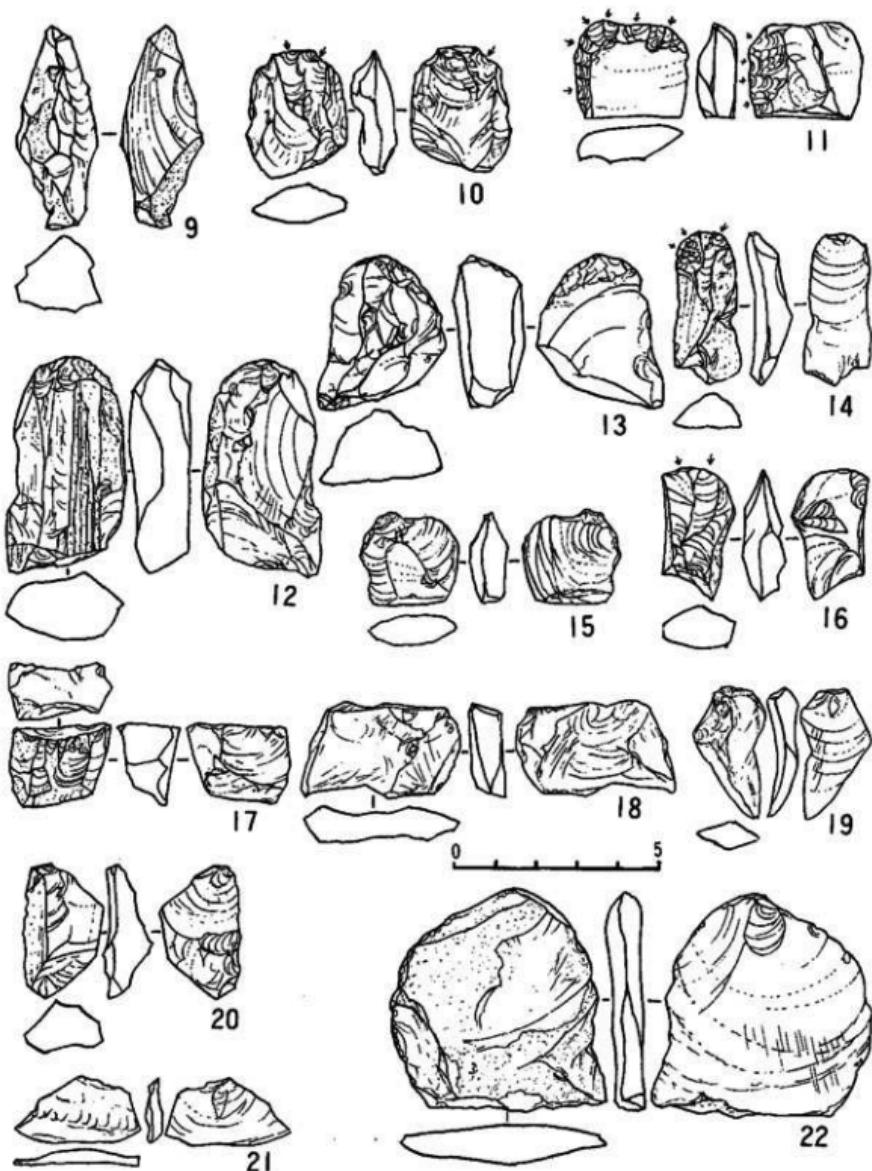
3は整った形態の善き磨製の石斧で、先端切先が鑿刃型に仕上げられている。表面が焼けたためであろうか赤色化されているが、原石は黒灰色の粘板岩製。

4・5は共に、やはり、半月形にできていて握りやすく、この側刃形削器が宮の原遺跡石器の特徴とみえる。4は灰白色のチャート原石による磨製。5は緑泥片岩の打製。6はやや大型で片面加工。他面に自然磨が残っている。原石は硬砂岩でできているので荒い。7は緑泥岩より作られた石斧の先端部方の半欠で、切先が鑿刃形。8は完形の石匙。淡青色の善きチャート製である。

第3表 石器集成表

石器名	形態	石器番号	材質	長径	短径	出土地点	備考
小 型 石 器	彎形器	10	黒曜石	3.0	2.5	7住II	母指形
	先端円形	14	々	3.6	1.5	—	
	先端円形	15	々	2.5	2.6	7住II	
	先端円形	16	々	3.1	1.8	—	
	削器	22	々	5.5	5.2	B11II	中形石器
	円形石器	11	々	2.4	2.4	2住II	
	残核削器	20	々	3.4	2.0	7住	
	残剝片	18	々	4.0	2.3	1住	
	三角形	21	々	3.0	1.8	7住	準石器
	劍形	9	々	3.4	1.8	1住	準石器
	残核	17	々	2.7	1.8	I17II	準石器
	椭円形	13	々	4.0	3.0	7住	
石 鐵	劍形	9	々	4.9	2.1	7住周辺	
	長形	12	々	5.0	2.7	—	先端加工痕
	五角鐵	完	黒曜石	1.9	1.5	1住	
	々	24	々	2.1	1.0	1住	
	々	25	々	1.7	1.2	7住	
	々	26	々	2.3	1.9	1住	
	々	27	々	2.0	1.5	G5III	
	々	鐵型変形	28	々	1.9	1.7	—
	々	—	々	1.3	1.4	1住	先端欠
	々	粗形	31	々	1.5	1.2	G4II
	々	—	々	1.5	1.5	7住	片脚欠
	々	削片鐵	32	々	1.8	1.4	7住
小 形 石 器	粗形	33	々	2.3	1.6	7住	
	々	—	々	2.5	1.9	B12II	
	三角鐵	完	々	1.9	1.6	7住	
	短脚鐵	粗形	36	々	1.5	1.2	L3II
	々	—	々	1.5	1.3	F10II	片脚欠
	三角鐵	削片鐵	37	々	1.9	1.8	1住
	石錐	完	黒曜石	2.2	1.0	7住	
	々	—	々	2.9	0.8	I5II	
	爪型	片面加工	41	々	2.0	1.1	P12II
	々	完	々	2.6	1.2	A13II	
	削器	片面加工	43	々	3.0	2.8	2住II
	残核	角形	44	々	1.6	1.5	1住II
削 器	削器	尖頭形	45	々	2.9	2.0	2住II
	磨製	両面研磨ノミ型	3	粘板岩	6.9	2.9	E18II
	々	片面研磨半月形	2	綠泥片岩	8.2	3.4	1住II
	打製	尖頭形	1	チャート	5.3	3.7	—
	磨製押圧剝	切羽型	4	々	7.5	3.2	7住
	打製	半月形	5	綠泥片岩	9.0	3.6	—
	片刃	半月形嘴形	6	砂岩	11.6	6.1	6住周辺

石器名	形態	石器番号	材質	長径	短径	出土地点	備考
石斧	先端ノミ形	—	7 粘板岩	8.5	5.0	—	半欠
	打製 短削型	51 硬砂岩	10.0	5.1	K 5 II		
	＊ ばら型	52 ＊	13.8	7.0	F 12 II		
	＊ 長楕円片片面加工	53 ＊	13.1	6.8	1住 II		
	＊ 長楕円形	54 綠泥片岩	14.0	6.3	I 4 II		
	＊ ＊	46 ＊	14.2	5.0	K 11 II		
	＊ ＊	47 硬砂岩	14.4	5.4	D 10 II		
	＊ ＊	48 ＊	14.8	5.0	1住 II		
	＊ ＊	49 ＊	12.0	5.1	J 9 II		
石匙	＊ ＊	50 ＊	10.7	6.0	7住 II	半欠	
	横型 究	8 チャート	6.6	3.3	1住 II		
磨石	楕形	57 硬砂岩	9.1	6.0	—		
	＊	58 石英安山岩	9.2	6.7	—		
	角板形	56 ＊	7.5	5.3	—	欠あり	
	こばん形	55 ＊	10.0	6.2	—	欠あり	
	断面三角	64 砂岩	5.5	4.8	F 6 II	半欠	
	こばん形	61 ＊	6.5	7.0	F 14 II	半欠	
	角形	62 硬砂岩	5.0	5.3	28マウンド	半欠	
	こばん形	59 砂岩	8.0	5.6	K 4 II		
	＊	60 硬砂岩	7.7	4.1	—	半欠	
石器	長楕円形	63 砂岩	11.0	4.0	7住周辺	欠あり	
	円形	69 硬砂岩	10.0	8.7	—		
	長楕円形	70 輝緑岩	12.0	6.3	—		
	磨石 半円形	65 蛇紋岩	11.3	10.5	—		
礫器	＊ 丸形	66 輝緑岩	12.0	10.0	—		
	＊ 扁平	67 輝石安山岩	13.0	13.0	F 6 II		
	＊ 奇形	68 硬砂岩	13.1	14.0	F 12 II	欠あり	
	磨石 檻円形	71 硬砂岩	7.3	7.0	J 5 II	半欠	
回石	＊	72 ＊	10.3	7.2	B 5 II		
	＊ 長円形	73 輝緑岩	8.5	5.0	7住	半欠	
	＊ 檻円形	74 硬砂岩	10.0	6.2	F 16 II		
	— 細長	75 輝緑岩	13.0	5.0	I 4 II		
	— 長楕円形	76 ＊	11.5	6.2	B 13 II		
	— 短楕円形	77 ＊	11.0	5.8	C 6 II		
	磨石 檻円形	78 硬破岩	10.8	6.0	J 14 II		
	＊ 長楕円形	79 輝緑岩	12.0	6.7	B 16 II		
	磨石 丸形	80 硬砂岩	7.7	5.0	E 4 II	半欠	
磨石	磨石 檻円形	81 輝緑岩	11.6	8.0	A 16 II		
	磨石 丸形	82 硬砂岩	10.8	8.8	C 6 II		



(図80-2) 宮の原遺跡石器 その(二)

黒曜石々器集1 (小型石器)

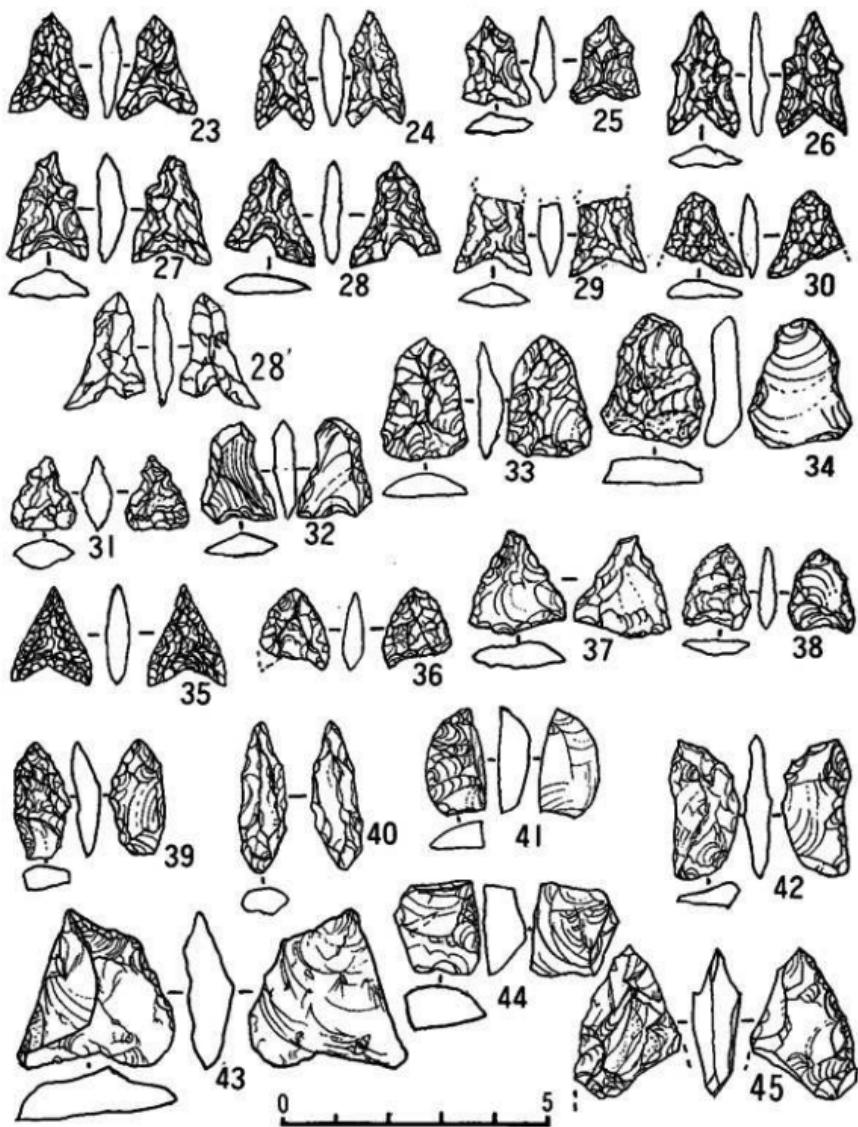


図80-3 宮の原遺跡石器 その(三)

黒曜石々器集2 (石鎌)

#### □ 黒曜石石器集1（小型石器）図80-2

図80-2の黒曜石石器10・11・13・14・16は母指型の石器で、先刃搔器として、また、削器としても使用しているもの。他の小型石器は小型の多目的石器といえよう。そのうち22は透明黒曜石扁平の円形剥片を用いて削器としての使用痕、及び表面の擦過痕が顕著である。9・12・17は残核。

#### 八 黒曜石石器集2（石鎌）（図80-3、図77）

図80-3の23～34は、宮の原遺跡縄文早期末の石鎌の特徴石鎌の一群である。先学により五角鎌の名称で呼ばれている。一般には、出土の例が少ない石鎌である。形がやや長形で、腹部の幅が中だるみになっていて、肩部の両側縁に張り出しが現われる。脚部には、特に形態的特徴がみえないものであるが、ここで28には脚部鉤型鎌の古い型の上に、この五角鎌の形態が受け継がれている。31～34は、五角鎌の粗形石鎌である。やはりその特有の形の傾向が表現されている。或は五角鎌の半製品であろうか。35～37は三角鎌。39・40はドリル。41・42は半円爪型の小石器で皆々善きできばえの黒曜石石器である。43・45は小形の削器か、または石鎌加工の過程のものか。44は加工痕ある残石核。

#### 二 石斧・磨石1（図80-4、図78・79）

図80-4の石斧類の石器原材料は当地に近接の三峯川系の渓谷より運ばれ、硬砂岩が主体となっている(47～53)。緑泥岩もある(46・54)。すべて打剥離加工によるもので、磨製石斧は、前述の小形石器以外には殆んど無いと云ってもよいだろう。形態は、各々が良く整っている。特に53・54はこばん型、51・52は短骨型、撫型として完成している。

55～58は磨石または摺石として挙げた。これらは全体面に磨痕がよくついている。焼けたため赤色化しているものもある(55・56)。何れも、自然面のついている川原石で、55～57は硬砂岩。58は安山岩を使用している。磨石としては、形が角張っていて、作業には掌に持ちよい形となっている。

（中村龍雄）

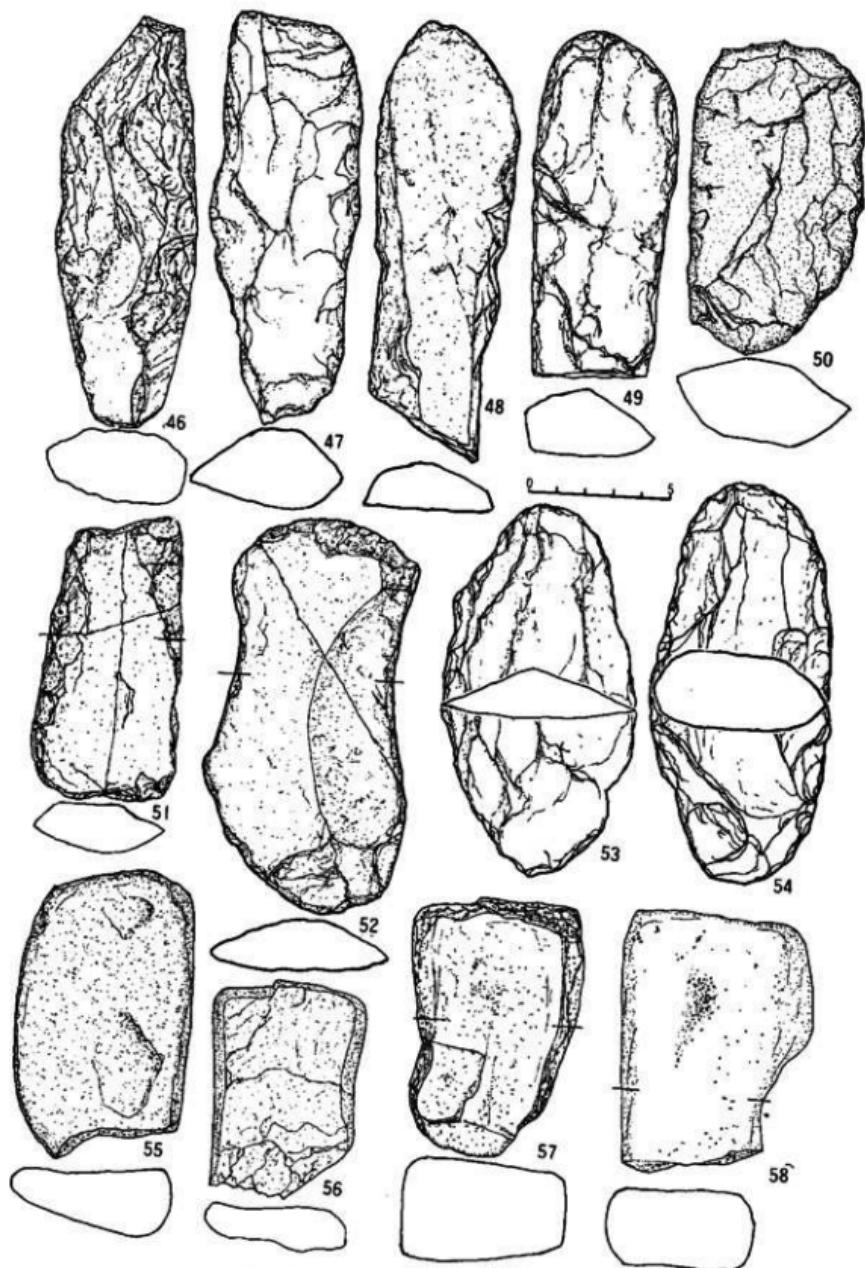


図80-4 宮の原遺跡石器 その(四)

石斧・磨石 1

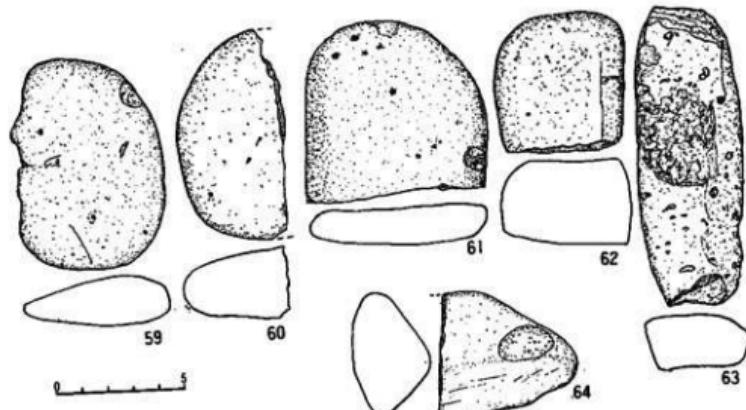


図80-5 宮の原遺跡石器 その(五)  
石斧・磨石2

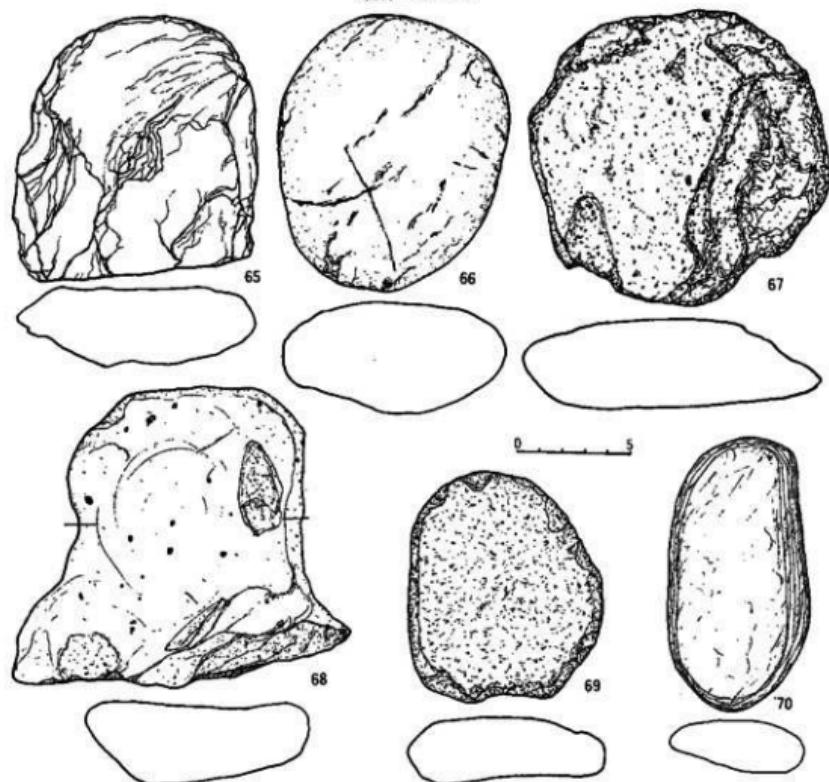


図80-6 宮の原遺跡石器 その(六)  
砾 器

### ホ 石斧・磨石2 (図80-5)

磨石類については、どこの縄文期遺跡地にも多くの出土がみられるのである。縄文期以降の遺跡地にさえも、しばしばみられている。これが伝承的の存在であるのか、その当期に使用されていたのか判断に苦しむ場合も多い。その意味に於て、宮の原遺跡は平安期と複合しているため、一応、そのこともあたまに置く必要もあった。

さて、石器図の磨石59~62は良く磨滅痕について丸味をもった形態を集録した。これらは半欠のものがあるが、研磨作業には、かえって、持ちよい形態という解釈もある。石質は三峯川系の砂岩が多い。

この図の他に、その下図の凹石の内にも磨石を兼ねている石器が存在することは云うまでもない。62~64は断面三角、または、四角の棒状川原石を用い、磨石としての使用痕が極度についている。62~64は、必要上折りとったのか、切損したものか不詳といえる。石質は緻密な砂岩。

### ヘ 碓 器 (図80-6)

図80-6に碓器を揭示した。大形石器として65~68があり、石質は65が蛇紋岩。66は輝緑岩。67は輝石安山岩。68は緻密な硬砂岩。69は荒い砂岩。70は、輝緑岩の川原石による硬質の磨石で、周縁がよく磨滅している。原石は近接の藤沢川にある。



大形 碓器

### ト 四 石 (図80-7)

一般に凹石・石皿は、極く近接地の川原石を使用することが常となっている。ここでも藤沢川から採集されたもので、砂岩系が主体である。なかには、上流からの安山岩系の石質も見られる。輝緑岩のものは特に固く、凹石のくぼみも浅く作られているが、石膚の天然面と穿った凹みの部分との区別が判然と現われ、美しく輪どられた形となっている。

### チ 石 皿

宮の原遺跡では、整状の石皿が無かったが、これに替わる大石盤の平面石が出土した。その大きさは60cm×35cm 5個。45cm×40cm 2個などが見えている。  
(中村龍雄)

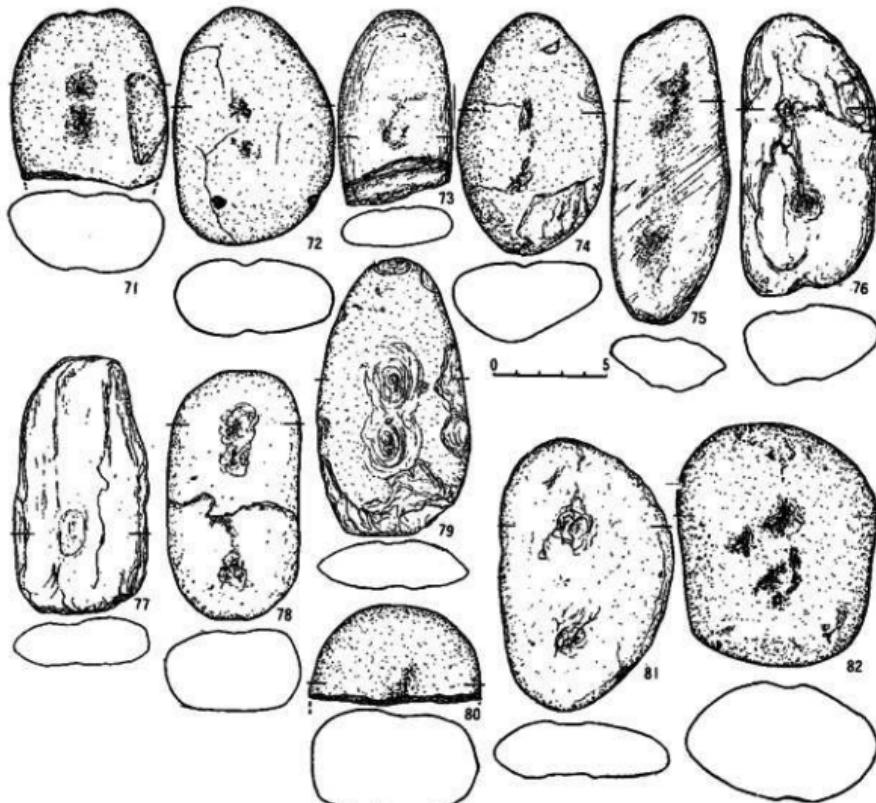


図80-7 宮の原遺跡石器 その(七)

### 凹 石

## 2. 歴史時代遺跡

### A 遺構

#### (1) 第2号住居址(図82)

調査区中央西寄りに発見された隅丸長方形の平面プランを呈する竪穴住居址である。規模は長軸4.10m×短軸3.84mを測り、主軸方向はN55°Wを示す。

東から西へ強く傾斜する地形であるために西側の半分ほどの壁は不明である。残存する壁はほぼ直立し、壁高は低い部分で14cm、高い部分で30cmを測る。床面は若干の凹凸も見られるが概ね平坦で固く良好なたたきの状態の床であり、北壁に近く一部分貼床されているところがある。

カマドは北壁中央部に位置していたと思われるが、完全にくずれており、わずかな焼土と、小さな石が残っていたにすぎないが、石芯粘土のカマドであろう。

ピットは東壁の南隅に58cm×52cmの外傾する壁で床面からの深さ36cmを測るもののが1ヶ検出されたのみであり主柱穴は不明である。

覆土中から木炭、焼土等が多量に検出され床面の直上からも検出されている。木炭はひのきかさわらと思われ、屋根に用いたカヤの炭化したものも検出されており火災にあった住居址と考えられる。

本址は集石土壙に切られ、2号ロームマウンドを切っている。(田畠辰雄)

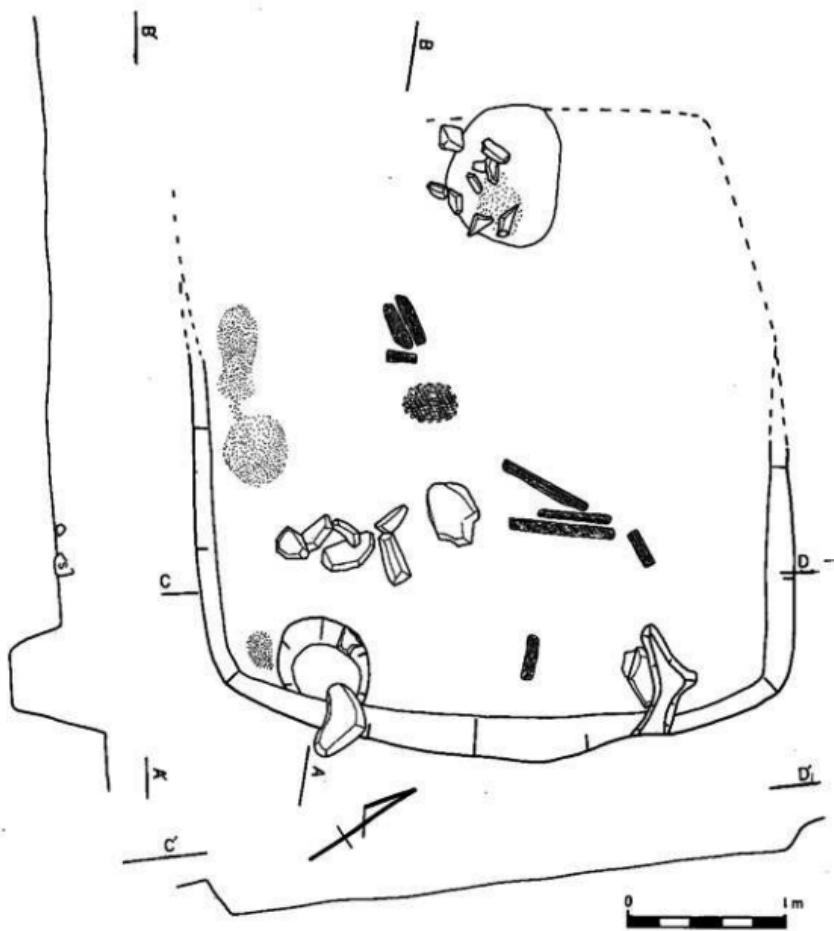


図81 第2号住居址 実測図



図82 第1・2・7号住居址の位置



図83

第2号住居址 杯形土器出土状況



(2) 第3・6号住居址 (図84、図85)

①第3号住居址

本址は第6号住居址とともに、はじめに予定された調査区外の畑より発見された。

第6号住居址上に貼床してあり、隅丸方形の平面プランを呈すものと考えられる竪穴住居址である。残存する部分の規模は南北軸5.58cmを測る。畑の耕作面の傾斜が東西に急であり、耕作面よりわずか5cm前後の深さから落込みが確認された。耕作時による破壊がいちじるしく、貼床部分はほんの一部分確認されたにとどまった。覆土は黒色土の落ち込みで、その上面に茶褐色上層(耕作土)がある。壁はやや外傾ぎみに立ち上り、壁高は低い部分で10cm高い部分は17cmを測

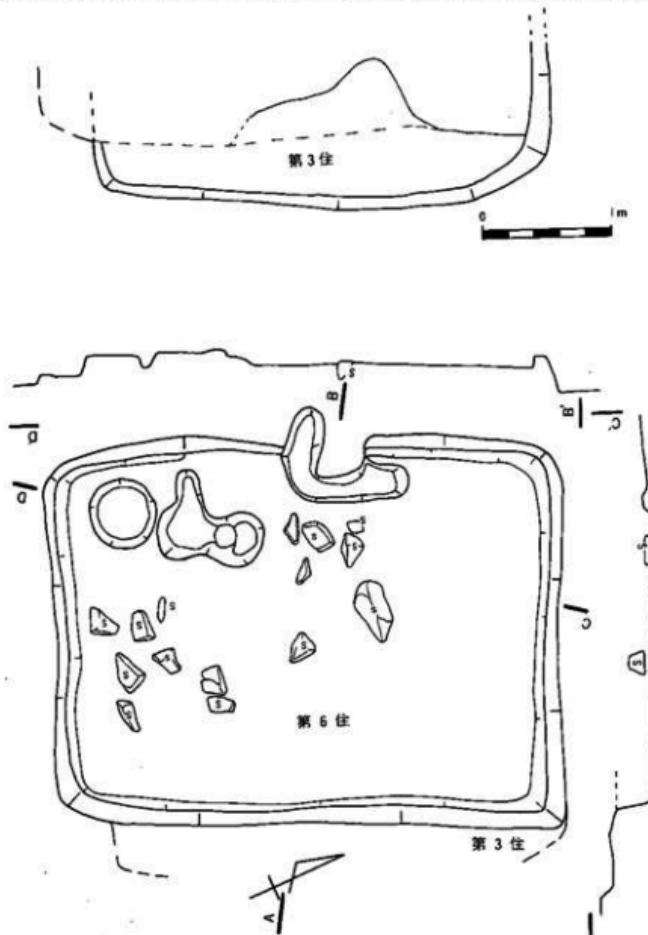


図84 第3・6号住居址 実測図

定できる。床面は若干の凹凸がみられ、軟弱であり、貼床部は、黒色土とロームの混入した床で、タタキの状態になっている。

カマド等の床面上の施設は残存しないし、柱穴なども不明である。

#### ②第6号住居址

第3号住居址の貼床下にあり、東壁の一部を3号住居址により破壊されている。隅丸長方形の平面プランを呈す竪穴住居址であり、その規模は長軸3.95m×短軸3.02mを測る。主軸方向はN 58°Eを示す。壁はほぼ直立するものであり壁高は低い部分で8cm、高い部分で20cmを測る。床面は平坦で固く、タタキの状態であり、周溝が全周している。

ピットは両壁南隅に円形の平面プランの浅いタライ状のピットと不整形なものとがあるが柱穴となるピットの確認はできなかった。

カマドは西壁中央部に位置していたと思われるが、焼土や石等も残っておらず、耕作時に破壊されてしまつており、全容は不明であった。（田畠辰雄）



図85 第3・6号住居址発掘状況

(3) 第4・5号住居址 (図86～図88)

第4号住居址は、5号住居址に貼床を施したものである。床面が堅微でないため、試掘の際5号住居址床面まで掘り下げてしまった。5号住居址床面より15～20cm上面に、部分的ながらも北東部と、南西部に叩き状態が認められる点、またこの面より、土師・須恵器破片が出土していることにより、4号住居址とした。満足な調査はなされなかつたが、拡張工事などは行なわず、5号住居址床面から15～20cm貼床しただけのものと思われる。出土遺物としては、刀子・須恵器蓋破片などがある。

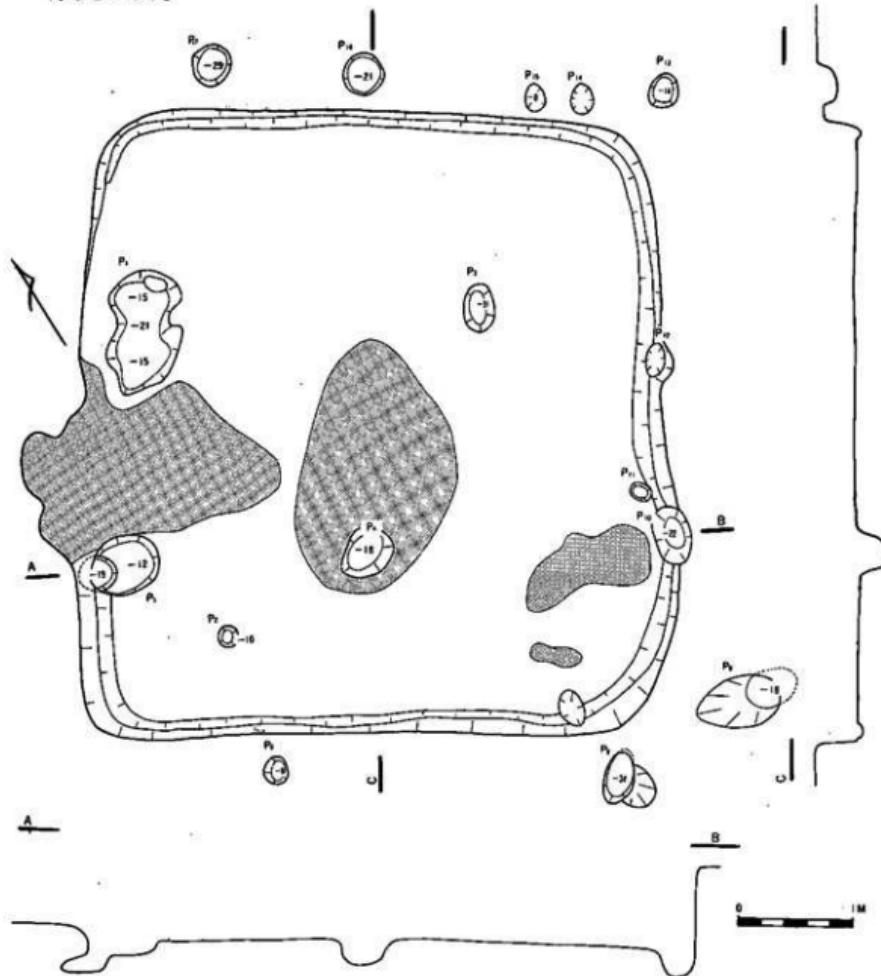


図86 第4・5号住居址 実測図

第5号住居址はG-I・16-18グリッドに位置し、ローム層上面において確認された。東西5.8m南北5.4mの方形を呈している。西傾斜という立地状況から、本址の西側部分の残存状態は良好でない。黄色砂質ローム層を基盤としており、堅く踏み締められている。壁高は東壁80cm、西壁24cm、北壁・南壁30cmを測る。壁高の浅深は、崩壊などもあるうが、東高西低の地形の為、構築地からこのような差違があったのではなかろうか。壁はしっかりしたもので、立ち上がりは直壁に近い。壁下には幅8~16cm、深さ5~7cmの断面U字状の溝が全周している。本址内からはピットが9個検出された。 $P_1$ はカマドに北接する南北1.1m東西70cmの不整形プランを呈する。 $P_2$ はカマドに南接し、東西60cm、南北50cmの楕円形プランであり、底部は段状をなし、西壁に袋状に掘り込まれている。 $P_3$ は径18cm、深さ10cmの円形プラン、 $P_4$ は南北30cm、東西26cmの楕円形プランを呈している。本址中央部地床炉中に50cm×38cm深さ18cmの不整円形プラン $P_5$ がある。そのほか、本址の壁外柱穴であろうか、ピットが8個検出された。カマドは西壁のほぼ中央部に位置している。

西壁部分が軟弱の割には、煙道部、火床部、袖部があまり崩壊せずに検出された。粘土を主体として、石を芯にして構築されたと思わ

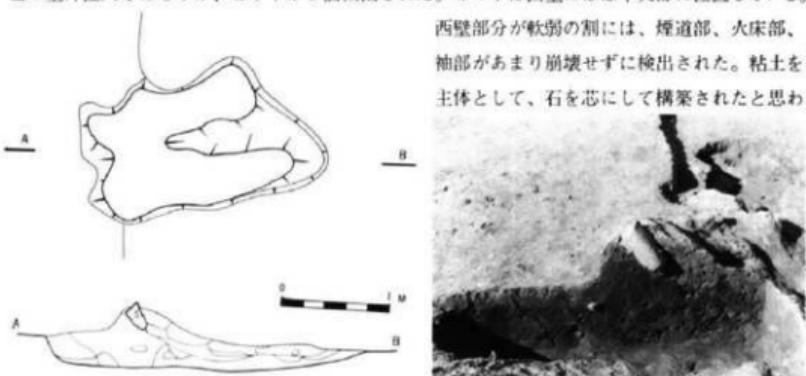


図87 第5住居址カマド実測図と断面写真（煙道につめられダンバーとした石がみえている）

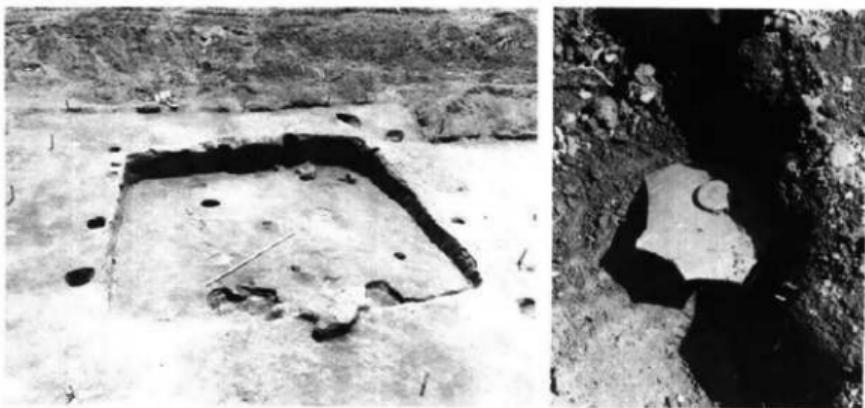


図88 第4・5号住居址発掘状況と須恵器蓋出土状況

れるが、使用されたと思われる石は煙道部に1個検出されただけである。カマドから中央部へと焼土が出土し特に中央部南北2m東西1.4mは地床が存在していたらしい。しかし、堆積焼土も厚くなく、その上が堅微になっていることから、構築初期に使用され、後床面となってしまったと思われる。また、南東部隅に粘土・焼土が検出された。カマドの痕跡かとも推測されるが、構築上などからも即断はできない。（丸山弥生）

#### (4) 柱列址(図89、図90)

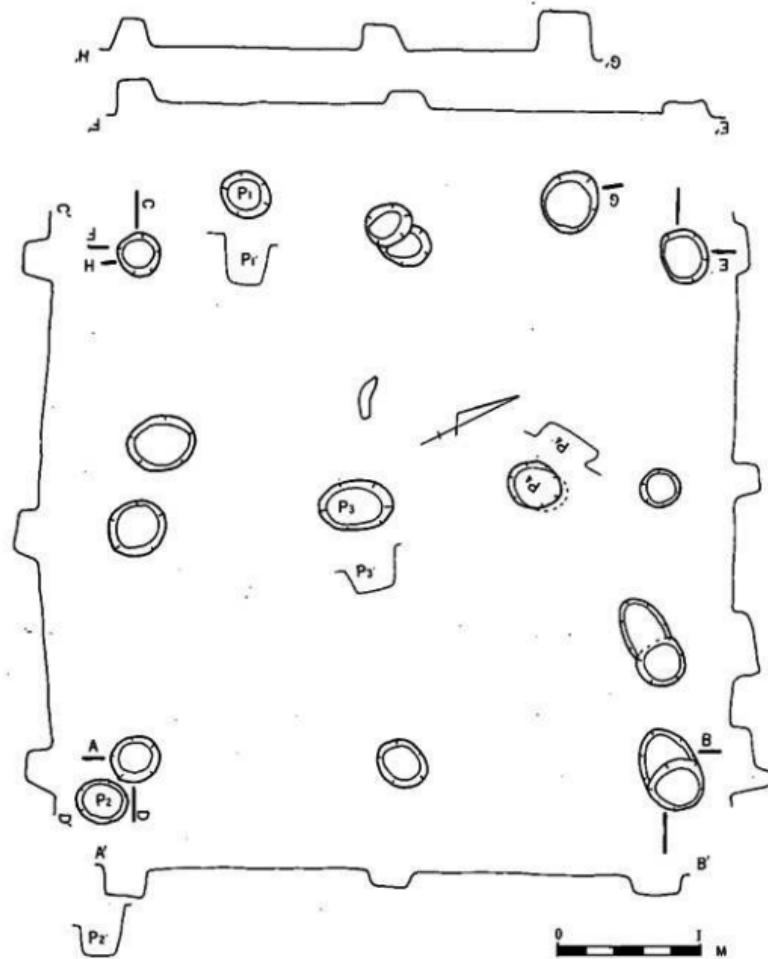


図89 第1号柱列址 実測図

今回の調査では2基の掘立建物址が確認された。その形態は2間×2間のものと、1間×1間のものとである。時期に関しては削土によって既に当時の生活面が失われていることが考えられ、柱穴からの遺物の出土も微量であり確証もないが、第2号住居址や第4・5号住居址とほぼ同じくらいの時期に共存したものと考えられる。

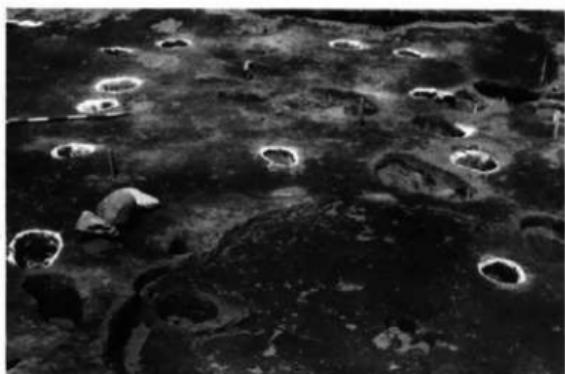


図90 柱列址発掘状況

#### (5) 集石土塀 (図91)

第2号住居址の床面を切って構築されており、長方形の平面プランを呈し、その長軸方向はN 34°Eを示している。壁は外傾して立ちあがり、深さは39cm、規模は1.70m×56cmを測定できる。東側の壁面に寄せかけるように石があり、小さなもので12cm×5cm位のもの。そして40cm×28cm位の大きさで割合ととのった石が合計19個入りこんでいる。覆土は真黒色土であり、上層と、床面に焼土が検出された。

土壤内より土師器の内面黒色の杯形土器が出土している。(田畠辰雄)

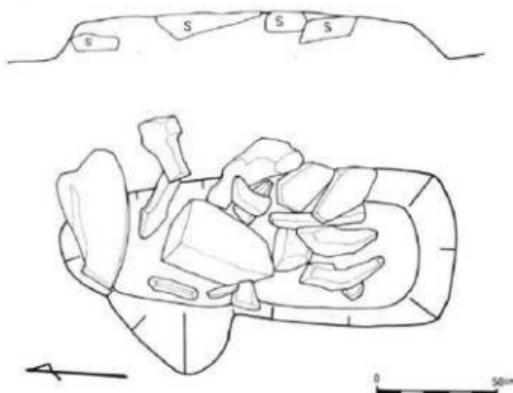


図91 集石土塀 実測図

## Ⅳ 遺 物

### (1) 第2号住居址出土の土器 (図92)

本住居址からは土師器の壺14点、同甕1点灰釉壺2点が出土した。

(1)は明灰白色の塊で底部を欠くが口径14.3cmを測り、胎土は白く器壁は薄く3mmを計る堅緻な焼成で、口唇や、膨み器面にシャープなロクロ痕が認められる。(2)も同様な色調整形痕をもつ灰釉壺であるが底部のみで、高台がついている。高台断面の器形は長方形に近く黒窯第90号期に比定し得る。

次は出土数の多い土師器であるが壺(3~16)は茶褐色を呈し焼成中位で法量に若干の差位がある。

(3)は口径11.5cm高さ3.5cmを測り、内面黒色で糸切底左回転ロクロを示している。(4)はや・大きく口径12.5cm、高さ4.4cmで内面黒色の上にあらい放射状の竈みがき痕が認められ、左回転ロクロによる糸切底である。(5)は口縁部や、立ちあがりの強い杯で口縁下部のロクロ痕がシャープな内黒土器で底は糸切左回転である。

(6)は口径11cmで高さ4cmを測り(5)と同じ状態である。(7)は口径12cm、高さ4.5cmのやや大きな壺で内面の黒色は外側まで1部及び、竈みがきの痕が認められる。(8)(9)ともに底部を欠くが(8)は内面は茶褐色に対し(9)は黒色である。

(10) (11) (12)ともに内面黒色を呈する。(13) (14)は底部の残欠であるか底径4.5cm内外で、左回転ロクロの糸切底である。(15)は口径15cmの大形壺で内面黒色で(16)は内面黒色の上に竈みがき痕がある。底部は極めてシャープな糸切痕が認められる。

(17)は斐形土器で、烏帽子形を呈し口縁がいちじるしく外曲する。口縁下部の内面外面ともに竈削り痕が認められ、口径部は横ナデ痕がいちじるしい。器厚17mmを測る。

以上、土師器と灰釉陶器の組成から成り、須恵器は全く無く、この点からも11世紀前半期の可能性が強い。

### (2) 第3号住居址出土の土器 (図93)

本址からは、土師器の杯3点、同甕1点が出土した。

(1)は、大形の杯であるが底部を欠く。外面茶褐色を呈し焼成は中位である。口径17cmを測り高さは5cm内外である。内面黒色で竈みがき痕がまばらに認められる。(2)は小形の土師器杯で口径10cm、内面に水引痕があり内面黒色である。(3)は中形の土師器杯で口縁部のみの残欠品、内外とも素焼のまゝである。(4)は土師質の小形甕で胴部以下を欠く。口径14.5cmを測り、口縁下部がやすぼまり、ゆるやかに口縁が開き口唇に至る形態をもち、本遺跡出土の甕ではや・古い時期の所産と思われる。

### (3) 第6号住居址出土の土器 (図93)

本住居址からは土師器、須恵器、灰釉陶器各1点が出土した。

(5)は須恵質の高台付杯で暗灰色を呈した底部のみの断欠品である。高台の断面は、台形を呈している。(6)は灰釉陶の杯であるが恐らく高台付と思われる。外面にシャープなロクロ痕をもった

白色に近い緻密な胎土で東濃系の灰釉陶と思われる。器形は皿形に近い。(7)は土師器窯の底部残欠品で底径 7 cm を測る茶褐色の焼成中位の要である。底部はややあげ底を示す。（林 茂樹）

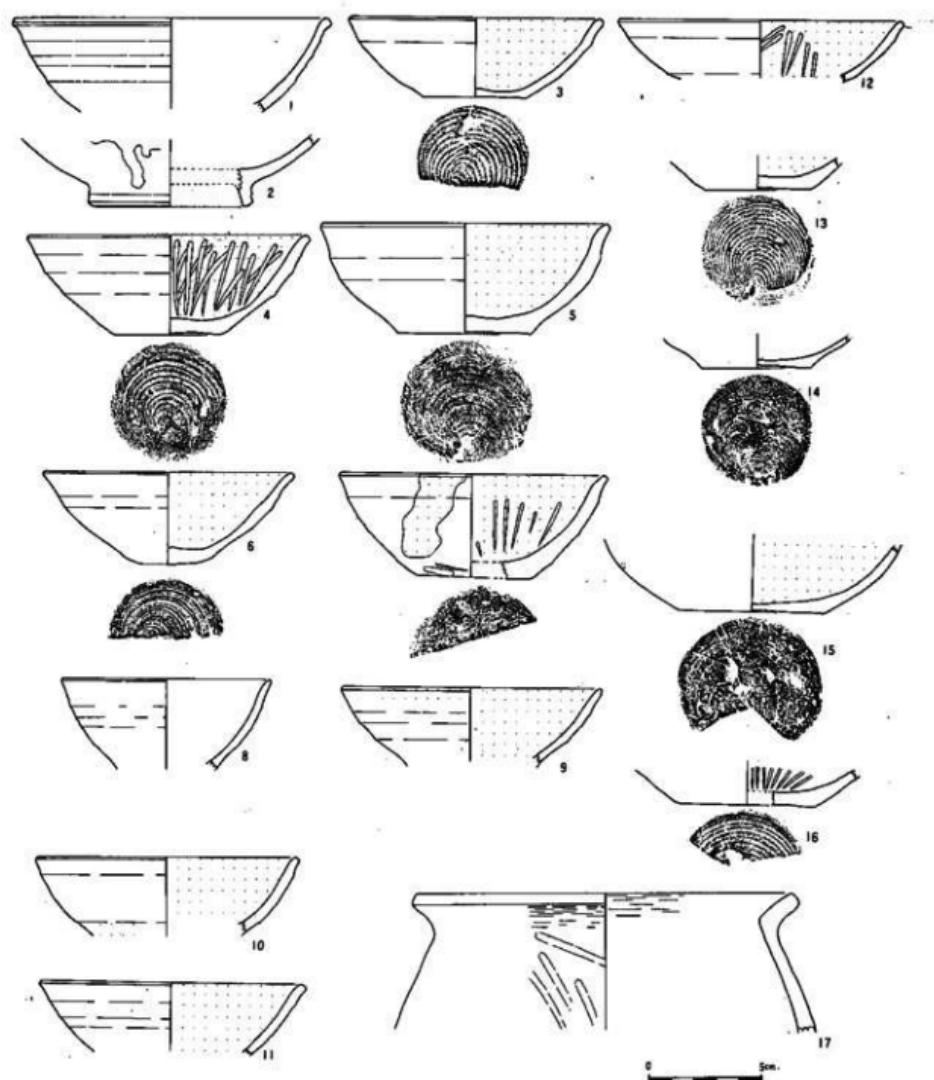


図92 第2号住居址出土遺物 実測図

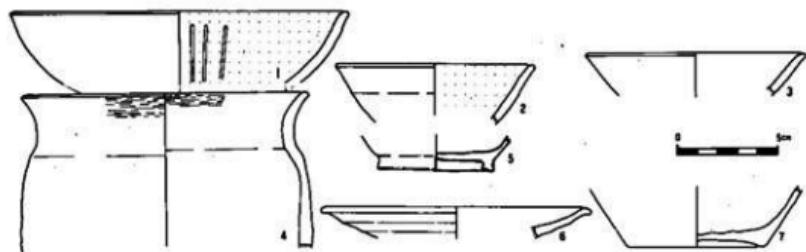


図93 第3・6号住居址出土遺物 実測図

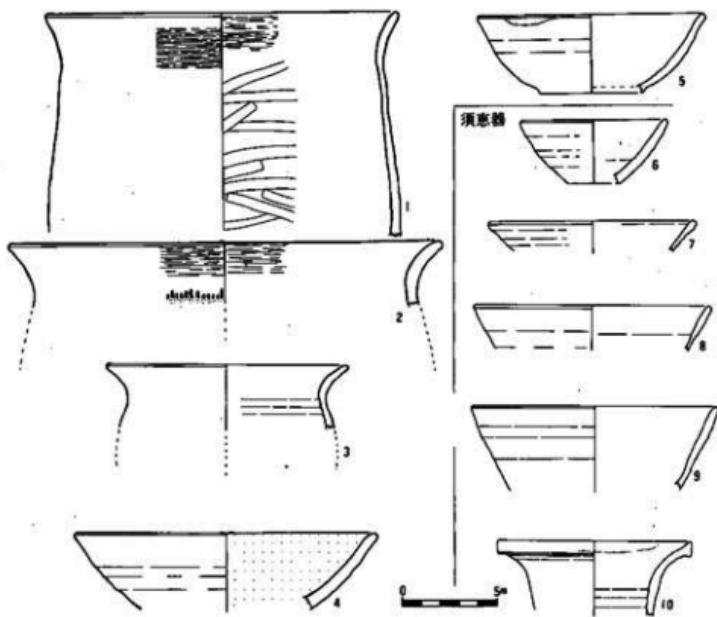


図94 第4・5号住居址出土土器 実測図

#### 第4・5号住居址出土遺物

##### 土 器 器 (図94)

1は菱形土器である。口縁部は僅か「く」の字形に外反し、胴部は最大径が口径と同じであり、ゆるやかなカーブを示す。口縁部下は、水平方向の平行細線が、胴部付近には、ヘラナデによる擦痕がみられる。胎土には砂粒が含まれ、焼成ともに良好とはいえない。外面は黒茶褐色で二次焼成痕があり、内面は赤褐色である。2も菱形土器で口縁部が「く」の字形に外反し、胴部に最大径を有する張りのある土器と思われる。口縁部には横ナデ痕、頭部にはクシ状工具による縦のカキ目痕が認められる。外面は白褐色、内面は灰赤褐色であり、焼成は良好である。胎土には雲母を含む。3は小形菱形土器で口縁部は、横ナデ整形痕がまた頭部は、ロクロによる水引整形痕が認められる。胎土には砂粒が含まれ、内外面ともに赤褐色をした焼成良好の土器である。4は底

部欠損の碗形土器で外面は黒茶褐色、内面は漆黒色、高台付であったかもしれない。砂粒を含み、胎土は粗い。5は碗形土器で内面は黒色である。

#### 須恵器

6は土師質須恵器環形土器である。灰茶褐色をなし、砂粒を含む、胎土、焼成ともに良好でない土器である。7は環形土器である。黒灰色を呈し、口縁部には自然釉がかかっている。胎土、焼成ともに良好。8は環形土器で灰白色を呈し、胎土密、焼成も良好である。9は環形土器で内外面ともに青灰色を成し、胎土には砂粒、雲母が含まれている。

#### 灰釉陶器

灰釉は、10の長頸壺の1点である。口径10.1cm、残存器高3.5cmを測る。



図95 出土土師器 写真（第2号址）

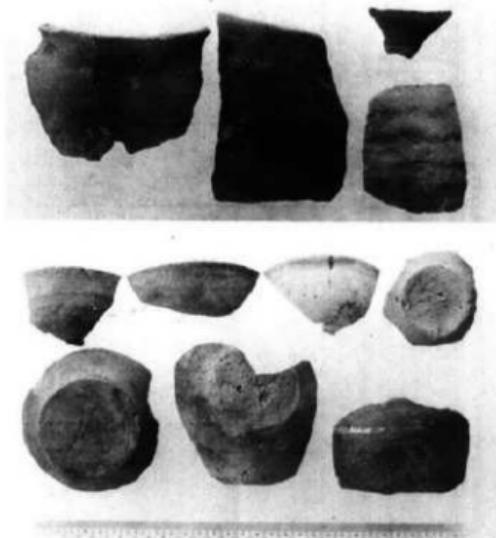


図96 出土土師器 写真（第4・5号址）

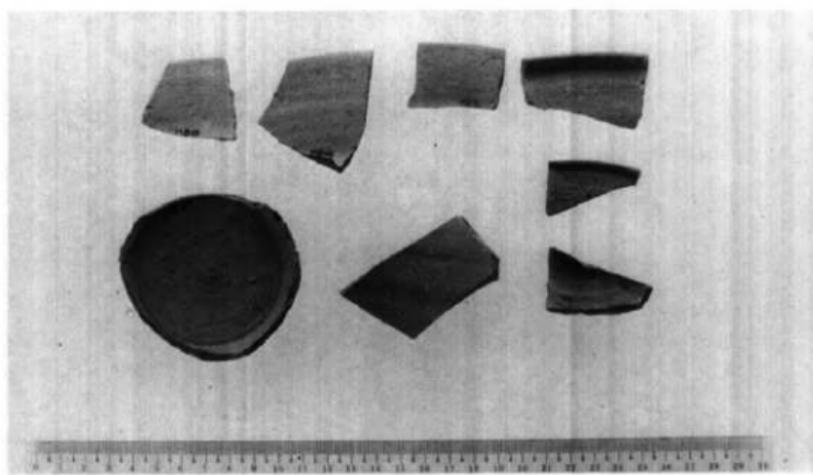
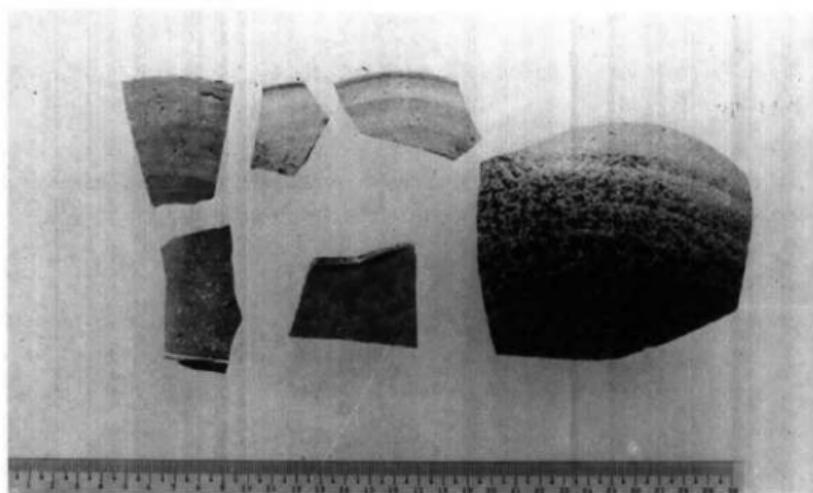


図97 出土須恵器・灰釉陶器（第5号址）



←第3号址出土の墨書き土器（土師質）

#### (5) 金属器と鉄滓 (図98-99)

鉄器のうち刀子とみられるものの鋳鉄片数本が出土している。図により観察すれば1は第4号住居址床面より出土で、何か利器の形となって断面は角形となっている。2, 3は腐蝕がひどく判定に苦しむが、刀子と思われる薄い鉄器である。出土は発掘地区の西部Ⅲ層中より、また、発掘地A-19・20の焼土灰中にて出土している。

鉄滓が4塊出土した。これらが一か所よりの出土でなく、各所に分散されたかたちに存在した。皆、ローム面に付着していたのはその重量感から当然であろう。1塊は第6号住居址床面より出土しているが鍛冶場跡ではない。

平安後期であるため既に相当の鉄器があつたろう。当時は鉄の原材の尊さから、斧が鎌になり、さらに釘になり種々の鍛冶作業が行なわれたであろう。鉄滓のかたちは4塊とも亀甲状の塊となつていて、明らかに鍛冶滓であると思われるが、発掘地には鍛冶場遺構がみられなかったのは何故だろうか。各々1個の重量は400gほどである。(中村龍雄)

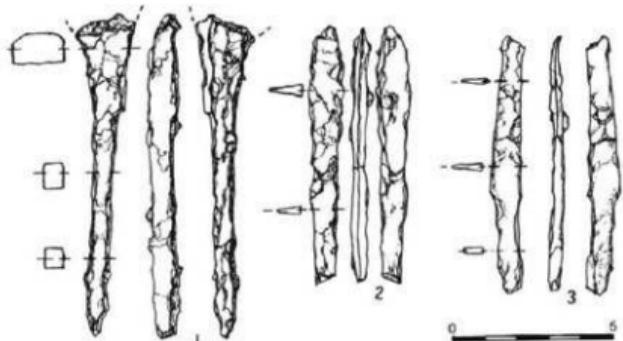
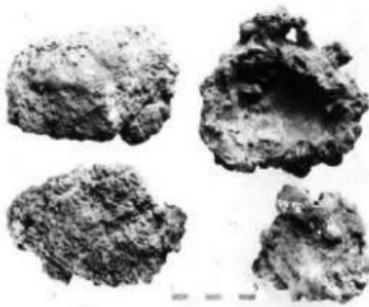


図98 出土鉄器実測図

図99 出土の鉄滓



## V まとめ

高遠北小学校舎建設予定地18,000平方mにわたって試掘を伴う分布調査を実施した結果、東西100m、南北180mの長方形台地の中央部分には遺構は全く見当らず、むしろ台地の南縁と北縁に沿って遺構の存在が明確に把握された。これを北遺跡と南遺跡に分割し、北遺跡においては分布調査の終末期に発掘調査を加え、平安時代の竪穴式住居址2軒を調査した。今次の確認調査は南遺跡 1,200平方m（東西40m・南北30m）の範囲を対象に徹底的な全面発掘を実施した。その調査状況は第Ⅲ章から第Ⅳ章まで詳述した通りであるがこれをお約すれば次のようになる。

- ① 繩文時代早期末葉に所属する竪穴式住居址 2軒、ならびに同期ロームマウンド 6基、および土塀 182穴。
- ② 平安時代に属する竪穴式住居址 5軒、ならびに柱列址 2軒、土塀 2穴、配石址 1基。方形土塀基 1基。

ここで、発掘時の所見にもとづき分布調査及び本調査を総括して若干の考察を加えてまとめたい。

### 1. 繩文時代早期の遺跡について

台地の南縁部即ち南遺跡の西部分に発見された、いわゆる天神山式土器を伴う住居址二軒は学界初見のものである。第1号住居址と第7号住居址は約10mを距って南北方向に並列していたがその形態は共に不整規円形プラン、規模も径 3.5m 内外の小規模なもので柱穴も不規則で、屋内炉も認められない点、全く軸を一にしている。加えて周辺に多数の土塀を伴っていた。また石礫は主として五角形を呈した形態であり、屋内及周辺に全面磨痕のある枕大の平石数箇を伴った点も同じで、調理は主として屋外で行われた形跡が認められる。

搬出した土器は、いわゆるオセンベ土器、または薄手細線指痕文土器と命名されたもので天神山（註1）貝塚において把握され、最近同郡塙屋遺跡において縦分された塙屋式第1類・第2類土器（註2）に固定し得る土器群を主体とし、これに関東地方の花積下層式系統の土器および燃糸文を施した機織土器が若干量伴出している。この共存関係は、静岡県駿東郡長泉町中峰遺跡（註3）の土器組成に類似しており、天神山貝塚や塙屋遺跡とはや、傾向が異っているように思われる。この共在関係は、諏訪地方では茅野市柄宿岩陰遺跡にも認められ、当伊那谷地域においては、伊那市伊勢並遺跡（註4）でも同様な傾向が認められた。また塙屋式土器は、駒ヶ根市赤穂舟山遺跡（註5）の小竪穴遺構から出土しており、南箕輪村北高根遺跡（註6）からも出土している。また、本遺跡調査終了してから1ヶ月後に発掘調査された上伊那郡飯島町七久保、籠田遺跡（註7）においては数軒の竪穴式住居址及び土塀群に伴って本例第1群の土器が多く出土している。また、前期初頭と見做される大集落址、宮田村中越遺跡（註8）薄手・細線指痕文土器群には本例第1群の土器は全く出土していない。

薄手細線指痕文土器の原郷土は静岡県と愛知県の県境海岸地帯と見られるが、この土器文化を担った人々が中部山岳地帯のしかも赤石渓谷の奥深い地点まで進出してきているのは何に由来す

るものであろうかまことに興味深いものがある。しかも本例においては関東系の早期末土器を伴っているのはその経路について十分検討を加える性質をもっている。なお最近判明してきている宮田村中越遺跡や源訪郡原村阿久遺跡(註9)に見られる縄文前期最初頭の大集落の発現は、従来の通説を打破しなければならないほどの性格を持っているが、本例はその前駆的な状態を示すものであり、今後の考究に期待したい。

住居址群に伴うと見られるロームマウンドは、坑の中に何らかを埋納しその上に純粹のハードロームを盛りあげたものであることが判明した。祭祀もしくは埋葬による遺構と考えられる点も大きな収穫であった。

## 2. 平安時代遺構について

これらの遺構は本台地の北端部(北遺跡)において竪穴式住居址2軒、南端部において(南遺跡)5軒が発掘された。特に南遺跡の南端部に沿って東西方向に並列し、しかも、柱列址2棟を備えていた。ただし第4号址と第5号址、第3号址と第6号址は重複状態で2時期にわたって住居が営まれたことを示していた。いずれも方形プランを持つ竪穴式住居で西壁に石芯粘土製のカマドを備えていた。このうち、第2号住居址・第4号住居址・第3号住居址は11世紀前半の造営にかかるもの、第5号住居址と第6号住居址は9世紀後半造営にかかるものと推定される。その根拠は、出土土師器の器形の変化、及び、これに伴う灰釉陶器の器質の変化、ならびに土師器・須恵器・灰釉陶器の組成の差位に依るのである。特に前者は、第2号址に見られるように土師器と灰釉陶器の組み合せで、須恵は伴わず、後者は、土師器7に対し須恵1・灰釉陶2の比率で共伴するのである。

なお、南遺跡においては造成地外の東部段丘上に土師器・須恵器等が散見しており住居址の存在が予察されることを付記しておく。

この時期の集落は、伊那谷地域においては数多く調査されている。上伊那では天竜川段丘上に存在する伊那市福島遺跡(註10)、箕輪町中道遺跡(註11)、同堂地遺跡(註12)、同木下北城遺跡(註13)等、国分式期の土師器を伴う数十戸以上の大集落があり、特に福島遺跡・中道遺跡においては、数十棟の柱列址を伴っており、農耕生産を主体としながらも牧馬飼育を濃厚に漂せる性格を表明している。

本遺跡の場合は、深い渓谷の小台地の縁辺に営まれた小集落で、近くに米作農耕の基盤は全く認められず、しかも、高地の台地上でたゞ畑作に依存する以外は、他に生産の要素は見当らない。この点、前述の諸遺跡とは全く成立条件を異にするのである。

この地域において、歴史的にまず大きな要素を占めるのは、古東山道の道筋と推定されていることがある。古東山道の開発は、大和朝廷が東北進出を目途として7世紀後半期に設定されたことは古代史上著名な事実である。その道筋は、美濃より神坂峠越えによって信濃国に入り、伊那谷を北道して諏訪に入り、大門峠越えにより千曲川谷に入り浅間山の東部・入山峠、いわゆる碓氷坂越えにより上野に向ったことは先の解明したところであるが、伊那から諏訪への道路はまだ未解明な点が多い。一志茂樹博士は、この道筋を駒ヶ根市附近で天竜川東側に渡り、さらに高遠町に出て三峠川を越え藤沢川谷を逆上して晴ヶ室を越え茅野市西端に出て神川を渡り蓼科高

原を登り、大門峠を越えて佐久郡に入った道筋を想定している。筆者もこれに同意するがその詳細について私見を加えるならば、駒ヶ根市附近の天竜川渡河地点は、末期古墳・赤須古墳群の存在する赤須附近であり、渡河して中沢・東伊那の段丘上を北進し、神奈備形の山形をもつ高島谷山西麓の火山峠を越え、伊那市富県いわゆる福地郷所在地を北進し河南に出てこで三峠川を渡り、高遠町から藤沢川渓谷を遡り、御堂垣外から東折して松倉に至り、古く猿田彦命を祀る破黄沢神社から北折して晴ヶ峯にはいのぼり、三角平峠を越えて茅野市酒室に出る道筋が想定できるのである。当道跡は藤沢川渓谷に突出した台地で、現国道は台地崖端の藤沢川氾濫原を通過しているがこの道筋は中馬制の栄えた杖突街道として近世に開発されたことは、明らかである。依って古道は、この宮の原台地を必らず越えなければならなかった。この集落の成立根拠は、古代の行政的な色彩が濃厚な東山道の管理のために中央政府の指示によって造営されたものではなかつたか。9世紀後半は古東山道の終末期であり、新しく延喜式に設定された道筋は天竜川西側を通過するのであるが、10世紀後半までこの道筋は使用された形跡をうかがうことができる。11世紀前半にこの集落が消滅したことは、古東山道のこの道筋が全く廃棄したこと意味している。今後、高遠地域の考古学的調査を詳細に進める必要が生じた。

以上、本発掘調査時の所見を中心に若干の考察を進めたが、本報告書が、埋蔵文化財の保存に当たり、発掘を伴う分布調査を実施し、遺構遺物の埋蔵状態を確認し、これをもとに記録保存のための発掘調査計画を綿密に樹てて実施された経緯を御承知願いたいと思う。これは今後各地に激化していくことが予想される緊急発掘に当たって関係者が必ず採るべき絶対の方策であるからである。

本調査報告を終わるにあたり、この調査について種々の御指導と御配慮をいただいた文化庁ならびに県教育委員会の担当官各位、分布調査から確認調査発掘事業に至るまで財政難な折にもかかわらず記録保存事業を推進された高遠町教育委員会に対し深い敬意を表するとともに、歴史的な御努力を集中し、報告書完成まで御協力いただいた調査員・事務局員各位に驚く御礼を申しあぐる次第である。

(調査団長 林 茂樹)

註1. 紅村弘「東海の先史遺跡一総括篇」昭38

註2. 増子康真「いわゆるオセンベ土器の研究」信濃29巻第4号 昭52.4

註3. 小野真一編「上長瀬跡群」昭46

註4. 林茂樹「上伊那郷の考古学調査」新設 上伊那教育会 昭40年

註5. 林茂樹「舟山遺跡緊急発掘調査報告書」及「舟山」駒ヶ根市教育委員会 昭47

註6. 宮沢恒之他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・南箕輪村1-2」日本道路公團・長野県教委 昭48

註7. 昭和52年6月 上伊那郡飯島町七久保所在の籠田遺跡が緊急発掘され、江坂輝弥氏と共に実見した。

註8. 藤沢宗平他「中越遺跡第五回緊急調査報告書」宮田村教育委員会 昭44

註9. 大沢和夫他「阿久通信」長野県考古学会 昭52

註10. 大川清「孤島遺跡」伊那市教育委員会 昭42

註11. 大沢和夫他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一箕輪町」日本道路公團・長野県教委 昭48年

註12. 註11に同じ。

註13. 林茂樹「木下北城遺跡」箕輪町教育委員会 昭52

# おわりに

## ——高遠町民のみなさまへ——

元長藤小学校長 宮の原遺跡調査団長 林 茂樹

新しく統合される高遠北小学校校舎建設用地の宮の原地籍は、むかしから遺跡地と知られ、永久に保存する予定でありましたが、学校校舎建築のためやむなく工事前に、学術的な発掘調査を行い、記録として保存することとなりました。この報告書は発掘調査のもとを詳しく記録したもので宮の原遺跡の状況を後世に伝えようとする意図のもとに刊行されたものであります。その内容記述が学術的な用語に満たされていて、みなさまにわかりにくいところがあるので、こゝではごく一般的に述べてみようと思います。

昭和52年の分布調査、昭和53年の本発掘調査を通じてこの宮の原の歴史が二つも明らかになってきたのです。

今から6,000年ほど前、縄文時代の早期とよばれる頃、この台地の南端部、塩供部落を見おろす二軒のたて穴式の家が建てられました。この人々は、天竜川をさかのぼってはるばる東海の海岸地帯からやってきた人々です。海岸の貝がらでもようをつけた尖り底の土器を網袋に入れて背中にくくりつけ、血のつながりをもった十数人の人々が一団となって幾山河を越えて、この赤石渓谷の奥、宮の原へやってきました。何の魅力があってこの奥深い山の中へやってきたのでしょうか。彼らの魅力としたことについては今のところ全く謎ですが、少くとも今のハイキングや旅行というようなものではないことははっきりしています。遊びのためでなく、命をつなぐための行動であったことは確かなのです。彼らは、この宮の原台地上に数年間は居続けたようです。たて穴の家のまわりに200箇の小さな「むろ」を掘り、赤土をたたき固めた「土まんじゅう」を6基も作っていたことなどは、彼らのたくましい生活力をものがたっているようです。

たて穴の家は2間四方もない小さな家で、たゞねとまりをするだけの家のようで、家の中で煮たきをした形跡はありません。恐らく家の外で調理や食事をしたようです。彼らが料理作りに使った石の調理台や土器も家の外にありましたから。土器は煎平葉子のようにとても薄くできていますので「オセンベ土器」とよばれていますが、この古いものは愛知県知多半島でたくさん発見されています。

しかし、家の跡は今までまったく発見されず、この人々は家を作らなかったのだといわれていました。その家が宮の原で初めて発見されたのです。この点、日本的に重要な遺跡であったといえましょう。高遠町としても、最古の家の跡が発見されたわけであります。

もうひとつは、今から1,000年ほど前のころ歴史でいう平安時代ですが、この台地の北端（北遺跡）と南端部（南遺跡）に十数軒のかやぶきの豊穴の家が建ち並んでいました。彼らは、土師器などの素焼きのうつわものだけでなく、美濃地方で作られた須恵器や灰釉陶器とよばれるりっぱなうつわものを使っていましたし、鉄のかま・くわ・かたなども持っていました。しかし、

稻を作る場所もないこの土地に何故住みついたのでしょうか。この理由として思い当たるものにこゝは古代東山道の道すじに当たる場所だということです。当時の政府は東北地方の開拓をすゝめるため、都からエゾ地に通ずる一級国道を作りました。エゾ征伐のための朝廷の軍隊が何万となくこの道を東北地方にくだって行きました。奈良の大仏を作るために必要な金・銀・銅は東北地方で生産され、この道を通ってぞくぞくと都に運ばれていきました。宮の原の台地は藤沢川の谷につき出していますし、古代の道すじは今の国道よりずっと高い処を通ったので、この台地は必ず通らなければならぬ場所としての条件を備えています。いわば、交通の要衝なのであります。この要衝を押さえるために政府の命令によって、道路の監視や管理のための任務を背負った人々が住んでいたのではないか。家の配置や2棟の高床式の建て物があったことは、そんなことを想像します。やがて、新しい東山道の駅制が発令されその道筋がかわると、この人々もいざれかに立ち去ったようです。この遺跡は、古代の日本の歴史とともにうつり変っているようです。

高遠町の歴史といえば、今から400年ほど前の高遠城が落城するころからだいぶはっきりしてきますが、それ以前は全くわかっていない。宮の原遺跡の調査は、これを遡って6,000年そして1,000年の前の高遠の地に住み、たくましい生活を営んだ人々の足跡を浮き彫りにしてくれたわけあります。

このような遺跡は、高遠の地のいたるところにたくさん埋蔵されています。しかし、最近は住宅建設や土地改良などで、機械力によってあとかもなく破壊されていくことが多く見受けられます。幾千年前から地中に埋存されたこの先祖の遺産をだいじにしていくことが、学問教育の源流をほこる高遠町民の方々の今後なきねばならぬひとつの大しことだと、つくづく思う次第です。この報告書がそのために役立つことと、この由緒ある土地に建てられる高遠北小学校のこどもたちが、人間としてたくましく生きてゆく力を身につけていけるよう念願しながら、この報告を終ります。（調査団長、元長藤小学校長 林 茂樹）

---

---

## 高遠宮の原遺跡発掘調査報告書

昭和53年3月20日

発 行 高遠町教育委員会  
長野県上伊那郡高遠町

印 刷 フオノウエ印刷  
長野県下諏訪町

---

---

